

横壁中村遺跡(8)

－ 縄文時代後期住居編1 －

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

2009

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

横
壁
中
村
遺
跡
(8)

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

二〇〇九

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

横壁中村遺跡(8)

— 縄文時代後期住居編1 —

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

2009

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



28区 18号住居、29区 3号住居全景 右手には吾妻川が流れる



18区 15号住居全景



18区 14号住居No.13



19区 27号住居No.59



18区 15号住居No.44

(裏)



29区 3号住居No.84



29区 4号住居No.43

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で15年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成8年度から発掘調査が開始され、平成20年度以降も調査の継続が予定されており、長期にわたる大規模な調査となりました。調査された遺構や遺物は本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大規模な、また長く続いた集落であったことを示しています。これら膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は平成16年度までに調査された縄文時代後期の住居跡17軒と住居に伴う列石、配石に関して報告を纏めることができました。本書は、八ッ場地域における縄文時代の集落構造を考える上でも、また長野県、新潟県地域との広域な交流を考える上でも重要な資料になるものと考えています。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で永らく活用されることを願い序といたします。

平成21年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

- 1 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う事前調査として、平成8年度から実施されている「横壁中村遺跡」の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集「久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」を第1冊目として既に7冊が刊行されている。本書は、平成16年度までに検出された横壁中村遺跡の縄文時代後期住居17軒及び住居に伴う列石、配石と出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第8冊目である。
- 2 横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
- 3 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年1月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、八ッ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団八ッ場ダム調査事務所が担当している。
- 4 発掘調査は平成8年4月1日から平成18年12月31日まで実施し、平成20年度以降も調査は継続する予定である。今回報告する住居、列石、配石の調査年度は、平成10年度から15年度に調査されたものである。詳細は、第3章第3節において遺構ごとに記している。
- 5 発掘調査組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 小寺弘之（平成8・9年度）、菅野 清（平成10年度）、小野宇三郎（平成11～17年7月まで）、高橋勇夫（平成17年7月～平成20年度）

常務理事 菅野 清（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～12年度）、吉田 豊（13・14年度）、住谷永市（平成15・16年度）、木村裕紀（平成17～20年度）、津金澤吉茂（平成20年度）

事務局長 原田恒弘（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～13年度）

事業局長 神保有史（平成14～16年度）、津金澤吉茂（平成17～19年度、20年度兼務）

管理部長 蜂巣 実（平成8年度）、渡辺 健（平成9・10年度）、住谷 進（平成11～13年度）、萩原利通（平成14・15年度）、矢崎俊夫（平成16年度）

総務部長 矢崎俊夫（17年度）、萩原 勉（平成18・19年度）、木村裕紀（平成20年度兼務）

調査研究部長 赤山容造（平成8～10年度）、神保有史（平成11年度）、能登 健（平成12・13年度）、中 隆之（平成14年度）、右島和夫（平成15・16年度）、西田健彦（平成17～19年度）、飯島義雄（平成20年度）

調査研究課長 岸田治男（平成8年度）、能登 健（平成9～11年度）、飯島義雄（平成12年度）、下城 正（平成13年度）

八ッ場ダム調査事務所長 水田 稔（平成14・15年度）、中 隆之（平成16～19年度）、中東耕志（平成20年度）

同調査研究部長 津金澤吉茂（平成14・15年度）、佐藤明人（平成16～18年度）、中東耕志（平成19年度）、中沢 悟（平成20年度）

同調査研究課長 下城 正（平成14年度）、齋藤和之（平成15・16年度）、中沢 悟（平成17年度）、佐藤明人（平成18年度兼務）

事務担当 井上 剛、大島信夫、岡島伸昌、小淵 淳、笠原秀樹、片岡徳雄、国定 均、小山建夫、坂本敏夫、鈴木理佐、須田朋子、野口富太郎、町田文雄、宮崎忠司、富沢よねこ、森下弘美、矢嶋知恵子、柳岡良宏、吉田有光、若林正人

調査担当 阿久津聡、飯田陽一、飯森康広、池田政志、石坂 聡、石田 真、今井和久、岡部 豊、小野和之、金井 武、唐沢友之、久保 学、児島良昌、小林大悟、齋藤幸男、藤原正洋、関 俊明、田村公夫、田村邦宏、友廣哲也、原 雅信、樺沢健二、廣津英一、藤巻幸男、松原孝志、森田真一、諸田康成、山川剛史、渡辺弘幸、柳貫邦男

6 整理期間は平成20年4月1日から平成21年3月31日である。

7 整理組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 高橋男夫

常務理事 津金澤吉茂、木村裕紀

ハツ場ダム調査事務所長 中束耕志、同事務所調査研究部長 中沢 悟、

同調査GL 飯田陽一、同整理GL 藤巻幸男

事務担当 ハツ場ダム調査事務所庶務GL 吉田有光、同事務所庶務 若林正人

整理担当 黒澤照弘

8 本報告書作成の担当

編 集 黒澤照弘

本文執筆 藤巻幸男（第4章「後期土器の時期区分と概要」、縄文土器観察表及び総量把握）

榑崎修一郎（第4章「横壁中村遺跡29区6号住居出土報告」）

黒澤照弘（縄文土器観察表、前記以外）

獣骨鑑定 榑崎修一郎

石材鑑定 渡辺弘幸

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

デジタル写真図版作成 牧野裕美、市田武子、安藤美奈子、酒井史恵、廣津真希子、荒木絵美、

高梨由美子、矢端真観、横塚由香、下川陽子

機械実測 田所順子、伊東博子、岸 弘子

委託関係 遺構測量および空中写真 株式会社測研

遺構図デジタル編集 株式会社測研

整理補助 安カ川京美、日野亮子、関 裕子、山崎崇史（5月まで）

黒岩美美枝、篠原了子、川津えみ子、山口郁恵

（株）歴史の杜（黒岩由美子、市村富美江、吉田豊子、石村千恵美、秋元悦子）

9 出土遺物及び記録簿・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

10 発掘調査及び本書の作成にあたっては、次の機関、諸氏から貴重なご教示やご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称省略、五十音順）

国土交通省関東地方整備局ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、大竹幸恵、金子直行、小池浩史、佐藤雅一、白石光男、寺内隆夫、寺内敏郎、富田孝彦、能登 健、萩原昭明、平林 彰、福島 永、古郡正志、松島榮治、柳田弘美、渡辺清志

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
- 2 調査範囲全域には4 m×4 mのグリッド網を設定し、各グリットの呼称は南東隅の交点を当てている。
- 3 遺構図の縮尺は、住居の全体にかかる図は1/60、住居内の炉など個別の図は1/30を基本としている。全体図は1/400または1/500（付図）を基本としている。これ以外の縮尺を用いる場合は、各図下部にスケールを示すか、各個別図に縮尺を記している。
- 4 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は土器、▲は石器を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。
- 5 住居敷石や列石、配石に使用された礫のうち、「鉄平石」「川原石」「丸石」については網掛けや斜線による表現をしている。また、縦位に設置された礫についても縦線で表現している。本報告で使用する「鉄平石」とは、調査区南南西に位置する岩峰、丸岩に代表される板状節理した礫のことである。「丸石」とは、球形に近い円礫のことである。調査時に使用されていたこの呼称を本報告でも使用する。
- 6 遺物図の縮尺は土器実測図は1/4、土器拓本は1/3、石器2/3または1/3を原則としたが、これ以外の縮尺を用いている場合も多い。各図下部にスケールを示すか、各遺物実測図に縮尺を記している。また、遺物位置図に示した実測図については1/6を基本としている。
- 7 石器実測図では、自然面は点描、磨り面と欠損面は白抜きとしている。
- 8 写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺としている。
- 9 今回の報告は、平成15年度までに調査された縄文時代後期住居を対象としている。遺構番号は、調査時の番号を用いている。調査区中央を北流する山根沢の東側で検出された縄文時代後期の住居について報告するものであるため、住居番号は連続していない。
- 10 遺構一覧表の記載では、完掘できなかった遺構の形状及び規模について（ ）を付けている。
- 11 遺物観察表、石器計測表の記載方法は下記の通りである。
 - (1) 遺物観察表は、「土器」と「石器」に分けて記載している。
 - (2) 土器の計測値の単位はcmである。
 - (3) 石器の計測値の単位はmmである。
 - (4) 石器の重量は全て残存値であり、単位はgである。
 - (5) 色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に基づいている。

目次

序

例言

凡例

目次

図版目次

写真目次

表目次

第1章 調査の方法と経過

- 第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第3節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第2章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第3章 発見された遺構と遺物

- 第1節 遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 第2節 基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 第3節 縄文時代後期の竪穴住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第4章 調査の成果とまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 200

縄文時代後期住居、列石、配石一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・ 197

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 225

抄録

写真図版

圖版目次

- 第1圖 年度別調査区全体図
 第2圖 道跡位置及沙周道跡跡図
 第3圖 横聖中村道跡基本土層
 第4圖 横聖中村道跡全体図
 第5圖 18区 縄文時代後期住居全体図
 第6圖 18区 11号住居 (1)
 第7圖 18区 11号住居 (2)
 第8圖 18区 11号住居 (3)
 第9圖 18区 11号住居出土遺物 (1)
 第10圖 18区 11号住居出土遺物 (2)
 第11圖 18区 11号住居出土遺物 (3)
 第12圖 18区 11号住居出土遺物 (4)
 第13圖 18区 13号住居 (1)
 第14圖 18区 13号住居 (2)
 第15圖 18区 13号住居出土遺物 (1)
 第16圖 18区 13号住居出土遺物 (2)
 第17圖 18区 14号住居 (1)
 第18圖 18区 14号住居 (2)
 第19圖 18区 14号住居出土遺物 (1)
 第20圖 18区 14号住居出土遺物 (2)
 第21圖 18区 14号住居出土遺物 (3)
 第22圖 18区 14号住居出土遺物 (4)
 第23圖 18区 15号住居 (1)
 第24圖 18区 15号住居 (2)
 第25圖 18区 15号住居 (3)
 第26圖 18区 15号住居 (4)
 第27圖 18区 15号住居 (5)
 第28圖 18区 15号住居 (6)
 第29圖 18区 15号住居 (7)
 第30圖 18区 15号住居 (8)
 第31圖 18区 15号住居 (9)
 第32圖 18区 15号住居出土遺物 (1)
 第33圖 18区 15号住居出土遺物 (2)
 第34圖 18区 15号住居出土遺物 (3)
 第35圖 18区 15号住居出土遺物 (4)
 第36圖 18区 15号住居出土遺物 (5)
 第37圖 18区 15号住居出土遺物 (6)
 第38圖 18区 15号住居出土遺物 (7)
 第39圖 18区 15号住居出土遺物 (8)
 第40圖 18区 15号住居出土遺物 (9)
 第41圖 18区 15号住居出土遺物 (10)
 第42圖 18区 15号住居出土遺物 (11)
 第43圖 18区 15号住居出土遺物 (12)
 第44圖 18区 15号住居出土遺物 (13)
 第45圖 18区 15号住居出土遺物 (14)
 第46圖 18区 15号住居出土遺物 (15)
 第47圖 18区 15号住居出土遺物 (16)
 第48圖 18区 19号住居 (1)、31号配石 (1)
 第49圖 18区 19号住居 (2)
 第50圖 18区 19号住居 (3)、31号配石 (2)
 第51圖 18区 19号住居 (4)、5・6号列石 (1)、31 (3)・32 (1) 号配石
 第52圖 18区 5・6号列石 (2)、32号配石 (2)
 第53圖 18区 5・6号列石 (3)
 第54圖 18区 19号住居 (5)、5・6号列石 (4)、31 (4)・32 (3) 号配石
 第55圖 18区 31 (5)・32 (4) 号配石
 第56圖 18区 19号住居出土遺物 (1)
 第57圖 18区 19号住居出土遺物 (2)
 第58圖 18区 5号列石出土遺物 (1)
 第59圖 18区 5 (2)・6 (1) 号列石出土遺物
 第60圖 18区 6号列石出土遺物 (2)
 第61圖 18区 6号列石出土遺物 (3)
 第62圖 18区 6号列石出土遺物 (4)
 第63圖 18区 6号列石出土遺物 (5)
 第64圖 18区 6 (6)、5・6 (1) 号列石出土遺物
 第65圖 18区 5・6号列石出土遺物 (2)
 第66圖 18区 31・32号配石出土遺物
 第67圖 19区 縄文時代後期住居全体図
 第68圖 19区 27号住居 (1)、18区 23号配石 (1)
 第69圖 19区 27号住居 (2)、18区 23号配石 (2)
 第70圖 19区 27号住居 (3)
 第71圖 19区 27号住居 (4)、18区 23号配石 (3)
 第72圖 19区 27号住居出土遺物 (1)
 第73圖 19区 27号住居出土遺物 (2)
 第74圖 19区 27号住居出土遺物 (3)
 第75圖 19区 27号住居出土遺物 (4)
 第76圖 19区 27号住居出土遺物 (5)
 第77圖 19区 27号住居 (6)、18区 23号配石 (1) 出土遺物
 第78圖 18区 23号配石出土遺物 (2)
 第79圖 18区 23号配石出土遺物 (3)
 第80圖 18区 23号配石出土遺物 (4)
 第81圖 19区 40号住居 (1)
 第82圖 19区 40号住居 (2)
 第83圖 19区 40号住居 (3)
 第84圖 19区 40号住居 (4)
 第85圖 19区 40号住居出土遺物 (1)
 第86圖 19区 40号住居出土遺物 (2)
 第87圖 19区 40号住居出土遺物 (3)
 第88圖 28・29区 縄文時代後期住居全体図
 第89圖 28区 16号住居
 第90圖 28区 16号住居出土遺物
 第91圖 28区 17号住居
 第92圖 28区 17号住居出土遺物 (1)
 第93圖 28区 17号住居出土遺物 (2)
 第94圖 28区 18号住居 (1)、10・11号列石 (1)、16号配石 (1)
 第95圖 28区 18号住居 (2)、10・11号列石 (2)、16号配石 (2)
 第96圖 28区 18号住居 (3)、16号配石 (3)
 第97圖 28区 18号住居出土遺物 (1)
 第98圖 28区 18号住居 (2)、10・11 (1) 号列石出土遺物
 第99圖 28区 11号列石 (2)、16号配石 (1) 出土遺物
 第100圖 28区 16号配石出土遺物 (2)
 第101圖 28区 20号住居 (1)
 第102圖 28区 20号住居 (2)
 第103圖 28区 20号住居出土遺物 (1)
 第104圖 28区 20号住居出土遺物 (2)
 第105圖 28区 20号住居出土遺物 (3)
 第106圖 28区 20号住居出土遺物 (4)
 第107圖 29区 縄文時代後期住居
 第108圖 29区 3号住居 (1)
 第109圖 29区 3号住居 (2)
 第110圖 29区 3号住居 (3)
 第111圖 29区 3号住居出土遺物 (1)
 第112圖 29区 3号住居出土遺物 (2)
 第113圖 29区 3号住居出土遺物 (3)
 第114圖 29区 3号住居出土遺物 (4)
 第115圖 29区 3号住居出土遺物 (5)
 第116圖 29区 3号住居出土遺物 (6)

第117回	29区 3号住居出土遺物 (7)	第138回	29区 6号住居出土遺物 (1)
第118回	29区 3号住居出土遺物 (8)	第139回	29区 6号住居出土遺物 (2)
第119回	29区 3号住居出土遺物 (9)	第140回	29区 6号住居出土遺物 (3)
第120回	29区 3号住居出土遺物 (10)	第141回	29区 6号住居出土遺物 (4)
第121回	29区 3号住居出土遺物 (11)	第142回	29区 6号住居出土遺物 (5)
第122回	29区 3号住居出土遺物 (12)	第143回	29区 6号住居出土遺物 (6)
第123回	29区 4号住居 (1)、1・2号列石 (1)	第144回	29区 6号住居出土遺物 (7)
第124回	29区 4号住居 (2)、1・2号列石 (2)	第145回	29区 7号住居
第125回	29区 4号住居出土遺物 (1)	第146回	29区 7号住居出土遺物
第126回	29区 4号住居出土遺物 (2)	第147回	29区 8号住居 (1)
第127回	29区 4号住居出土遺物 (3)	第148回	29区 8号住居 (2)
第128回	29区 4号住居出土遺物 (4)	第149回	29区 8号住居出土遺物 (1)
第129回	29区 4号住居出土遺物 (5)	第150回	29区 8号住居出土遺物 (2)
第130回	29区 4号住居出土遺物 (6)	第151回	29区 18号住居 (1)、6号配石 (1)
第131回	29区 4号住居出土遺物 (7)	第152回	29区 18号住居 (2)、6号配石 (2)
第132回	29区 1号列石出土遺物 (1)	第153回	29区 18号住居出土遺物 (1)
第133回	29区 1 (2)・2号列石出土遺物	第154回	29区 18号住居出土遺物 (2)
第134回	29区 6号住居 (1)	第155回	29区 18号住居出土遺物 (3)
第135回	29区 6号住居 (2)	第156回	29区 6号配石出土遺物 (1)
第136回	29区 6号住居 (3)	第157回	29区 6号配石出土遺物 (2)
第137回	29区 6号住居 (4)	第158回	横壁中村遺跡集 縄文時代後期住居時期別配置図

写真目次

P.L.1	1	1	1	1	1	P.L.9	1	18区 15号住居遺物出土状況 (北東から)
P.L.2	1	調査区と周辺の景観 (北から)					2	18区 15号住居遺物出土状況 (北から)
	2	28区 遺構出土状況 (西から)					3	18区 15号住居全景 (北東から)
	3	18・19区 遺構出土状況 (北西から)					4	18区 15号住居出入り口部 (北から)
	4	29区 遺構出土状況					5	18区 15号住居出入り口部遺物出土状況 (西から)
	5	18区 遺構出土状況 (北東から)				P.L.10	1	18区 15号住居出入り口部遺物出土状況 (南西から)
P.L.3	1	18区 11号住居検出状況 (北西から)					2	18区 15号住居遺物出土状況 (南西から)
	2	18区 11号住居遺物出土状況 (北西から)					3	18区 15号住居柱1・6確認状況 (北西から)
	3	18区 11号住居内埋土状況 (南西から)					4	18区 15号住居柱1・3確認状況 (北西から)
	4	18区 11号住居跡全景 (南西から)					5	18区 15号住居柱3・6確認状況 (北東から)
	5	18区 11号住居全景 (北西から)					6	18区 15号住居柱1・検出状況 (南から)
P.L.4	1	18区 11号住居全景 (北から)					7	18区 15号住居柱1・2検出状況 (北西から)
	2	18区 11号住居出入り口部 (北から)					8	18区 15号住居柱3・4検出状況 (北から)
	3	18区 13号住居検出状況 (西から)				P.L.11	1	18区 15号住居柱6・8検出状況 (東から)
	4	18区 13号住居全景 (東から)					2	18区 15号住居出入り口部 (北東から)
	5	18区 13号住居全景 (西から)					3	18区 15号住居柱穴出土状況 (南から)
P.L.5	1	18区 13号住居出入り口部検出状況 (東から)					4	18区 15号住居出入り口部遺物出土状況 (南から)
	2	18区 13号住居出入り口部検出状況 (北から)					5	18区 15号住居出入り口部柱12・13検出状況 (南から)
	3	18区 13号住居跡全景 (東から)						
	4	18区 13号住居跡方全景 (西から)				P.L.12	1	18区 15号住居跡方方全景 (南西から)
	5	18区 14号住居全景 (北から)					2	18区 15号住居出入り口部方形石割1 (北から)
P.L.6	1	18区 14号住居焼土確認状況 (北から)					3	18区 15号住居出入り口部方形石割1 (東から)
	2	18区 14号住居床下埋土状況 (北から)					4	18区 15号住居出入り口部方形石割1 (北から)
	3	18区 14号住居跡方方全景 (北から)					5	18区 15号住居跡方方全景 (南から)
	4	18区 15号住居検出状況 (南から)				P.L.13	1	18区 15号住居跡方方検出状況 (南から)
	5	18区 15号住居出入り口部検出状況 (北から)					2	18区 5・6号列石検出状況 (東から)
	6	18区 15号住居検出状況 (南西から)					3	18区 19号住居検出状況 (南東から)
	7	18区 15号住居出入り口部 (北東から)					4	18区 19号住居出入り口部 (北東から)
	8	18区 15号住居全景 (北東から)					5	18区 19号住居出入り口部付蓋 (北東から)
P.L.7	1	18区 15号住居全景 (北東から)					6	18区 19号住居出入り口部、31号配石 (南東から)
	2	18区 15号住居遺物出土状況 (西から)					7	18区 19号住居跡セクション (南西から)
P.L.8	1	18区 15号住居内埋土状況 (北から)					8	18区 19号住居内埋土遺物 (南西から)
	2	18区 15号住居跡全景 (北から)				P.L.14	1	18区 19号住居内埋土遺物 (南西から)
	3	18区 15号住居遺物出土状況 (西から)					2	18区 19号住居、5・6号列石、31・32号配石全景 (北から)
	4	18区 15号住居遺物出土状況 (北西から)					3	18区 19号住居全景 (北西から)
	5	18区 15号住居遺物出土状況 (西から)					4	18区 32号配石検出状況 (北から)
	6	18区 15号住居遺物出土状況 (西から)					5	18区 32号配石全景 (北から)
	7	18区 15号住居遺物出土状況 (東から)				P.L.15	1	18区 19号住居跡方方全景 (北西から)
	8	18区 15号住居遺物出土状況 (北東から)						

	2	18区 19号住居、5・6号列石、31・32号配石全景 (北東から)		2	29区 3号住居セクション (北東から)
P.L16	1	19区 27号住居検出状況 (南東から)		3	29区 3号住居北側周壁部壁 (北から)
	2	19区 27号住居遺物出土状況 (西から)		4	29区 3号住居南側周壁部壁 (北西から)
	3	19区 27号住居遺物出土状況 (南東から)		5	29区 3号住居検出状況 (南西から)
	4	19区 27号住居遺物出土状況 (北から)		6	29区 3号住居出入り口部付近 石柵出土状況 (北から)
	5	19区 27号住居敷石検出状況 (北西から)		7	29区 3号住居伊勢全景 (北西から)
	6	19区 27号住居柱4セクション (北から)	P.L27	1	29区 3号住居伊勢セクション (南西から)
	7	19区 27号住居柱6セクション (北東から)		2	29区 3号住居伊勢内埋設土器除去後の状況 (南西から)
	8	19区 27号住居柱穴出土状況 (西から)		3	29区 3号住居柱5出土状況 (北西から)
P.L17	1	19区 27号住居伊勢セクション (西から)		4	29区 3号住居柱4出土状況 (北西から)
	2	19区 27号住居伊勢全景 (東から)		5	29区 3号住居掘り方検出状況 (南から)
	3	19区 27号住居伊勢セクション (西から)		6	29区 3号住居石柵出土状況 (北東から)
	4	19区 27号住居伊勢内埋設土器 (南から)		7	29区 3号住居掘り方セクション (東から)
	5	19区 27号住居、18区23号配石全景 (南東から)		8	29区 3号住居掘り方セクション (東から)
P.L18	1	19区 27号住居、18区23号配石 (北から)	P.L28	1	29区 3号住居掘り方セクション (南西から)
	2	19区 27号住居出入り口部、18区23号配石 (南西から)		2	29区 3号住居下1・2号列石検出状況 (南西から)
	3	19区 27号住居出入り口部柱17・18検出状況 (南から)		3	29区 4号住居検出状況 (北東から)
	4	19区 27号住居出入り口部 (東から)		4	29区 4号住居遺物出土状況 (北から)
	5	19区 40号住居確認状況 (南東から)		5	29区 4号住居敷石出土状況 (西から)
	6	19区 40号住居碑出土状況 (南東から)		6	29区 1・2号列石全景 (南西から)
	7	19区 40号住居碑出土状況 (北東から)		7	29区 1・2号列石全景 (北から)
	8	19区 40号住居碑出土状況 (西から)	P.L29	1	29区 4号住居出入り口部 (西から)
P.L19	1	19区 40号住居遺物出土状況 (西から)		2	29区 4号住居出入り口部 (東から)
	2	19区 40号住居北側碑出土状況 (北西から)		3	29区 4号住居全景 (東から)
	3	19区 40号住居伊勢、3号土器埋設遺構 (南西から)		4	29区 4号住居全景 (南から)
	4	19区 40号住居出入り口部セクション (南西から)		5	29区 4号住居伊勢検出状況 (西から)
	5	19区 40号住居全景 (北西から)		6	29区 4号住居伊勢全景 (西から)
P.L20	1	19区 40号住居出入り口部柱14~17セクション (南東から)		7	29区 4号住居伊勢内埋設土器除去後の状況 (南から)
	2	19区 40号住居出入り口部柱1・14~17検出状況 (南から)		8	29区 4号住居掘り方セクション (南西から)
	3	28区 16号住居検出状況 (南から)	P.L30	1	29区 4号住居全景 (南東から)
	4	28区 16号住居機土確認状況 (南東から)		2	29区 4号住居全景 (南西から)
	5	28区 17号住居検出状況 (北から)	P.L31	1	29区 6号住居検出状況 (東から)
	6	28区 17号住居機土検出状況 (西から)		2	29区 6号住居出入り口部 (西から)
	7	28区 18号住居、10・11号列石全景 (南から)		3	29区 6号住居出入り口部付近 (東から)
	8	28区 11号列石立石 (北西から)		4	29区 6号住居機土 (南東から)
P.L21	1	28区 18号住居全景 (南東から)		5	29区 6号住居機土完備状況 (南から)
	2	28区 18号住居敷石検出状況 (北西から)	P.L32	1	29区 6号住居検出状況 (北から)
	3	28区 18号住居伊勢全景 (北西から)		2	29区 6号住居骨片出土状況 (南から)
	4	28区 18号住居全景 (南西から)		3	29区 6号住居原敷石検出状況 (南東から)
	5	28区 18号住居掘り方検出状況 (西から)		4	29区 6号住居敷石検出状況 (北東から)
P.L22	1	28区 18号住居、10・11号列石、16号配石全景 (西から)		5	29区 6号住居伊勢確認状況 (北東から)
	2	28区 18号住居、10・11号列石、16号配石全景 (南西から)		6	29区 6号住居伊勢検出状況 (北西から)
P.L23	1	28区 16号配石セクション (南西から)	P.L33	1	29区 6号住居出入り口部付近方形石四隅 (南東から)
	2	28区 16号配石全景 (北西から)		2	29区 6号住居伊勢内埋設土器 (北西から)
	3	28区 20号住居全景 (南東から)		3	29区 6号住居伊勢内埋設土器除去後の状況 (北東から)
	4	28区 20号住居伊勢全景 (南東から)		4	29区 6号住居伊勢、方形石四隅 (北西から)
	5	28区 20号住居内土器埋設遺構 (南から)		5	29区 6号住居伊勢セクション (南西から)
P.L24	1	28区 20号住居内土器埋設遺構 (東から)		6	29区 6号住居柱7付近炭化材出土状況 (南東から)
	2	28区 20号住居掘り方全景 (南東から)		7	29区 6号住居柱7炭化材出土状況 (南から)
	3	29区 住居、列石、配石検出状況 (西から)	P.L34	1	29区 6号住居柱4出土状況 (南西から)
	4	29区 3号住居全景 (南東から)		2	29区 6号住居柱5出土状況 (西から)
	5	29区 3号住居全景 (北東から)		3	29区 6号住居柱6出土状況 (北西から)
P.L25	1	29区 3号住居全景 (南東から)		4	29区 6号住居柱8出土状況 (北から)
	2	29区 3号住居全景 (北西から)	P.L35	1	29区 6号住居全景 (北東から)
P.L26	1	29区 3号住居敷石検出状況 (東から)		2	29区 6号住居全景 (南東から)
			P.L36	1	29区 6号住居掘り方検出状況 (南西から)

2	29区 6号住居掘り方セクション (南西から)	P.L.52	19区 27号住居出土遺物 (1)
3	29区 6号住居柱7セクション (南西から)	P.L.53	19区 27号住居出土遺物 (2)
4	29区 6号住居柱7炭化材出土状況 (南西から)	P.L.54	19区 27 (3) 号住居、18区 23 (1) 号配石出土遺物
5	29区 8号住居棟出状況 (南から)	P.L.55	18区 23号配石出土遺物 (2)
6	29区 8号住居全景 (南西から)	P.L.56	18区 23 (3) 号配石、19区 40 (1) 号住居出土遺物
7	29区 8号住居が全景 (南西から)	P.L.57	19区 40 (2) - 28区 16・17 (1) 号住居出土遺物
8	29区 8号住居が内埋設土器 (南から)	P.L.58	28区 17 (2) - 18号住居、10・11号列石出土遺物
P.L.37	1 29区 18号住居、16号配石全景 (南西から)	P.L.59	28区 16号配石、20 (1) 号住居出土遺物
2	29区 18号住居遺物出土状況 (南西から)	P.L.60	28区 20号住居出土遺物 (2)
3	29区 18号住居遺物出土状況 (西から)	P.L.61	28区 20 (3) - 29区 3 (1) 号住居出土遺物
4	29区 18号住居全景 (南から)	P.L.62	29区 3号住居出土遺物 (2)
5	29区 18号住居が全景 (南から)	P.L.63	29区 3号住居出土遺物 (3)
P.L.38	18区 11号住居出土遺物 (1)	P.L.64	29区 3号住居出土遺物 (4)
P.L.39	18区 11 (2) - 13 (1) 号住居出土遺物	P.L.65	29区 3号住居出土遺物 (5)
P.L.40	18区 13 (2) - 14 (1) 号住居出土遺物	P.L.66	29区 3 (6) - 4 (1) 号住居出土遺物
P.L.41	18区 14 (2) - 15 (1) 号住居出土遺物	P.L.67	29区 4号住居出土遺物 (2)
P.L.42	18区 15号住居出土遺物 (2)	P.L.68	29区 4号住居出土遺物 (3)
P.L.43	18区 15号住居出土遺物 (3)	P.L.69	29区 4 (4) 号住居、1 (1) 号列石出土遺物
P.L.44	18区 15号住居出土遺物 (4)	P.L.70	29区 1 (2) - 2号列石、6 (1) 号住居出土遺物
P.L.45	18区 15号住居出土遺物 (5)	P.L.71	29区 6号住居出土遺物 (2)
P.L.46	18区 15号住居出土遺物 (6)	P.L.72	29区 6号住居出土遺物 (3)
P.L.47	18区 15号住居出土遺物 (7)	P.L.73	29区 6号住居出土遺物 (4)
P.L.48	18区 15号住居出土遺物 (8)	P.L.74	29区 7 - 8号住居出土遺物
P.L.49	18区 19号住居、5号列石 (1) 出土遺物	P.L.75	29区 18号住居出土遺物 (1)
P.L.50	18区 5 (2) - 6 (1) 号列石出土遺物	P.L.76	29区 18 (2) 号住居、16号配石出土遺物
P.L.51	18区 6 (2) - 5・6号列石、31・32号配石出土遺物		

表目次

表1	岡辺道跡一覧表
表2	横壁中村道跡 道構数集計表
表3	横壁中村道跡東側 縄文時代後期住居、列石、配石一覧表
表4	横壁中村道跡 縄文時代後期住居出土土器総量一覧表
表5	横壁中村道跡 縄文時代後期住居出土土器総量一覧表
表6	横壁中村道跡 縄文時代後期住居時期別一覧表

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時。現在は東吾妻町）がその実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成6年3月18日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の実施に関する協定書」を締結し、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定されたことによって開始されることとなった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受諾契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が開始された。平成6年度から実施されている調査は、工事中進入路に関するものが主体となっている。これは、ハッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する進入路や仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成6年度に締結された協定によると、調査対象遺跡は48遺跡であり、そのうち本遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は7遺跡であった。横壁地区でも工事中進入路を原因とする調査が先行され、平成6年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。

本遺跡も平成6年度に締結された協定での対象遺跡であり、平成6・7年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成8年度から調査が行われ

ることになった。工事中進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過」にゆずる。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年4月1日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する7遺跡のうち上野IV遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教育委員会との協議の結果、本遺跡に統合されることになった。

第2節 調査の経過

横壁中村遺跡の調査は平成8年度より行われた。平成8年度から11年度までは工事中進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これらの工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度ごとの調査範囲は、図示した通りであるが、年度をまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査の終了した年度を表している。各年度ごとの調査経過を調査日誌を元に抜粋する。

平成8年度 調査事務所を設置、調査区への進入路等の造成工事等を行ったため、本調査は7月1日開始となった。本年度は担当者は3名による1班での調査であり、27地区18・28区を中心とする調査を実施した。進入路が狭く重機を導入できず、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。平成9年度 前年度の継続である18・28区の調査とともに、その西側にあたる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は4名の配置であったが、7月から9月まで1名は久々戸遺跡の調査にまわっている。調査面積は約5,000

第1章 調査の方法と経過

m²である。11月3・4日に当事業団主催の平成9年度出土文化財巡回展示会が八ッ場地区で実施され、遺物・パネルを出展した。

平成10年度 平成8・9年度の継続調査である。担当者は年度当初4名の配置であったが、うち1名は林地区及び西久保1遺跡の調査を担当することになったため、実質3名の1班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200m²であった。

平成11年度 前年度までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は5名、2班の体制であったが、うち2名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは3名、1班での調査となった。4月29日に前年度に検出された大型敷石住居、環状柱穴などを現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに本年度は調査区西側の28地区11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

また、平成11年8月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、8月22日まで調査を休止した。本年度で工事用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は約6,200m²である。

平成12年度 工事用進入路部分の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者7名による2班体制で開始する予定であったが、1班は林地区の調査に対応することとなり、残る1班も、西久保1遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、調査区南側にあるゲートボール場の東側にパンザマスト(気象用観測マスト)が設置されるにあたって42mを併せて調査し、縄文時代後期の住居、中世の土坑を検出している。調査面積は約1,800m²であった。

平成13年度 発掘作業員の雇用システムが変更になり、調査開始が6月4日となった。本年度の調査対象地は遺跡の中央を流れる山根沢の両側にあり、18・19・20区にあたる。工事が予定されている山根沢の西側は、工事行程にあわせて調査が終了した

地区を順次、工事側に引き渡ししながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類の保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月1日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は当初の約6,200m²から約5,200m²となった。

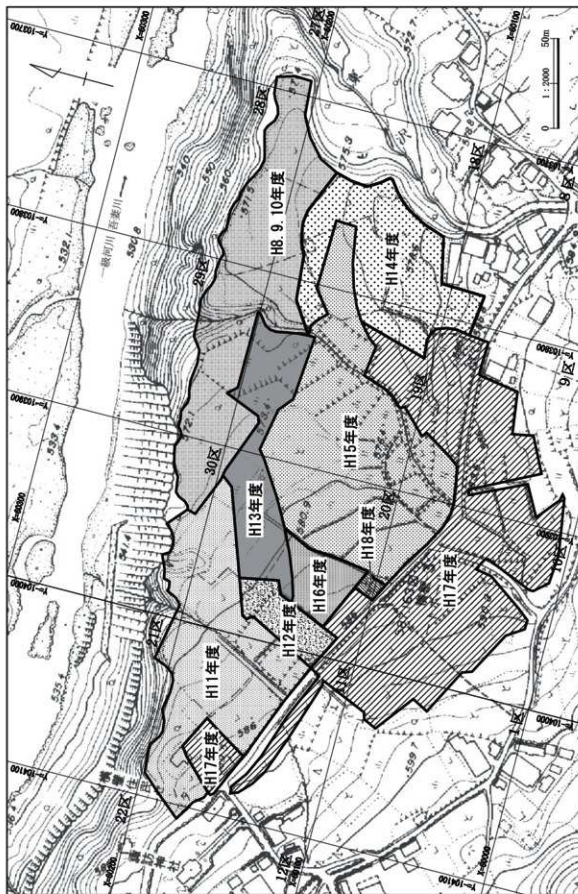
平成14年度 本年度より当事業団八ッ場ダム調査事務所が開所し、八ッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は7名の2班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に調査を行った。本年度は6月から8月にかけて担当者2名が西ノ上遺跡へ、10月からは担当者4名が上郷岡原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月下旬から希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積は約5,400m²であった。

平成15年度 前年度の継続調査の18区と9・10・19・20区の調査を行った。担当者は当初6名の配置であったが、4月から6月は担当者2名が久々戸遺跡の調査を行い、7月から1名が整理事業への異動となった。また11月からは1名が増員となった。調査は前年度からの継続であり、18区の埋没河道の調査から開始し、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、一部次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000m²であった。

平成16年度 前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者2名による1班体制である。本年度で代替地護岸工事部分の調査終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより、調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は約1,400m²であった。

平成17年度 国道145号線部分の調査を、担当者5名による2班体制で行った。調査区は9・10区である。調査面積は約14,000m²であった。

平成18年度 10・20区の平成17年度調査で経塚が検出された地点を中心に、4月1日から4月13日



第1図 年度別調査区全体図

まで担当者3名による短期間の調査を実施した。調査面積は188㎡である。

第3節 調査の方法

(1) 調査の手順

調査は初めはバックフォーによる表土掘削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡の現況は畑、水田、道路であった。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものは個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがあつた。縮尺については、住居・土坑・配石等は1/20、炉・埋甕・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・列石等規模の大きい遺構については1/40、全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、ハルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、主に35mmモノクローム及びリバーサル、6×7判モノクロームで撮影し、一部6×7判リバーサルも状況に応じて使用している。

(2) 遺跡の名称

本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと大字名+小字名となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成8年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかし、この「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、「長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—」（長野原町教育委員会 1990）によると本遺跡は

「観音堂遺跡」「上野IV遺跡」の範囲に入っている。さらに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記されているが記述によるとこれは本遺跡の南西にあたり、位置がやや異なる。このように、本遺跡の遺跡名に関しては若干混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により、「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。

(3) 調査区の設定

調査区の設定については、1994（平成6）年度から始まった八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。この方法については、「長野原一本松遺跡（1）」（群埋文2002）に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大木木の東部付近を基点（ $X = 58000.00$ 、 $Y = -97000.00$ ）とした。そして、まずこの基点から1km四方の地区（大グリッド）を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の区（中グリッド）に区分し、東南隅から西に1～10区、次の列を11～20区のように100区に区分した。さらに各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは、東南を基点に西へA～Y、北へ1～25までの番号を付し、組み合わせでグリッド名としている（例：20区A-1）。

本遺跡の調査区は、地区では「27地区」を中心とし、一部「28地区」にかかり、「区」では27地区は「9・10・17・18・19・20・28・29・30区」、28地区は「1・11区」に相当している。遺構名称は、区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体と考えられる区の番号を付している。

第2章 遺跡の環境

八ッ場地区の遺跡の立地する環境については、既刊の「長野原一本松遺跡（1）」（群理文 2002）および「八ッ場ダム発掘調査集成（1）」（群理文 2003）に詳述されているので、そちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および歴史的環境について概観するにとどめる。

第1節 地理的環境

横壁中村遺跡の位置する長野原町は群馬県北西部に位置し、草津町、嬭恋村、六合村、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。

この地域の地質形成に大きな影響を与えたものには吾妻川と浅間山がある。吾妻川は長野県境の鳥居峠付近に源を発し、東流して渋川市で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。本遺跡はこの合流点から約43km遡った地点であり、また、本遺跡から約6km下流には「関東の耶馬溪」の異名をとる国指定名勝である吾妻渓谷がある。浅間山は町域の南西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。

本遺跡の立地する長野原地域の段丘面は、この吾妻川と浅間山の活動の影響を多分に受けて形成されている。本地域の段丘面は最上位、上位、中位、下位の4段丘面に区分されるが（長野原町 1993）、このうちの最上位段丘と上位段丘の2面は約21,000年前の黒斑火山の噴火に伴い発生し、当時の吾妻川河床を数10m以上の厚さで埋めつくした応承泥流堆積物がその基盤となっている。最上位段丘は吾妻川からの比高が約80～90mであり、泥流流下後にほとんど浸食されずに段丘面となったもの、上位段丘は比高が約60～65mであり泥流堆積物を浸食し形成されている。これら2面の上には、約11,000年前に噴出した浅間-草津黄色軽石（As-YPk）を含む関東ローム層が堆積している。中位段丘は比高

30m前後で、本遺跡のある横壁地区などこの地域に最も広く分布している。低位段丘は比高約10～15mである。

横壁中村遺跡は、この長野原町の北東に位置し、先述のように吾妻川右岸の中位段丘上に立地する。標高は約570mで、調査区北を流れる吾妻川とは比高差40mほどの急峻な段丘崖により隔てられている。また南側には山地が迫り、西は深沢、東は東沢という2本の沢によって深く区画され、調査区のはほぼ中央にも山根沢という小沢が北流している。遺跡のある中位段丘面上は、これらの沢からもたらされた堆積物や土砂崩れなどによる崖堆積物が、吾妻川により形成された段丘礫層上を覆い、吾妻川に向かい緩く傾斜している。調査区内の比高差は約15mである。調査区内には、この崖堆積物の夥しい数の礫が存在し、調査を困難なものとした一因でもあった。中位段丘については、離水時期は明らかでないが、本遺跡の調査では段丘礫層上に関東ローム層及びAs-YPkの堆積が認められないことから、それ以降の離水と考えられる。

浅間山の活動では、本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけては大きな影響はないと考えられるが、その後も活動は続き、遺跡内にその痕跡をとどめている。平安時代の住居の覆土の中には、浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められるものも存在し、また江戸時代の1783（天明三）年には、噴火とともに泥流を発生させ、流域に甚大な被害を及ぼしている。本遺跡においても、この天明泥流により埋没した烟跡が検出されている。

また、本遺跡の景観を語る上で欠かせないのが丸岩の存在である。調査区の南南西約1.5kmに位置する標高1,124mをはかる岩峰で、100万年ほど前に活動していた普峰火山の溶岩由来と考えられている。南側を除いた3方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、本遺跡から望むと巨大な門柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には、柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形状とあわせ見た独特の景観は、この遺跡に暮らした

人々がランドマークとして仰ぎ見たであろうことを推測するにたる奇峰と言える。

第2節 歴史的環境

横壁中村遺跡のある長野原町は明治22年の町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた塚場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畑1岩陰遺跡が発掘調査された。

昭和62年からは八ッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183箇所の遺跡地が確認された。(その後の調査で、平成17年3月現在では214遺跡に増加している。)これ以降、町教委による発掘調査が行われている。さらに平成6年からは八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査を元に横壁中村遺跡の歴史的環境を概観してみる。

旧石器時代 長野原町内では、これまでの調査において旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間-草津黄色軽石(As-Ypk)によって厚く覆われており、この下位を調査することは、掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現状である。ただし、柳沢城跡(14)から遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の割器が1点出土しており、より山間部の遺跡などでこれらの堆積物の下位の調査が実施できれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

縄文時代 長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば現在までに214箇所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

まず、草創期の遺跡としては石畑1岩陰遺跡(2)があげられる。奥行4m、幅40mの大規模な岩陰

遺跡であり、草創期から前期、そして晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代草創期には長野原町域に人間が生活していたことを証明する遺跡である。早期では、檢木II遺跡(27)で多くの燃糸文系土器、表裏縄文土器、スタンプ形石器とともに、堅穴住居が31軒検出されている。この住居の中には石囲いを持つものがあるとともに、重複関係を示すものもあることから、同時期の集落における定住性について新たな視点を与えるものと思われる。また、立馬I遺跡(17)でも燃糸文系の住居と戸下層式期の住居が検出されている。この立馬I遺跡では、早期から晩期までのほぼ全ての時代の遺物が出土している。山間の狭隘な谷に位置するこの遺跡からこのように長い時期にわたって遺物が出土していることは、この地域の縄文時代の環境を復元する上で興味深い事実である。さらに同時期の遺物は幸神遺跡(28)、長野原一本松遺跡(29)、坪井遺跡(35)でも出土が確認されている。

前期の遺跡は、坪井遺跡で花積下層式期の住居と土坑が検出されているほか、長野県域を主体とする塚田式、北陸地方の極楽寺式と関連すると思われる遺物が出土している。また暮坪遺跡(38)では二ツ木式期の住居が検出されている。さらに長飲II遺跡(41)では黒浜式期の住居が検出されている。本遺跡でも関山式、あるいは黒浜式期と思われる遺物が出土しているが、量は少なく、遺構も確認されていない。前期後半では、檢木II遺跡で諸磯式期の住居が、川原湯勝沼遺跡(10)で同時期の土坑が検出されており、本遺跡でも同時期の土坑が確認されている。

中期になると遺跡数、遺構量ともに大幅に増加する。本遺跡では勝坂式期の住居から中期末まで200軒以上の住居が確認されている。長野原一本松遺跡でも本遺跡と同様に大集落が形成されている。ただその始まりは本遺跡より若干時期が下り、中期後半の加曾利E式期になってからと思われる。この時期の特徴としては他地域との密接な交流がうかがえる

点である。本遺跡の出土遺物でも、関東系の土器とともに中部高地系、特に長野県東部との強い関連がうかがえる土器が多く、さらに新潟県方面から持ち込まれたと思われる土器も少なくない。これは長野県一本松遺跡でも新潟県方面から伝播したと思われる大木系の土器が出土していることや、坪井遺跡でも新潟県域で主体的な「棚倉類型」などの資料が出土していることから確認できよう。

後期になると長野県一本松遺跡の集落はやや縮小の傾向にあるが、本遺跡は加曾川B式期まで継続する。この時期の住居では、柄鏡形敷石住居の検出例が多く、本遺跡や長野県一本松遺跡のほか、林中原I遺跡(20)、上原IV遺跡(21)、向原遺跡(32)、櫛II遺跡(37)、滝原III遺跡(44)、古原敷遺跡(45)、上郷岡原遺跡(48)などで確認されている。

晩期になると遺跡数は減少する傾向にあり、前述した石畑I岩陰遺跡以外ではほとんど確認されていなかったが、最近の調査により検出例が増加している。川原湯勝沼遺跡では水II式土器による再葬墓と思われる土坑が検出され、久々戸遺跡(31)では水式土器の鉢形土器、立馬I遺跡でも長野県北部を主体とする女鳥羽川式土器の浅鉢が出土している。本遺跡でも平成15年度の調査で晩期終末から弥生時代初頭と思われる埋設土器、土坑が確認された。検出できた遺構数は少ないが、土器片を中心とする遺物量は多く、県内でも有数のものと考えられる。弥生時代 長野県町域では、この時期の遺跡は極めて希薄である。遺構では、本遺跡で甕形土器を埋設した前期の再葬墓の可能性のある土坑が検出されているほか、立馬I遺跡で前期から中期の住居と中期の甕棺墓が検出されている程度である。また、榎木III遺跡(25)、坪井遺跡、外輪原I遺跡(42)などで前期から中期の遺物、二社平遺跡(4)で後期の遺物が出土している。

古墳時代 1938(昭和13)年に編纂された『上毛古墳総覧』によれば、長野県町には大津の鉄塚と与喜屋の五輪塚の2基の古墳が存在するとされている。しかし、現在までに発掘調査によって確認され

たものは一つもなく、現時点では東吾妻町の岩島地区が古墳の西限である。集落としては、林宮原遺跡(22)で1軒、下原遺跡(23)で1軒の住居が確認されているが、いずれも小規模なものである。

奈良・平安時代 奈良時代の遺跡は極めて希薄で、分布調査ではわずかに羽根尾II遺跡(40)で確認されたに過ぎない。これに対して平安時代の遺跡は多く、97遺跡が確認されている。主な遺跡としては横壁中村遺跡、花畑遺跡(18)、林宮原II遺跡、榎木II遺跡、長野県一本松遺跡、向原遺跡、坪井遺跡などが挙げられる。各遺跡での住居の検出数は数軒と少ないが、榎木II遺跡では、9世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居が約30軒とまとまって検出されており、「三家」や「長」と書かれた墨書土器の存在とともに注目される。この地域の平安時代の集落は、榎木II遺跡にみられるように9世紀後半に出現し10世紀前半に消滅するものがほとんどであり、特徴的である。特徴的な遺物としては、町立中央小学校の敷地から出土した瓦塔があり、塔の最上層にあたる屋根部がほぼ完成で残っているもので、現在は同小学校に保管されている。

中世 この時期の資料は柳沢城跡、丸岩城跡(15)、長野原城跡(33)、羽根尾城跡(39)などの城館跡が中心であったが、近年の発掘調査により遺跡が増えつつある。西久保I遺跡(13)、立馬I遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡(24)、榎木II遺跡、長野県一本松遺跡などで遺構が確認されている。下原遺跡では畑跡や建物跡、二反沢遺跡では区画跡のほか、羽口や鉄滓など製鉄関連遺跡も検出されている。本遺跡においても、石垣を伴う館跡が検出されており、柳沢城跡との関連で注目される。また平成12年度には踏査により金花山岩跡(9)が新たに見つかった。

近世 近世の遺跡の大部分は1783(天明三)年の浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物により埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡(7)、西ノ上遺跡(8)、川原湯勝沼遺跡、下田遺跡(19)、中棚II遺跡(26)、尾坂遺跡(30)、久々戸遺跡

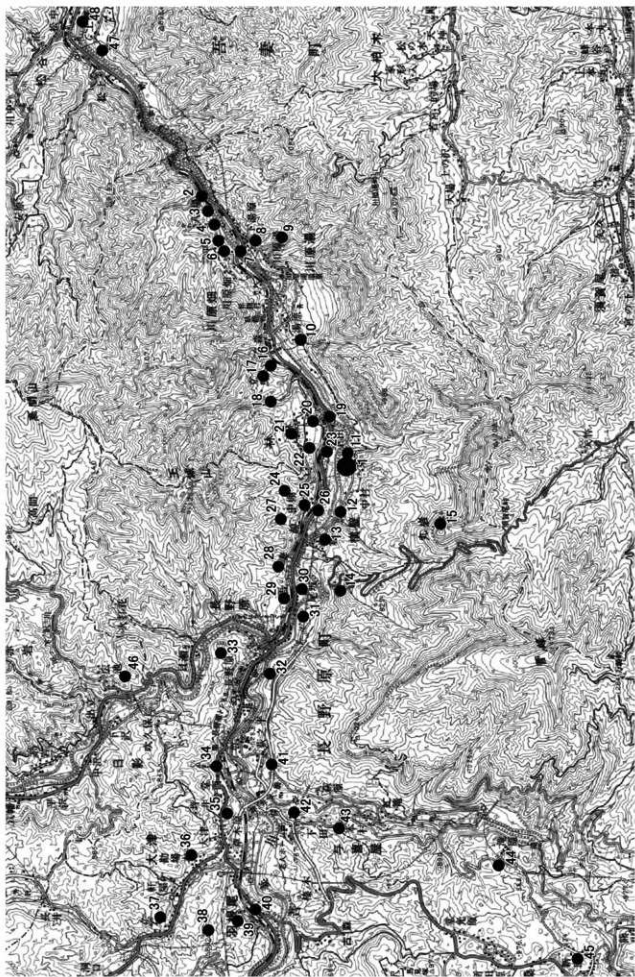
第2章 遺跡の環境

(31)、小林家屋敷跡 (34) などが挙げられる。多くは畑を中心とする生産遺跡であるが、東宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡、小林家屋敷跡などでは民家跡も検出されている。特に小林家屋敷跡は、農業・酒造業を営みこの地域の分限者と呼ばれた小林家の屋敷の一部が検出されたものであり、文献との照合もなされ重要な発見である。本遺跡からは墓跡や泥流堆積物により埋没した畑跡が検出されている。また平成17年度調査では経塚を検出し、多数の一字一石経が出土している。

泥流下から発見される遺跡は、旧地表面がそのまま保存されているものが多く、集落や生産域の構成要素及びその関連性を具体的に読み取ることが可能である。泥流の発生した日時が明らかであるため、遺物の時期をほぼ限定することも可能であり、また、通常では残らない建築部材や漆器などの植物遺存体の検出例も多い。今後水没地の調査が進展するにつれ、泥流に埋没した遺跡の調査はさらに増えることが予想され、近世農村史研究に多大な寄与をもたらすものと考えられる。

参考文献 (番号は表1の文献欄に対応)

1. 六合村 1973 「六合村誌」
2. 群理文 1998 「長野久々戸遺跡」第240集
3. 群理文 2002 「長野原一本松遺跡 (1)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
4. 群理文 2003 「ハツ場ダム発掘調査集 (1)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
5. 群理文 2003 「久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
6. 群理文 2004 「久々戸遺跡 (2)・中棚II遺跡 (2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
7. 群理文 2005 「横壁中村遺跡 (2)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
8. 群理文 2005 「川原湯跡沼遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
9. 群理文 2006 「横壁中村遺跡 (3)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
10. 群理文 2006 「立馬II遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
11. 群理文 2006 「上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
12. 群理文 2006 「横壁中村遺跡 (4)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
13. 群理文 2006 「立馬I遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
14. 群理文 2007 「下原遺跡II」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
15. 群理文 2007 「三平I・II遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
16. 群理文 2007 「横壁中村遺跡 (5)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
17. 群理文 2007 「長野原一本松遺跡 (2)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
18. 群理文 2007 「上郷岡原遺跡 (1)」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
19. 群理文 1998 「年報17」
20. 群理文 2001 「年報20」
21. 群理文 2002 「年報21」
22. 群理文 2003 「年報22」
23. 群理文 2005 「年報23」
24. 群理文 2007 「年報26」
25. 群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 資料編」I
26. 堀野新一 1972 「群馬県百妻郡長野原町 塚場木遺跡調査 (概報)」
27. 富田幸彦 2000 「外輪原遺跡の弥生中期土器」『群馬考古学手帳』10
28. 長野原町 1976 「長野原町誌」上巻
29. 長野原町 1993 「長野原町の自然」
30. 長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局 1979 「石畑遺跡略報」
31. 長野原町教育委員会 1990 「長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査報告書一」
32. 長野原町教育委員会 1990 「棚II遺跡」
33. 長野原町教育委員会 1992 「長谷日遺跡・坪井遺跡」
34. 長野原町教育委員会 1996 「向原遺跡」
35. 長野原町教育委員会 1997 「滝原遺跡」
36. 長野原町教育委員会 2000 「坪井遺跡II」
37. 長野原町教育委員会 2001 「落坪遺跡」
38. 長野原町教育委員会 2004 「町内遺跡IV」
39. 長野原町教育委員会 2004 「林宮原遺跡II」
40. 長野原町教育委員会 2005 「小林家屋敷跡」



第2図 遷跡位置及び周辺遷跡図 (国土地理院1/50,000地形図「草津」使用)

第2章 遺跡の環境

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の主な内容	文献
1	横壁中村	長野原町横壁	本遺跡。	5、7他
2	石堀1岩陰	長野原町原原	県教委昭和53年度調査。縄文草創期から晩期の遺物と標骨が出土。	30
3	石堀	長野原町原原	事業団平成8・9・10年度調査。縄文前期包含層、弥生中期土坑、近世堀。	4
4	二杜平	長野原町原原	事業団平成8・10年度試掘。弥生後期土器片、近世堀。	15
5	三平1・II	長野原町原原	事業団平成16年度調査。縄文前期住居、中世建物、陥し穴多数。	4
6	上ノ平1	長野原町原原	事業団平成18・19年度調査。縄文中期中葉から後期住居、平安住居。陥し穴多数。	24
7	東宮	長野原町原原	事業団平成7・9・19年度調査。近世民家、堀。	4
8	西ノ上	長野原町原原	事業団平成14年度調査。近世堀。	6
9	金花山岩跡	長野原町原原	町教委・事業団により平成12年度に調査・確認。中世城跡。	
10	川原湯跡	長野原町原原	事業団平成9・16年度調査。縄文前期後半の土坑、晩期終末期の再葬墓、近世堀。	8
11	横壁跡	長野原町横壁	事業団平成6・7年度調査。縄文中期から後期の土器。楯先形尖頭器が出土。	4
12	山根Ⅱ	長野原町横壁	事業団平成10・13・18年度調査。縄文中期後半の住居、土坑。	21、24
13	西久保Ⅰ	長野原町横壁	事業団平成6・10・12年度調査。縄文中期末葉の敷石住居、土坑、中期の水場遺構。	4
14	柳沢城跡	長野原町横壁	町教委平成5年度調査。中世城跡、郭、堀切、土居等検出。	28
15	丸岩城跡	長野原町横壁	中世城跡。	28
16	立馬Ⅱ	長野原町林	事業団平成14年度調査。縄文時代中期初頭から後半の住居。	10
17	立馬Ⅰ	長野原町林	事業団平成13・14年度調査。縄文早期初頭、晩期の住居。弥生中期の住居、糞相墓。	13
18	花畑	長野原町林	事業団平成9～12年度調査。平安住居。陥し穴多数。	4
19	下田	長野原町林	事業団平成7年度調査。近世民家、堀。	4
20	中原Ⅰ	長野原町林	町教委平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。	38
21	上原Ⅳ	長野原町林	事業団平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。晩期後半の土器。近世水路。	23
22	林宮原	長野原町林	町教委15年度調査。古墳住居1軒。平安住居6軒。	39
23	下原	長野原町林	事業団平成12～16年度調査。古墳住居1軒。平安住居2軒。中世建物、近世堀。	5、14
24	二反沢	長野原町林	事業団平成12年度調査。中世区画、装鉄関連遺物。近世堀。	11
25	榎木Ⅲ	長野原町林	事業団平成10年度調査。縄文前期、中期の包含層。弥生中期の包含層。	4
26	中櫛Ⅱ	長野原町林	事業団平成11・15年度調査。近世堀、石垣、道など。	5
27	榎木Ⅱ	長野原町林	事業団平成12・13年度調査。縄文早期初頭の集落。前期、中期初頭の住居。平安住居、中世建物。	20、21
28	宍神	長野原町長野原	事業団平成8・9年度調査。縄文中期中葉から後半の住居。古代の可能性ある堀。	19
29	長野原一本松	長野原町長野原	事業団平成6～19年度調査。縄文中期後半から後期初頭にかけての拠点集落。	3、17
30	尾敷	長野原町長野原	事業団平成6・7・11・18・19年度調査。近世民家、堀。	4
31	久々戸	長野原町長野原	事業団平成9～15年度調査。縄文晩期土器。近世堀、道、竪立柱建物。	5、6
32	向原	長野原町長野原	町教委平成5年度調査。縄文中期から後期の住居。平安住居。	34
33	長野原城跡	長野原町長野原	中世城跡。	28
34	小林家屋敷	長野原町長野原	町教委平成14年度調査。近世礎石建物。土蔵、石垣。	40
35	坪井	長野原町大津	町教委平成3・10年度調査。縄文前期、中期住居。弥生土器。平安住居。	33、36
36	塚場木石器時代住居	長野原町大津	昭和29年調査。縄文中期後半の住居。群馬県史跡。	26
37	標Ⅱ	長野原町大津	町教委昭和63年度調査。縄文後期前半の敷石住居4軒。	32
38	暮坪	長野原町羽根尾	町教委平成12年度調査。縄文前期前半の住居。	37
39	羽根尾城跡	長野原町羽根尾	中世城跡。	28
40	羽根尾Ⅱ	長野原町羽根尾	奈良散布地。	31
41	長谷Ⅱ	長野原町与喜原	町教委平成12年度調査。縄文前期前半、中期後半の住居。	33
42	外輪原Ⅰ	長野原町与喜原	町教委平成7年度試掘。縄文前期後半の土器。弥生土器。	27
43	上ノ平	長野原町与喜原	縄文中期、後期の土器、石器類出土。	28
44	滝原Ⅲ	長野原町応桑	町教委平成8年度調査。縄文中期後半の住居。中期末葉の敷石住居。	35
45	古屋敷	長野原町応桑	昭和34年発見。縄文後期前半の敷石住居。	28
46	広池	六合村赤岩	群馬大学昭和44年度調査。縄文中期後半の住居。	1
47	上郷A	東吾妻町三島	事業団平成15年度調査。陥し穴多数。埴原土器出土。	6
48	上郷四原	東吾妻町三島	事業団平成14年度調査。縄文中期後半から後期前半住居。近世民家、堀。	18

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成18年度までの調査で竪穴住居230軒以上が確認されており、県内でも有数の大規模集落であることが判明しつつある。

遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「丸岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に負うところとなるが、冬には午後3時で日が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、間近にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは、縄文時代早期からで、19区の山根沢沿いで燃系文土器が少量出土している。前期では、初頭の花積下層式から諸磯c式までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝取式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており、土坑はいくつか確認されている。住居が出現するのは勝取式後半からである。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半になると山根沢の西側に配石墓群が形成され

る。この時期の集落の構成はまだはっきりしない。後期後半以後の様子を示す材料は少ないが、晩期終末期の遺物は多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つと言って良いだろう。

弥生中期前半期の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は、本遺跡に限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向である。

その後、本地域に集落が戻るのは9世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居が数軒確認され、炭化した床材が遺存する焼失住居跡も検出されている。

中世になると本地域には、海野一族が支配する「三原荘」が成立し、戦国時代にはその一系でもある真田氏が、甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には柳沢城と丸岩城があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴う中世の館が確認されている。また、その他に中世から江戸期の墓や経塚、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した畑も検出されている。

以上が本遺跡の概要であるが、遺跡の内容は多岐にわたるため、今回は、平成15年度までに山根沢東側で調査された縄文時代後期の竪穴住居について報告する。表2は現段階における本遺跡の遺構種別ごとにその数を集計したものである。本遺跡の整理は継続中であるため、今後も遺構数の変更される可能性があることをご了解いただきたい。

表2 横壁中村遺跡 遺構集計表 (平成8～16年度)

		9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計			9区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計	
竪穴住居		1	3	27	52	104	19	18	13	237	配石遺構				42	17	28	17	53	15	172	
土坑	縄文			86	110	272	11	21	28	528	列石遺構			7	4	5	12	4			32	
	弥生					4				4	集石遺構			1		4					5	
	平安				1	1				2	環状柱穴	縄文			2						1	3
	中世以降			161	134	170	2	1	4	472	柱穴	縄文			1					1		2
掘立柱建物	縄文			4		6		1		11		中世				1					1	
	中世				3	7				10	土	縄文			1	2	2		2	1	8	
埋設土器	縄文	2	23	9	27	4			2	67		中近世			12	6	16				34	
											埋設河道			1	5							6

第2節 基本土層 (第3図)

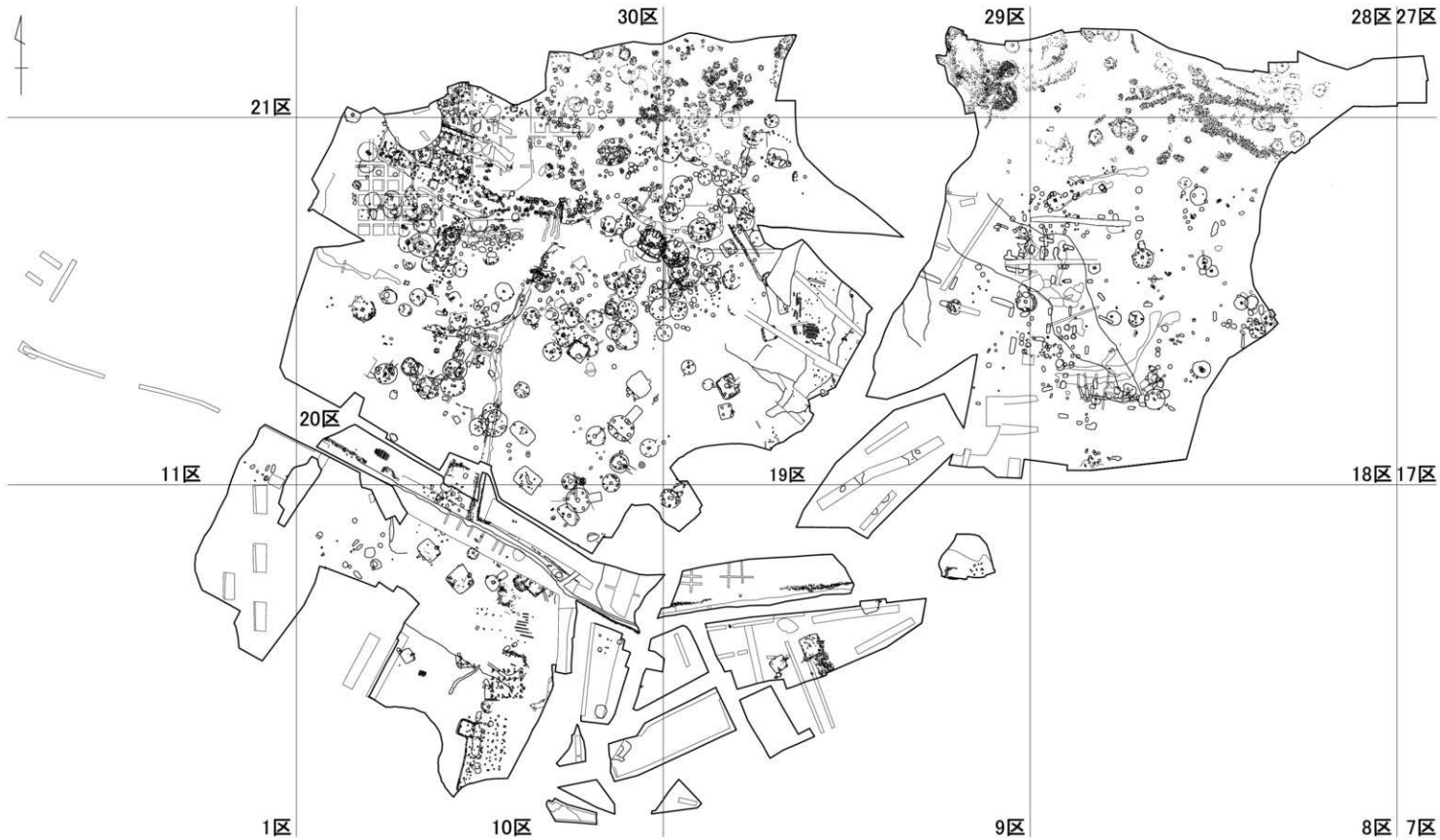
本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が礫り返し堆積して形成された、北向きの緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は、図に示したⅠ～Ⅹ層まで確認しているが、この10層が1箇所ですべて揃う

断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、あえて記入していない。

今回の報告対象となる縄文時代後期の遺構は、土層としてはⅤ・Ⅵ層に該当するが、第1章本文中で「地山の黄色砂質土」と呼んでいるのは、Ⅶ層に該当する。

I	Ⅰ層 表土 (耕作土)
II a	Ⅱa層 浅間A泥流
II b	Ⅱb層 浅間A軽石
II c	Ⅱc層 浅間A軽石下畑の耕作土
III	Ⅲ層 淡褐色土 軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区1号館付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた。
IV	Ⅳ層 灰黒褐色土 やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層としてはほとんど残っていない。
V	Ⅴ層 黄褐色土 やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曾利B式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅶ層ないしはローム層の2次堆積の可能性が高い。
VI	Ⅵ層 灰褐色土 締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫(山石)を含む。
VII	Ⅶ層 西側縁辺に特有な土壌で、層位はⅦ層と同じであり、沢沿いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土坑も確認されている。
VIII	Ⅷ層 黄褐色粘質土 崩落したローム層の2次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡では20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考えられる。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる。
IX	Ⅸ層 黒褐色粘質土 硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む。
X	Ⅹ層 黄色砂礫層 吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる。

第3図 横壁中村遺跡基本土層



第4図 横壁中村遺跡全体図

0 40m

第3節 縄文時代後期の竪穴住居

横壁中村遺跡では、縄文時代中期後半から後期後半を中心とした県内有数の大規模集落が検出され、これまでに縄文時代中期住居編として「横壁中村遺跡(2)」から「横壁中村遺跡(5)」の4冊が報告されている。本報告書は、縄文時代後期住居編として報告する。

本報告書では、平成10年度から平成15年度までに調査された、縄文時代後期住居について報告する。本報告書における遺構名称や遺構番号は、発掘調査時に認定した呼称を優先して掲載している。今回報告する住居は、調査区中央を北流する山根沢東側の18区、19区及び28区、29区で検出され、番号を付された縄文時代後期の住居及び住居に伴う列石、配石である。報告する住居は17軒、列石は6基、配石は5基を数える。

山根沢東側で検出された縄文時代後期住居の大半は、称名寺1式期から堀之内1式期までに収まる。堀之内2式期以降の住居については確認できていない。山根沢西側では堀之内2式期以降の住居が検出されており、山根沢東側と西側では、縄文時代後期の集落様相にも違いがあると思われる。また、本遺跡北側は遺構重複が顕著であり、より北側へ集落が広がることも想定できる。しかし、北側を東流する吾妻川による削平で、遺跡の広がりやその全容については判然としない。

本遺跡は、多年度に渡り多数の調査担当者が関わった遺跡である。遺構覆土の判別もし難く、遺構検出面に多数の礫があるなど、遺構確認でさえ容易にはできない状況であった。また、遺構重複も著しく、後世の畑地造成などによる階段状削平もあり、消失または一部壊された遺構も数多く考えられる。このことは住居であっても例外ではなく、検出状況が良好でないものも数多くあり、欠番も見られる結果となった。また、現場での資料に統一性がなく、確認できない資料も多数あった。解決できない課題も多く、結果注記のない断面図や出土位置に疑問が残

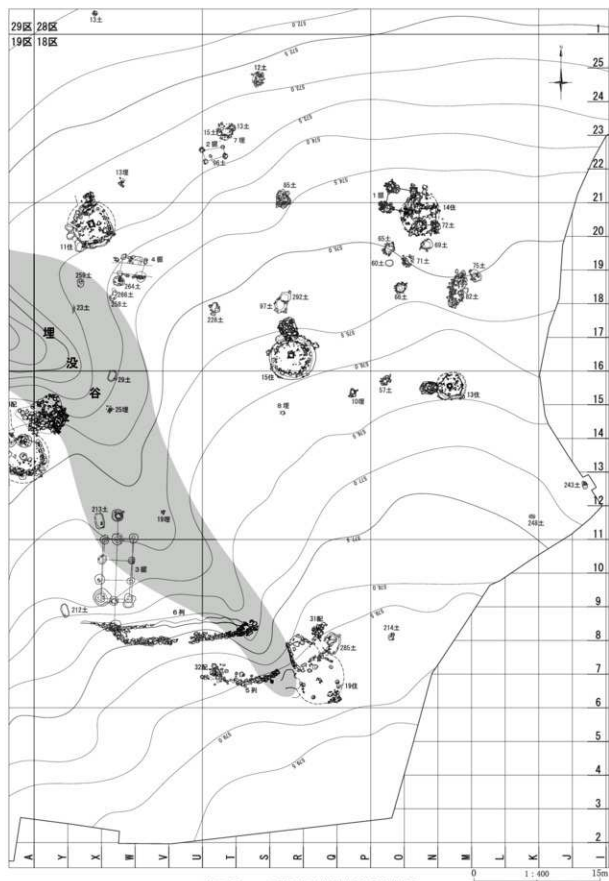
る遺物も見られた。判断材料が希薄なものについては、調査時の見解のまま掲載している。本報告書で扱う住居の詳細については「表3 横壁中村遺跡東側 縄文時代後期住居、列石、配石一覧表」に記載した。参照していただきたい。

本遺跡での縄文時代の住居認定は、炉の確認を持って決定することを基本とした。本遺跡では、縄文時代後期まで石囲炉を持つ住居が多数を占めていたが、調査区には多数の礫があり、地山の礫が遺構に伴う礫か判断に迷う場面も見られた。炉内に焼土が確認できない住居も多くあったため、炉石と認定したものは水洗いし、変色・劣化・剥落・亀裂・煤の付着など、被熱痕跡を確認した上で炉と判断し住居と認定した。ただし、多年度に渡る調査の中で、判断方法が不統一となった場面も見られた。

本遺跡では地山の黒褐色土を切り込んで住居が構築されているが、地山と住居覆土は近似した例が多く見分けることは困難であった。そのため、大半の出土遺物がグリッド扱いになった住居もあった。整理作業では、住居出土遺物と同地点で出土したグリッド出土遺物との接合関係を確認し、接合あるいは同一の遺物については住居に帰属させ報告している。

今回報告する住居には敷石住居が多く、出入り口部に列石や配石を伴う例も見られた。整理作業の結果、住居に伴うと判断された列石や配石も、調査時には住居とは異なる単独の列石や配石として扱われ調査されたものもあった。整理作業の中では、出土遺物の接合関係など、住居範囲も含めた再検討を行い、列石や配石と扱われた遺構でも明確な出入り口部に成るものについては住居として報告している。また、住居に伴う可能性の高い列石や配石については、住居とともに報告している。

住居の敷石や列石、配石に使用されている礫の中には、川原から運んだ「川原石」を使用した箇所が見られた。本遺跡と北側を東流する吾妻川とは比高差が40mほどもあり、急峻な段丘座で隔てられている。検出された遺構に見られる「川原石」は、意



第5図 18区 縄文時代後期住居全体図

図的に使用されていたものであろう。また、本遺跡の南南西約1.5kmにある岩峰、丸岩に代表される板状節理した礫、「鉄平石」を敷石として使用した住居も多く見られた。調査時には、この板状節理した礫を「鉄平石」と呼称していたため、本報告書でもその呼称を使用する。ほかにも、ほぼ球形に近い円礫である「丸石」も確認できた。遺構に使用された礫の中には、縦位に据えられていたものも確認できた。これらの礫の種類や使用状況については、遺構検出や確認の際の手掛かりにもなっている。また、礫の種類や使用状況は、調査時の資料を元に図上で網掛けや斜線にて表現している。ただし、調査時の資料がないものについては、整理担当者が写真を見て判断したものである。

本報告書では、出土遺物について総量把握を行っている。総量については表4、表5に詳しい。参照していただきたい。

以下、区を分け個別住居ごとに報告する。

1 18区の縄文時代後期住居

18区は、横壁中村遺跡の東側に位置する。調査区北側には吾妻川が東流し、東側には東沢が北流する。調査区は北西へ緩やかに傾斜した地形上に位置する。

18区で検出された縄文時代後期住居は5軒、住居に伴う列石は2基、配石も2基である。縄文時代後期においては、住居のほかにも12基の柱穴を持つ堀之内1式期の大型竪立柱建物や4基の柱穴を持つ竪立柱建物も検出されている。また、堀之内式期の墓坑と思われる土坑や土器埋設遺構が見られるなど、縄文時代後期の多様な集落様相については、これまでの報告からも明らかになってきている。

土器埋設遺構の中には、住居炉の可能性が高いものも見られた。また、まとまった遺物の出土量が見られたが、炉の確認ができなかったため住居に認定されなかった遺構もあった。土器埋設遺構のうち、炉の可能性が高いものについては、推定される住居

範囲を全体図に表現している。なお、竪立柱建物や土器埋設遺構、集石、焼土、土坑等の詳細については、『横壁中村遺跡(6)』及び『横壁中村遺跡(7)』に詳しい。参照していただきたい。

以下、個別住居ごとに報告する。

18区11号住居

調査年度 平成13・14年度

位置 W・X-19・20、X-21

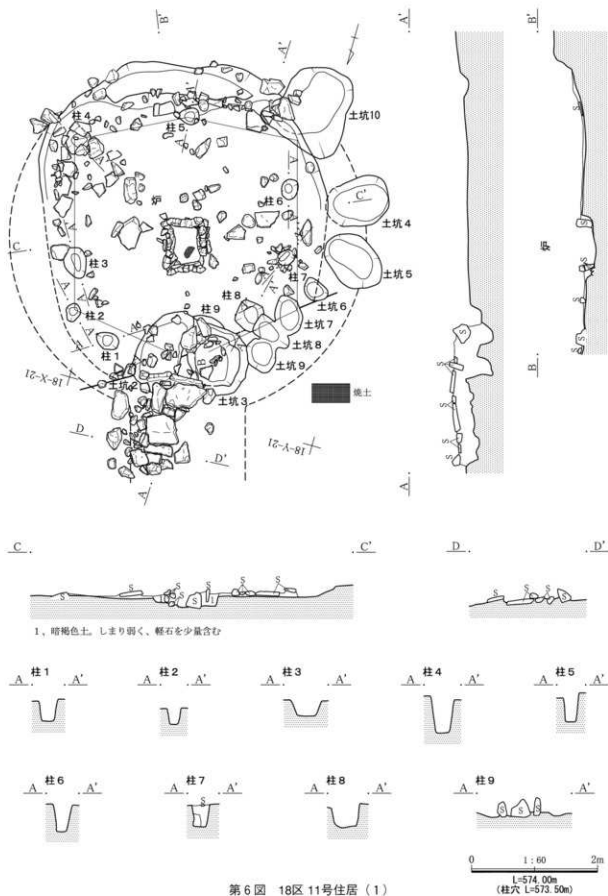
経過 調査は平成13年度に住居主体部から行われた。想定される主体部中央付近で方形石囲炉を検出したことから住居と認定された。だが、調査区域の関係により、出入り口付近の調査は次年度となった。平成14年度には、敷石を伴う出入り口が検出された。調査では、遺構覆土と地山との区別が難しく、主体部の柱穴も確認できないような状況であった。そのため、掘り方調査の中で柱穴を確認しようと試みたが掘りすぎてしまったようだ。

重複 なし

形状 柄鏡形敷石住居。主体部は、直径5.7mほどのやや歪んだ円形を呈するか。壁高は、南側の遺存状態の良い場所まで51cmほどであった。

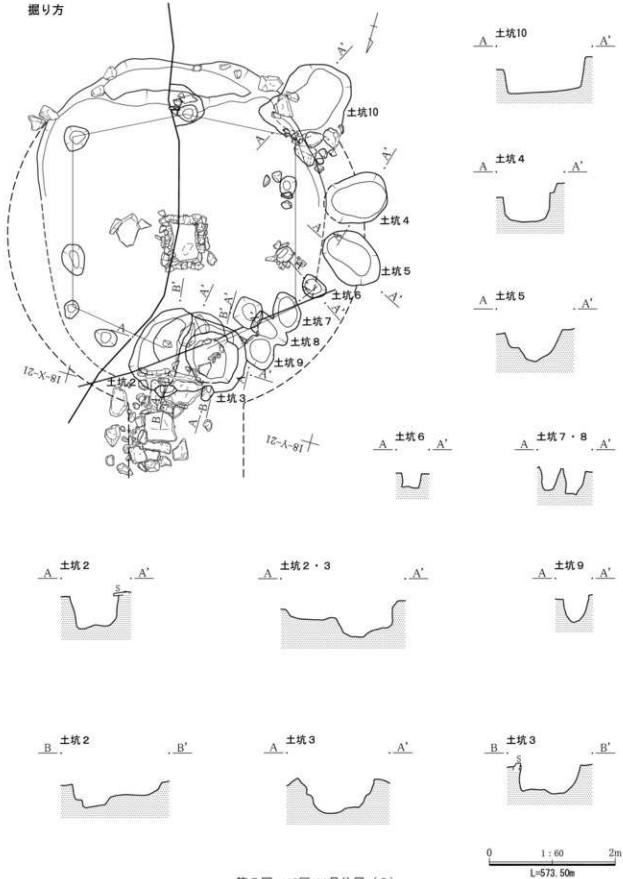
前述の調査経過の通り、調査では遺構検出もままならない状況であった。そのため、示した住居の形状も推測の域を出ない。本来の住居の形状は、破線の通り主体部が一回り大きく、7基の主柱穴を持つ柄鏡形であろうか。方形石囲炉に合うよう出入り口部がやや西側を向いていた可能性も考えられる。ここでは、判断材料も少ないため、現場での所見も考慮し図版を掲載している。地形が低く傾斜している北側に、比較的良好な遺存状態であった出入り口部が取り付く。出入り口部の規模は、長軸1.5m×短軸1.8mほど。ほぼ北を向くように見えるが、一部は欠損していると考えている。

住居主体部と出入り口の間は、扁平な礫が横長、縦位に据えられ、境目を成しているような出土状況であった。同様の形態は、18区13号住居・15号住



第6図 18区11号住居(1)

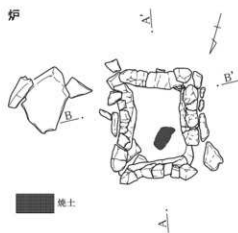
掘り方



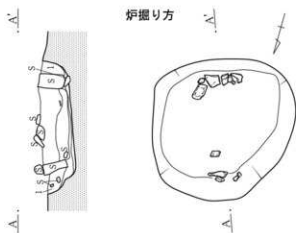
第7図 18区 11号住居 (2)

第3章 発見された遺構と遺物

炉

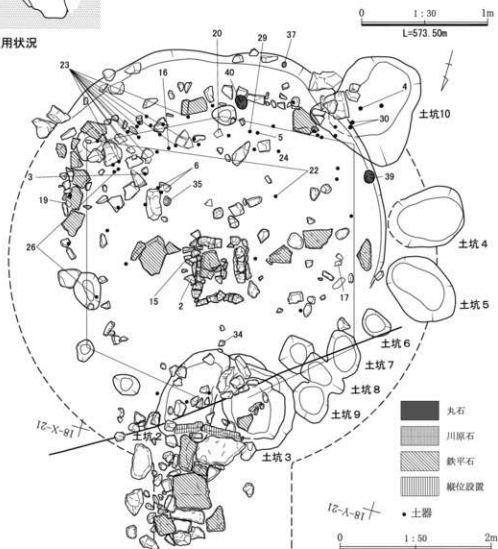


炉掘り方

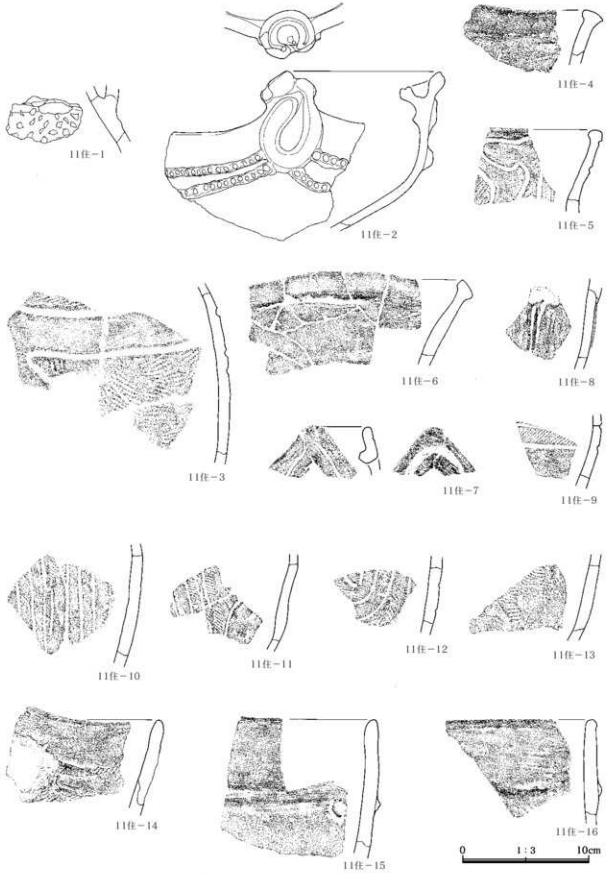


1. 暗褐色土。しまり固く、軽石を少量含む。

礫使用状況

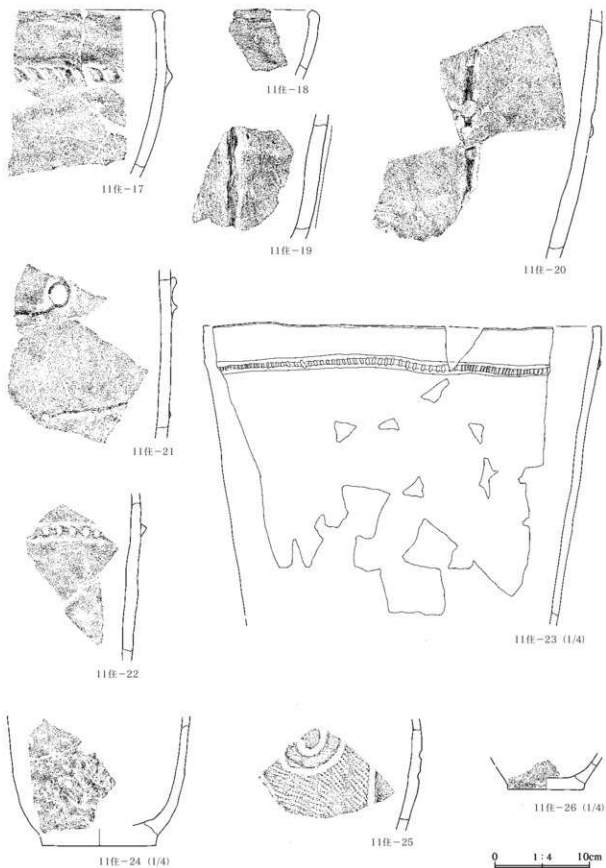


第8図 18区11号住居(3)

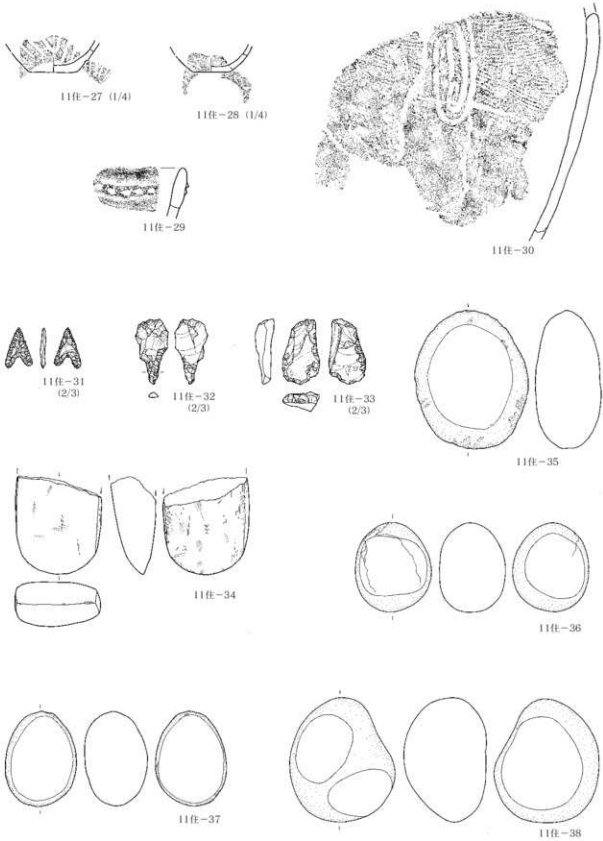


第9図 18区11号住居出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

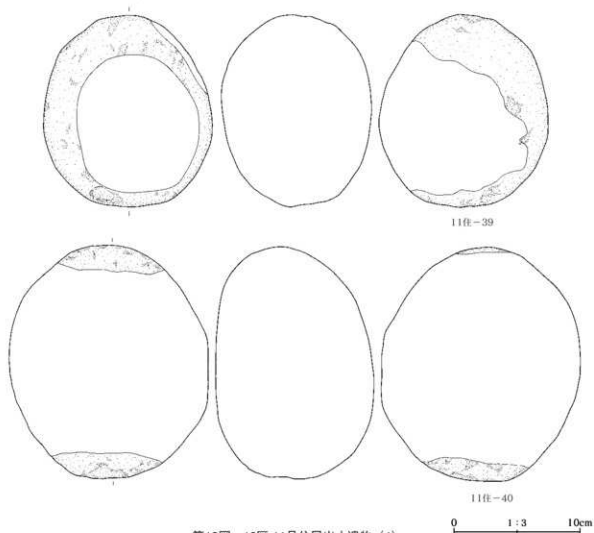


第10図 18区 11号住居出土遺物 (2)



第11図 18区11号住居出土遺物(3)





第12図 18区11号住居出土遺物(4)

居、29区6号住居・18号住居でも確認された。

床面 遺存状態は良好でないが、主体部に鉄平石などの扁平な礫が散見できる。想定される支柱穴間では、礫が敷き詰められたように検出されている。主体部には敷石が施されていた可能性があるだろう。散見できる小型の礫は、敷石の隙間に詰められていたものか。

出入り口部には鉄平石などの扁平な礫が見られ、原位置を保っているように思われる。一部は欠損しているようだが、良好な遺存状態であり、出入り口部にも敷石が施されていたと考えられる。ただし、平面図上に表現した礫の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

炉 方形石囲炉。大型の扁平礫4石ほどを使用した炉である。想定される住居主体部中央付近で検出された。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で85×75×25。掘り方は117×112×28。掘り方平面は、やや歪んだ円形の土坑状であった。炉の覆土中からは、敷石に使用されたような鉄平石が検出されている。

方位 N-18°-W

柱穴 検出された柱穴は18基を数える。そのうち、土坑名称となっている遺構は、柱穴を確認するための掘り方調査の際、検出されたものである。前述の通り掘りすぎているものもあるだろう。ただし、一部は柱穴になると思われ、ここでは、柱穴と同様に記載していく。

調査所見から考えると、住居の主柱穴は柱3～7・9であろうか。平面亀甲形に配置されたようにも見えるが、竪である。第6図で示したとおり、掘り方調査で検出された土坑を重ねて考えると、柱2・4・5、土坑2・3・7と土坑10の一部で主柱穴になるとも考えられる。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：37×27×31、柱2：30×24×34、柱3：51×36×25、柱4：43×35×58、柱5：32×27×45、柱6：32×26×43、柱7：27×25×36、柱8：49×47×39、柱9：117×(55)×-

土坑1：欠番か、土坑2：138×(75)×59、土坑3：125×(124)×59、土坑4：102×77×46、土坑5：104×73×55、土坑6：40×30×25、土坑7：62×(43)×41、土坑8：63×(34)×39、土坑9：57×(50)×49、土坑10：150×(108)×56。

遺物 出土土器は302点を数える。加曾利EⅢ式期から堀之内I式期まで確認できた。主体となるのは称名寺式期、特に称名寺1式かやや多い。石器は16点出土した。磨石が9点と多く、磨石面を持つ丸石も見られた。黒曜石の剥片、砕片は21点、23.7g検出された。

時期 称名寺1式期。本住居より埋設土器は出土していない。住居より出土した土器は、称名寺式期、特に称名寺1式が多いため、本住居を当該期に比定した。

18区13号住居

調査年度 平成13年度

位置 M・N-15

経過 調査は平成13年度に行われた。住居主体部中央で、方形石囲炉を検出したため住居と認定された。出入り口部も含め良好な遺存状態であったが、主体部の北側立ち上がりについては検出できなかった。調査では、床面を検出するまでに多くの礫

があり、特に出入り口部では多量の礫が出土した。

重複 18区12号住居、18区91号土坑と重複。18区12号住居を切り、18区91号土坑に切られる。

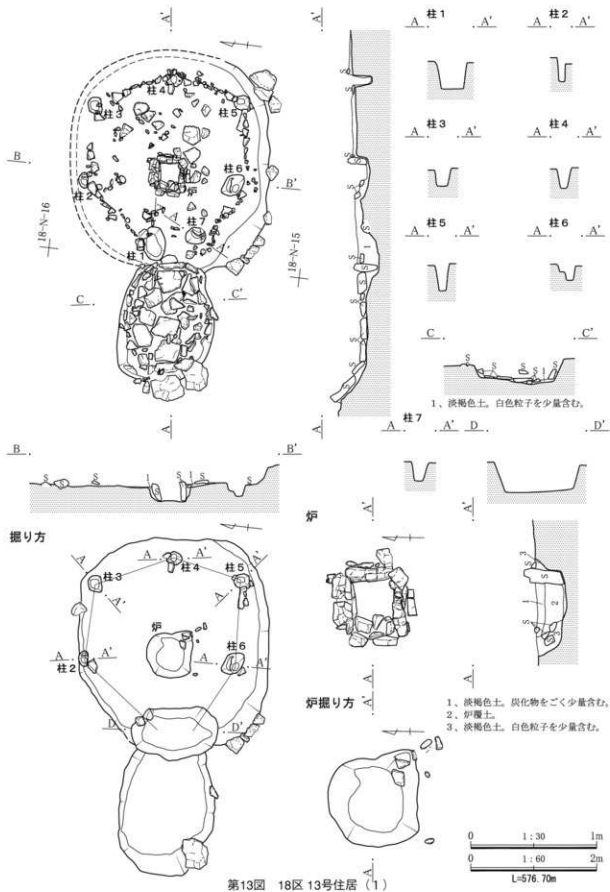
形状 柄鏡形敷石住居。主体部は直径3mほどのやや歪んだ円形を呈する。壁高は、南側の遺存状態の良い場所で31cmほどであった。西側には敷石が施された出入り口部が取り付け付く。出入り口部の規模は、長軸2.2m×短軸1.5mほど。出入り口部の遺存状態は良好であり、出入り口部を囲むように、礫が横長、縦位に据えられていた。住居主体部と出入り口部との間では、境目を成しているような出土状況であった。同様の形態は、18区11号住居・15号住居、29区6号住居・18号住居で確認されている。

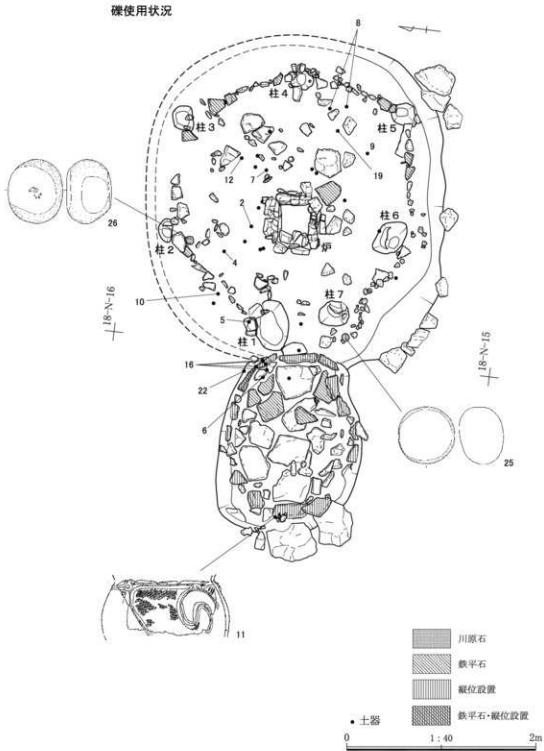
今回報告する縄文時代後期住居は、その大半が柄鏡形を呈している。検出された柄鏡形住居は、地形の傾斜に沿うように低い方向へ出入り口部を設けている。しかし、本住居の出入り口部は、低く傾斜している方向から見ると西側に90°振れた位置に取り付けられていた。本遺跡では、地山に礫が多いためやや向きを変えて出入り口部を取り付けた例もあったが、地形の傾斜を考慮しないような取り付け方は、今回報告する中では本住居のみである。地形の傾斜が緩やかであったためかもしれないが、現時点では判然としない。

床面 遺存状態は良好でないが、鉄平石などの扁平な礫が散見できること、主柱穴間を結ぶように小さな礫や小型の鉄平石が列を成して検出されていることから、住居主体部も出入り口部と同様に敷石が施されていたと考えられる。ただし、平面図上に表現した礫の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

出入り口部は良好な遺存状態であった。出入り口部の敷石は、周囲を縦位に扁平な礫が据えられた中に、整然と敷き詰められた状態で検出され、隙間には小型の礫が詰められていた。出入り口部の敷石にも鉄平石の使用が数点見られた。

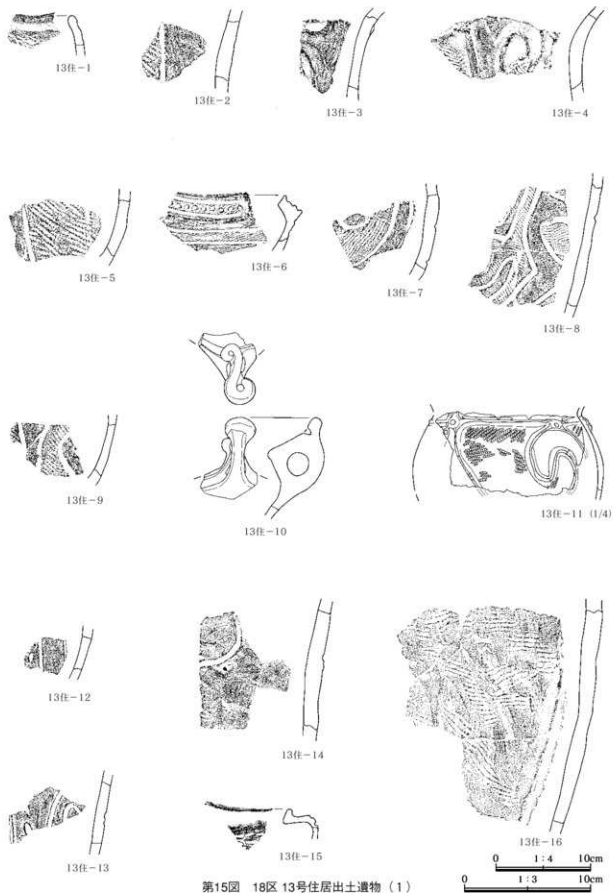
炉 方形石囲炉。住居主体部中央付近で検出



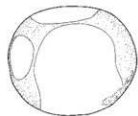
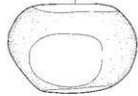
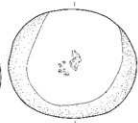
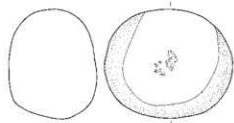
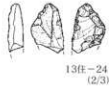
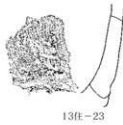


第14図 18区13号住居(2)

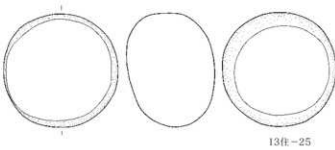
第3章 発見された遺構と遺物



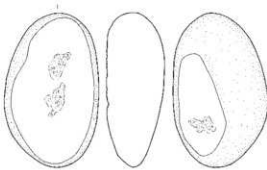
第15図 18区 13号住居出土遺物 (1)



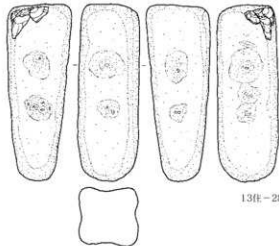
13ft-26



13ft-25



13ft-27



13ft-28

第16図 18区13号住居出土遺物(2)



第3章 発見された遺構と遺物

された。大型の扁平礫4石ほどを使用した炉である。被熱のためか、礫はいくつかに割れていた。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で65×60×23。掘り方は88×81×25。掘り方平面は不定形であった。

方位 N-90°-W

柱穴 検出された柱穴は7基を数える。平面亀甲形に配置された状況で検出されており、企画性が高く、7基すべてが主柱穴と考えられる。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1:52×34×43、柱2:25×15×37、柱3:28×26×25、柱4:25×20×32、柱5:34×24×45、柱6:42×29×25、柱7:32×28×28。

遺物 出土した土器は103点を数える。縄文時代前期前半から縄文2式期までと幅広い時期が確認できた。主体となるのは称名寺式期、特に称名寺1式が多い。石器は9点出土した。特筆すべき遺物には、断面が方形で柱状、四面すべてに凹みを持つ凹石がある。

時期 称名寺1式期。本住居より埋設土器は出土していない。住居より出土した土器は、称名寺式期、特に称名寺1式が多い。また、住居形態にも鑑別がないと思われ、本住居を当該期に比定した。

18区14号住居

調査年度 平成13年度

位置 M・N・O-20、N-21

経過 調査は平成13年度に行われた。18区1号掘立柱建物や18区72号土坑との重複関係があり、遺存状態は良好でない。出入り口部と思われる箇所より、鉄平石が良好な遺存状態で検出されたことや、住居主体部中央付近より焼土が検出されたため、これを炉とする住居と認定された。そのため、住居の立ち上がりも検出されず、住居範囲については、遺物の出土状況や焼土出土位置などを参考に判断したものだ。

出土遺物については、本住居と掘立柱建物との遺物を峻別したいと考えていたが、重複関係も不明瞭であり、意図するように区分できなかった。

重複 18区1号掘立柱建物、18区72号土坑。72号土坑と本住居内で検出された柱穴3基で、掘立柱建物1棟になると考えられる。重複関係は不詳。ただし、「横壁中村遺跡(7)」では、18区1号掘立柱建物を縄文時代後期と報告している。また、「横壁中村遺跡(6)」では、18区72号土坑を称名寺1式期と報告している。

第18図に14号住居と重複する掘立柱建物2棟を重ねた平面図を掲載した。参照していただきたい。

形状 柄籠形敷石住居か。遺構重複により遺存状態は良好でなく、詳細は不明。住居立ち上がりも確認できなかった。住居主体部は形状も不明瞭であるが、直径4.6mほどの円形を呈するものと想定できる。地形が低く傾斜する、ほぼ北側に敷石を伴う出入り口部が取り付く。出入り口部の規模は、長軸1m×短軸0.7mほど。出入り口部の規模としては、やや脆弱か。

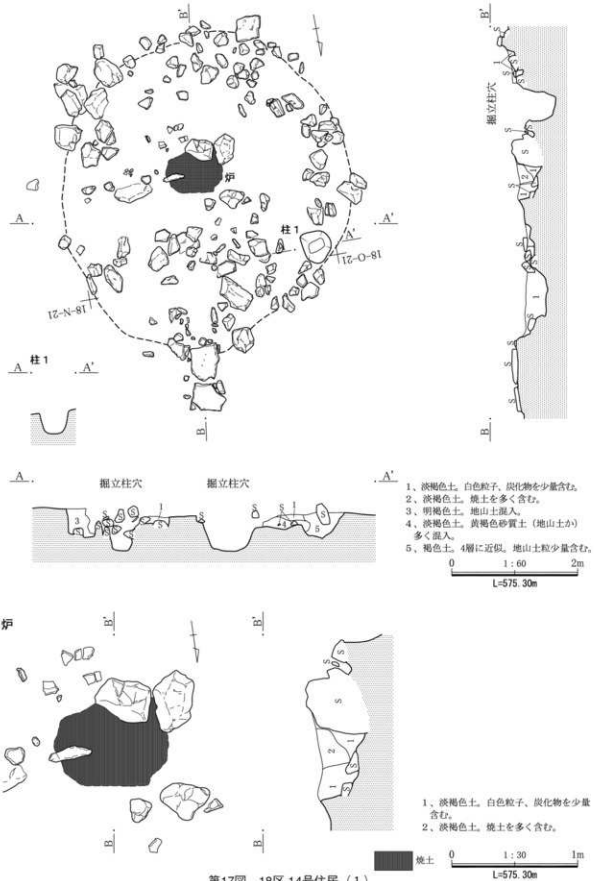
床面 重複関係が著しく、不明瞭な部分が多い。主体部の敷石の有無についても判然としませんが、扁平な礫がわずかに散見できた。

出入り口部では鉄平石が検出されており、敷石が施されていた可能性が考えられる。

炉 焼土痕。掘り方もやや不明瞭に思われる。想定される住居主体部中央付近で検出された。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で89×61×37。

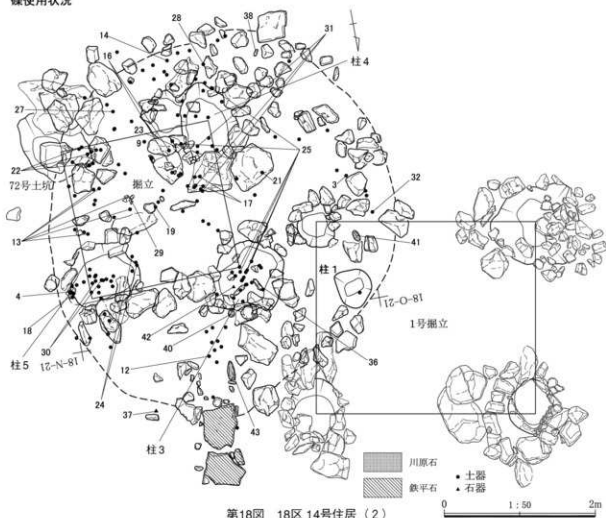
方位 N-8°-E

柱穴 調査時、住居に伴う柱穴とされたものは5基。そのうちの柱2は、「横壁中村遺跡(7)」にて18区1号掘立柱建物の柱穴として報告されている。また、柱3～5は、新たな掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。本住居に伴う柱穴は1基か。ここでは、未報告である柱1・3～5の柱穴規模を記載する。柱穴の規模は以下の通り、長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1:50×45×39、柱3:



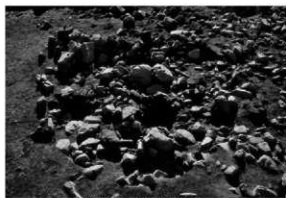
第17図 18区 14号住居 (1)

礎使用状況



100×95×49、柱4：(115)×(104)×49、柱5：90×(85)×60。

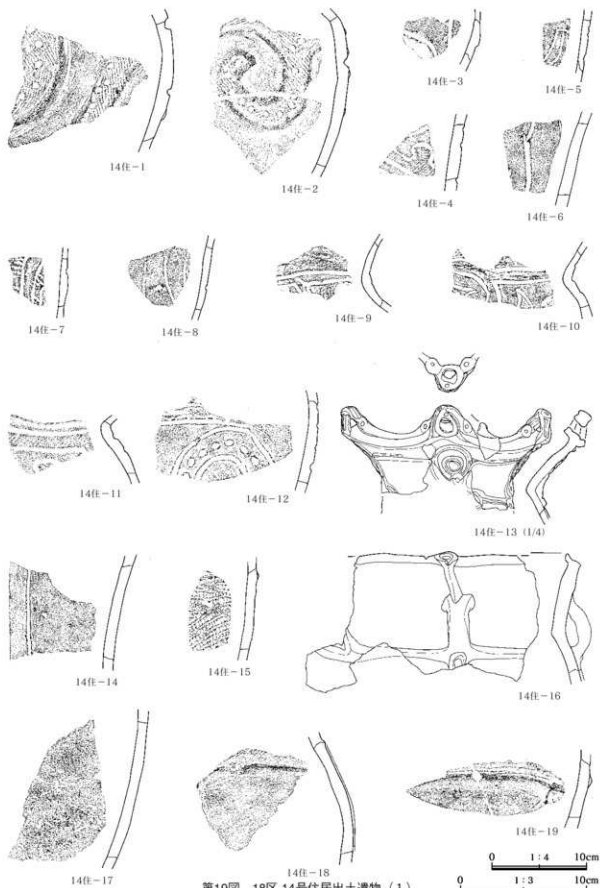
遺物 住居の遺存状態は良好でないが、出土遺物が多い。出土土器は352点を数える。ただし、住居立ち上がり不明瞭であったため、住居には伴わない遺物も、調査時に住居出土遺物とされた可能性がある。また、掘立柱建物の遺物と区分しきれないものもあるだろう。縄文土器は、加曽利EⅢ式期から堀之内1式まで確認できた。主体となるのは称名寺式期、称名寺1式かやや多いか称名寺2式とほぼ同数量であった。本住居からは茂沢類型の縄文土器が比較的多く出土している。石器は16点出土した。安山岩製の石鏃や小型磨製石斧のほか、大型の敲石も出土している。磨石は5点とやや多い。



掘立出土状況(北から)

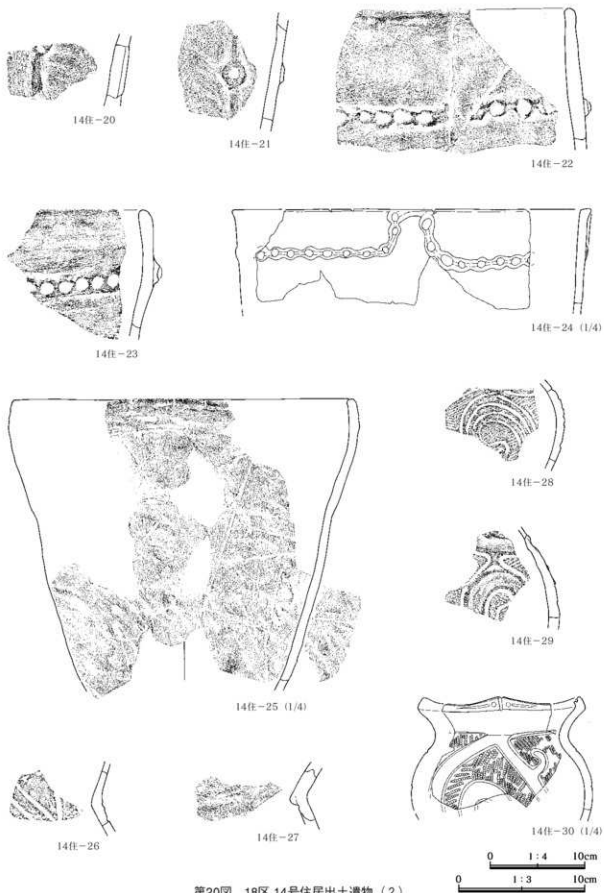
黒曜石の剥片、碎片は18点、9.3g検出された。

時期 称名寺2式期。本住居より埋設土器は出土していない。掘立柱建物2棟との重複もあり、遺存状態が悪く、住居形態からも時期は判断し難い。

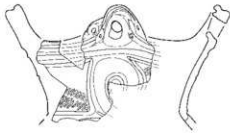


第19図 18区 14号住居出土遺物 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



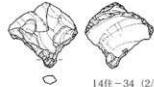
第20図 18区14号住居出土遺物(2)



14住-31 (1/4)



14住-33 (2/3)



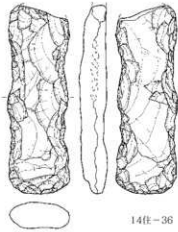
14住-34 (2/3)



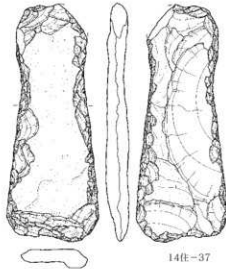
14住-32 (1/4)



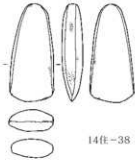
14住-35 (2/3)



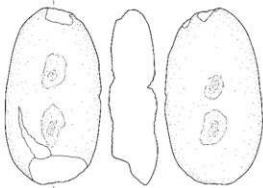
14住-36



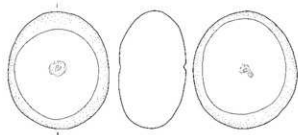
14住-37



14住-38



14住-39

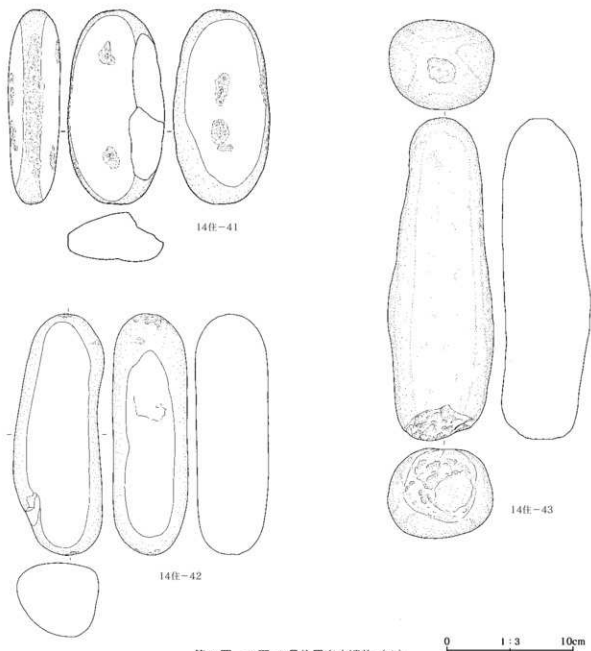


14住-40

第21図 18区14号住居出土遺物(3)



第3章 発見された遺構と遺物



第22図 18区14号住居出土遺物(4)

総量把握の結果では、称名寺1・2式はほぼ同数量確認できたが、掲載に耐えうる遺物出土数量を加味し、称名寺2式期の可能性が高いと判断した。

18区15号住居

調査年度 平成14・15年度

位置 Q・R-15・16、R-17

経過 調査は、平成14年度から15年度まで行

われた。住居主体部中央より石囲炉を検出したことから住居と認定された。他の遺構との重複関係もなく、立ち上がりも明瞭で良好な遺存状態であった。先述の通り、横壁中村遺跡は遺構検出が難しい遺跡である。そのためか、住居の立ち上がりまで良好に検出された例は少なく、本住居は希少な調査例と言える。

本住居の調査では、住居主体部外側に、内側よりも一段高い平面下ーナツ形の平坦な部分が認められ

た。一段低い部分との境目付近には柱穴が巡り、それをつなぐように丸石や軽石などが据えられている。また、掘り方調査の際には、一段低い部分からも柱穴が検出された。調査結果より、検出された柱穴を一時期の住居で考えることには無理があり、少なくとも二時期以上の建て替えが行われていた可能性が考えられる。検出状況からは、住居が同様の形態でやや拡張されるように建て替えられたものと思われる。第26図には、建て替えられた住居の掘り方を掲載した。第27図には、建て替え以前の住居柱穴も含めた掘り方を掲載した。

本住居の調査は二年度に渡って行われた。良好な遺存状態であるため、出土遺物も多く、確認できた事実も多い。本住居の写真や図版が枚数を多く割いているのは、このような特殊事情からである。

重 複 なし。ただし、建て替えが行われた可能性が考えられる。

形 状 柄鏡形敷石住居。主体部は直径5.5mほどの円形を呈する。壁高は遺存状態の良いところで52cmほどであった。地形が低く傾斜する北側には全面敷石が施され、周囲は扁平な礫を縦位に据えこれを取り囲むようにあった出入り口部が取り付く。出入り口部の規模は、長軸2.21m×短軸2.09mほど。遺存状態は良好である。出入り口部のほぼ中央には、敷石の上に丸石が置かれていた。丸石は敷石よりも高い位置で検出されている。また、出入り口部北側の出口との境には、踏み台のような厚い大型礫が据えられていた。出入り口部の敷石には、よく磨れた部分も見られた。

主体部と出入り口部との間は、扁平な礫が横長、縦位に据えられ、主体部との境目を成しているような出土状況であった。同様の形態は、18区11号住居・13号住居、29区6号住居・18号住居で確認されている。住居主体部と出入り口部の間では、2箇所で小型の方形石囲いが検出された。1号方形石囲いは柱12と13との間で検出された。出土位置からも、埋甕のような役割であった可能性が考えられる。

本住居は、主体部と出入り口部との西側接点に根

入りの深い地山礫があり、これを施設の一部のように取り込んでいる。2号方形石囲いは1号方形石囲いに隣接し、この出入り口部に見られる大型の地山礫に接して検出された。2号方形石囲い底には敷石も施されていた。出土位置から考えると、1号方形石囲いとは異なる意図を持っていた可能性がある(第29図参照)。

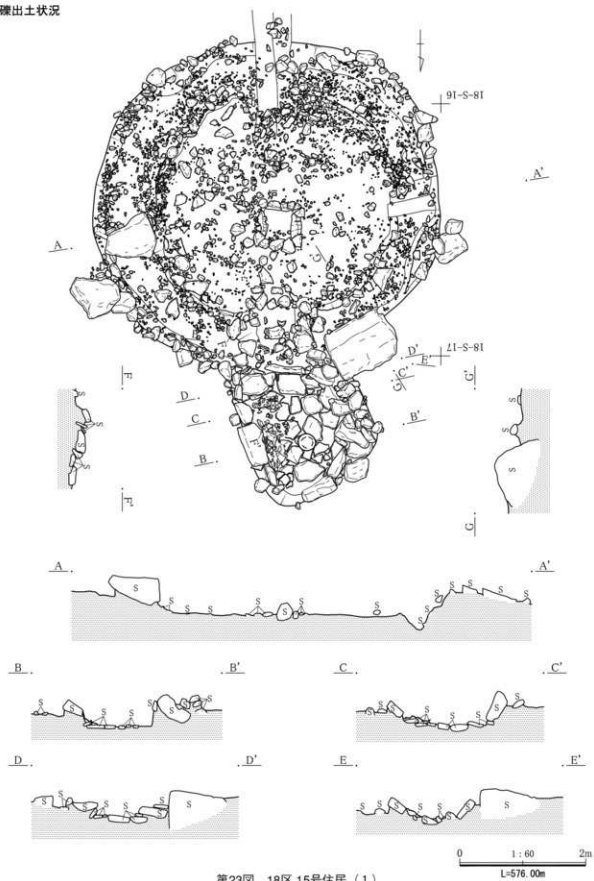
床 面 主体部には扁平な礫が散見できる。出入り口部から検出された良好な遺存状態の敷石を加味しても、住居主体部にも敷石が施されていた可能性があるだろう。小型の礫も多く確認できるが、これは敷石間の隙間に詰めた礫か。主体部中央付近は一段低くなっており、ほぼ平坦。周辺の一段高い部分もほぼ平坦であった。この高い部分は、地山土をつき固めて構築されたベッド状遺構にあたる。柱穴は一段高い部分から検出されており、主体部の一段高い部分をどのように利用していたのか興味深い。本遺跡で、このような形態を確認できた住居はほかになく、八ッ場地域の縄文時代後期住居形態を考える上でも重要な住居であろう。

炉 方形石囲炉。大型の扁平な礫を使用して構築され、南東側隅には石棒が転用されている。石棒は、逆位に立てられたように埋設されていた。石棒の過半は欠損しており、被熱痕跡が顕著であった(第30図参照)。炉石はその一部が意図的に打ち割れており、石棒もその際に欠損したものであろう。石棒が埋設されていた石囲炉は、29区6号住居でも確認されている。ともに称名寺2式期と考えられ、本遺跡同時期の住居形態に見られる特徴かもしれない。石囲炉は住居主体部中央付近で検出された。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で76×74×14。掘り方は96×80×25。掘り方平面はやや歪んだ隅丸方形であった。

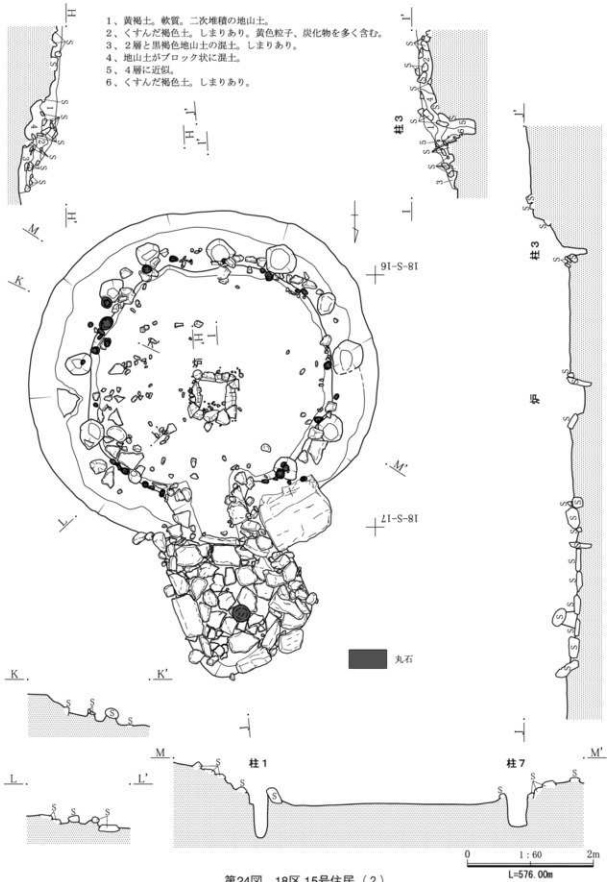
方 位 N-O°

柱 穴 検出された柱穴は多く、26基を数える。前述の通り、柱穴の出土状況から、少なくとも二時期の住居であったことが想定できる。そのため、ここでは柱穴を二時期に分けて掲載する。

掘出土状況



第23図 18区15号住居(1)



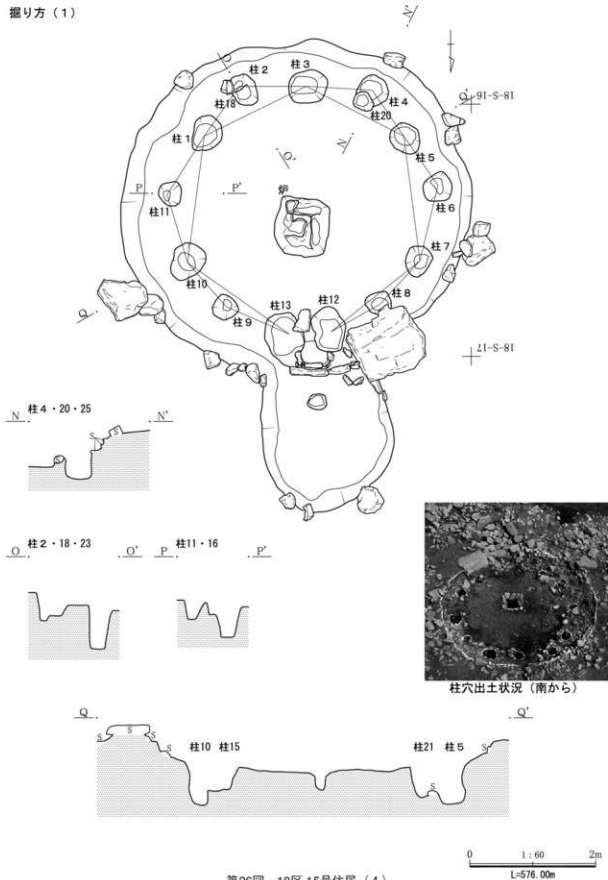
第24図 18区 15号住居 (2)

礎使用状況



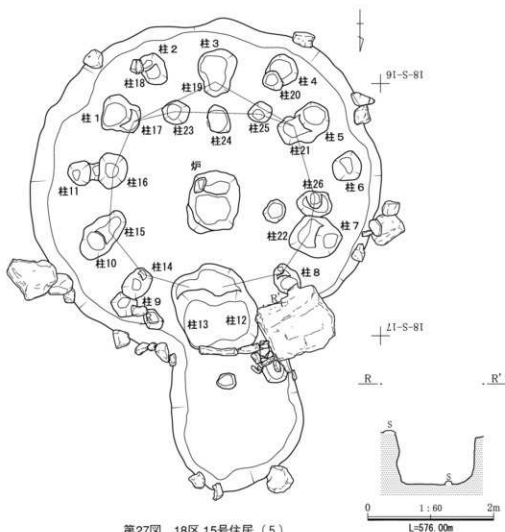
第25図 18区 15号住居 (3)

掘り方 (1)



第26図 18区 15号住居 (4)

掘り方(2)



第27図 18区15号住居(5)

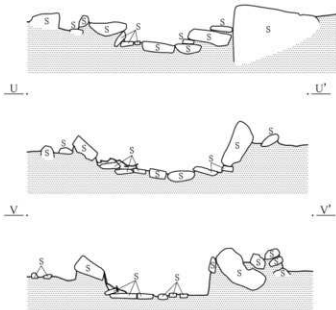
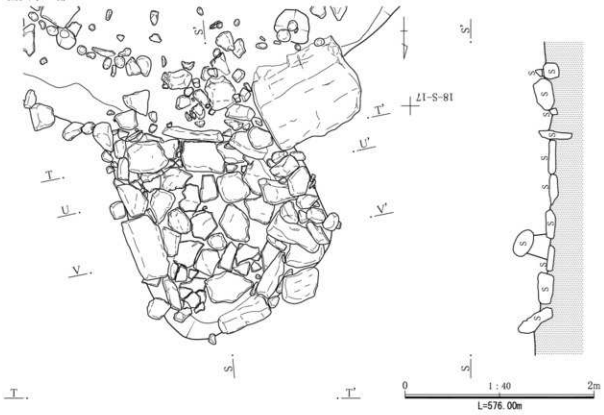
新たに建て替えられた住居に伴うだろう柱穴は14基。炉を中心に円を描き、企画性もある。主柱穴は柱1～13の13基。あるいは柱1・3・5・7・10・12・13の7基か。検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：43×35×72、柱2：40×34×42、柱3：47×40×52、柱4：53×48×46、柱5：37×27×一、柱6：56×48×35、柱7：41×40×51、柱8：41×35×15、柱9：26×19×45、柱10：49×38×41、柱11：42×33×29、柱12：70×52×71、柱13：95×59×57、柱18：38×30×16、柱20：33×28×22。

建て替え以前の住居に伴うだろう柱穴は14基。建て替え以前の住居柱穴は、建て替えられた住居柱

穴を一回り小さくしたような位置で検出されている。主柱穴は判然としないうち柱8・12～17・19・21・22・26の11基。あるいは、柱8・12～17・21～26の13基か。柱穴の規模は以下の通りである。柱8：前述の通り、柱12：前述の通り、柱13：前述の通り、柱14：32×(21)×38、柱15：(48)×46×25、柱16：56×45×47、柱17：45×(24)×50、柱19：(40)×40×62、柱21：(40)×47×50、柱22：62×(36)×41、柱23：43×37×90、柱24：46×32×45、柱25：39×32×61、柱26：56×(39)×40。

遺物 本住居は遺存状態も良好であり、出土遺物も多く、出土土器は2,335点を数える。縄文時代中期から縄之内2式期までの時期が確認できた。

出入口部



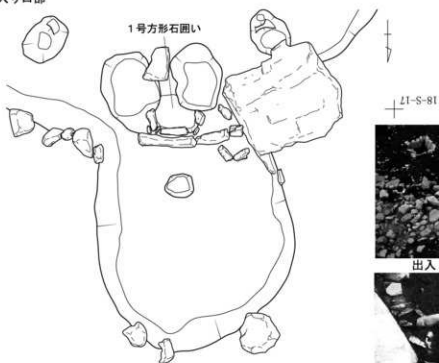
出入口部確認状況（北東から）



出入口部遺物出土状況（西から）

第28図 18区15号住居（6）

出入口部



18-S-81



出入口部（北東から）



敷居石と1号方形石囲い（南から）

出入口部掘り方



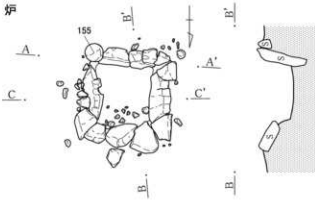
出入口部2号方形石囲い（北から）



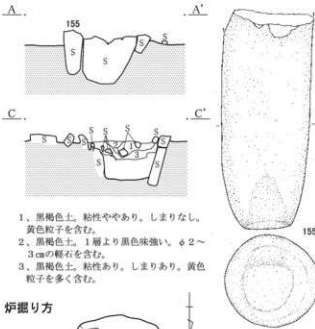
出入口部2号方形石囲い（東から）

0 1:40 2m

第29図 18区15号住居（7）



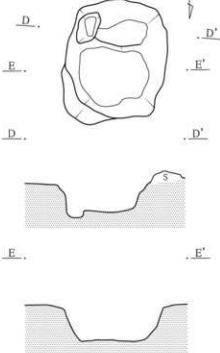
炉内礫出土状況（北から）



炉全景（北から）

- 1、黒褐色土。粘性ややあり。しまりなし。黄色粒子を含む。
- 2、黒褐色土。1層より黒色味強い。φ2~3cmの軽石を含む。
- 3、黒褐色土。粘性あり。しまりあり。黄色粒子を多く含む。

炉掘り方



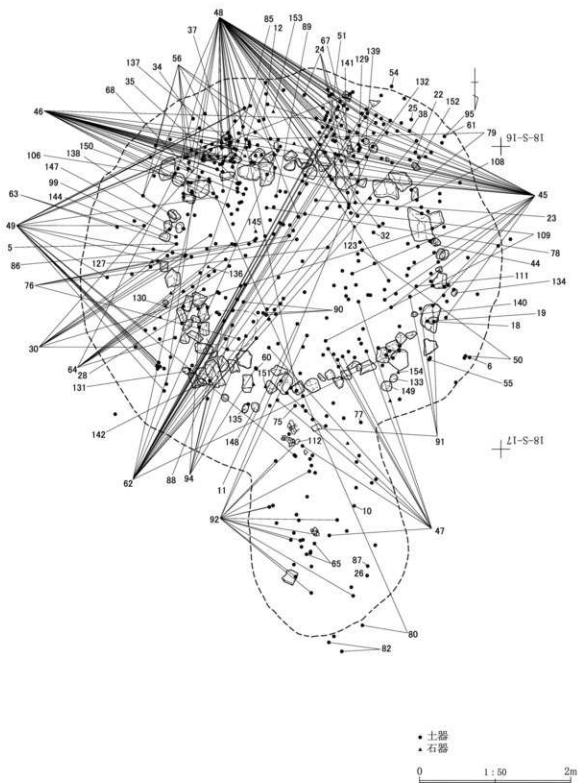
炉掘り方全景（南西から）



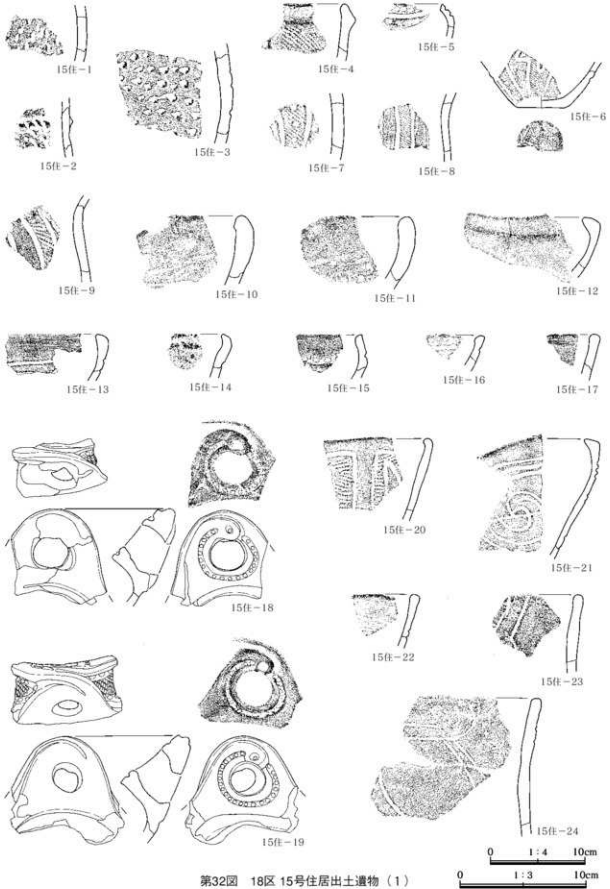
掘り方全景（南から）



第30図 18区15号住居（8）

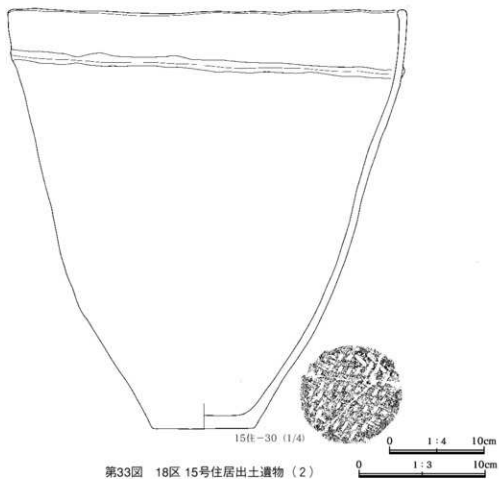
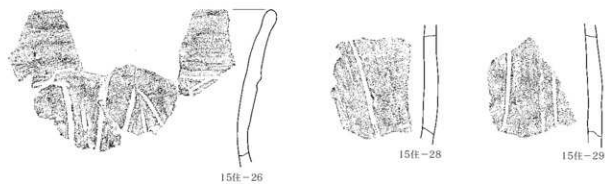
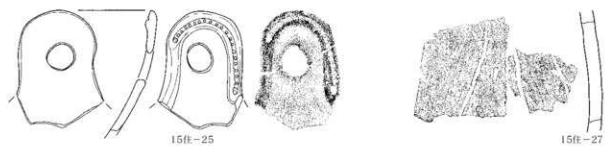


第31図 18区15号住居(9)

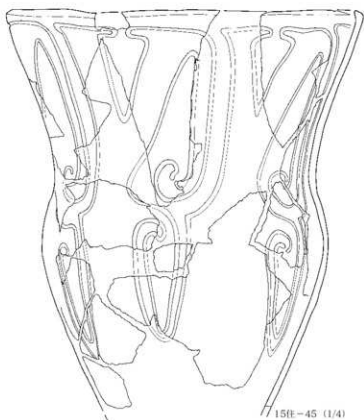
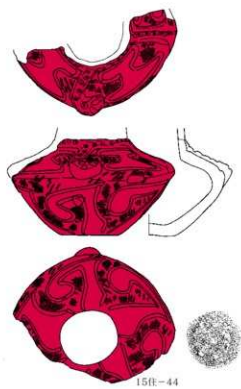
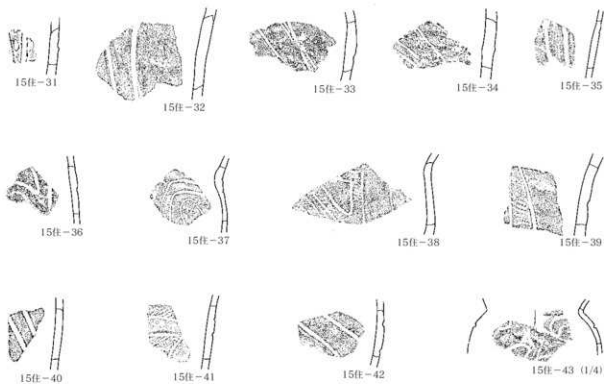


第32図 18区 15号住居出土遺物 (1)

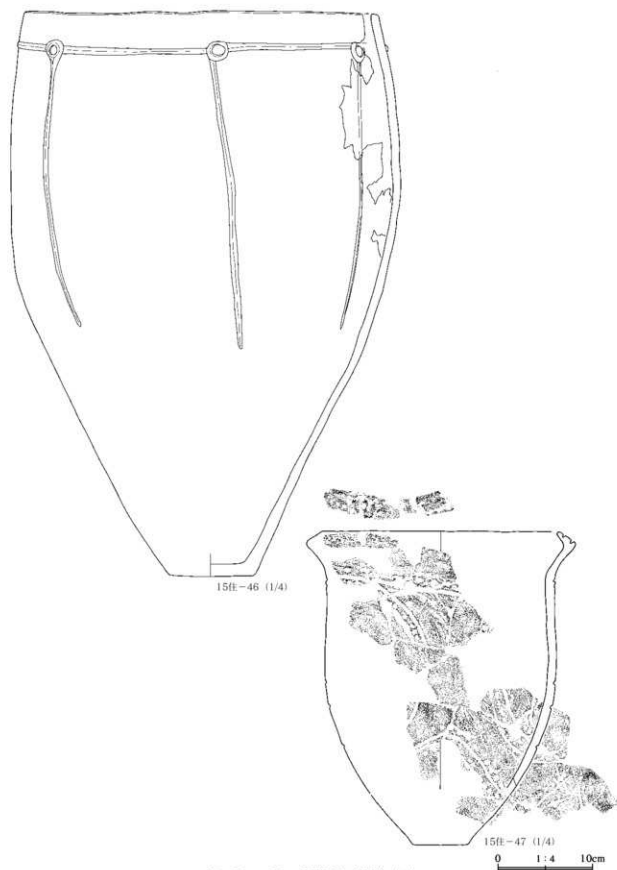
第3章 発見された遺構と遺物



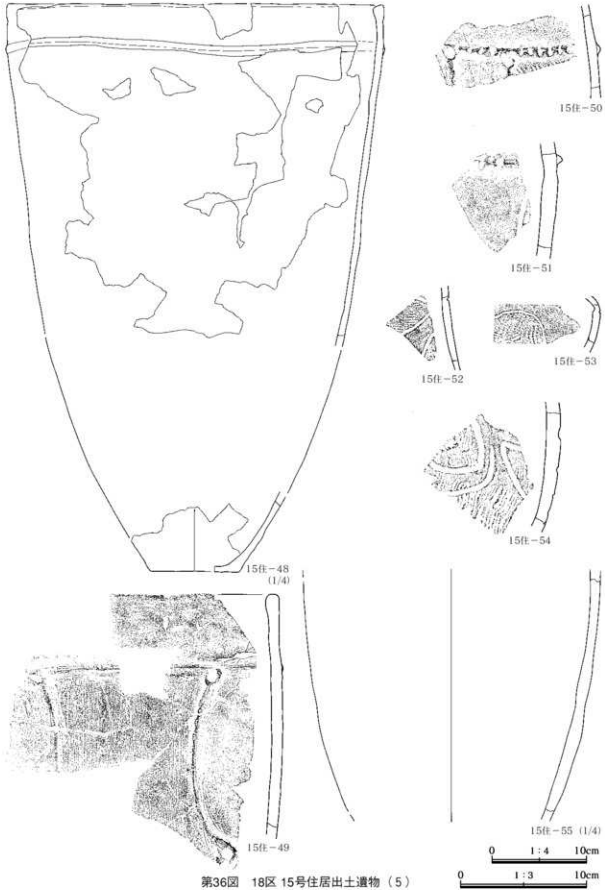
第33図 18区 15号住居出土遺物 (2)



第34図 18区 15号住居出土遺物 (3)

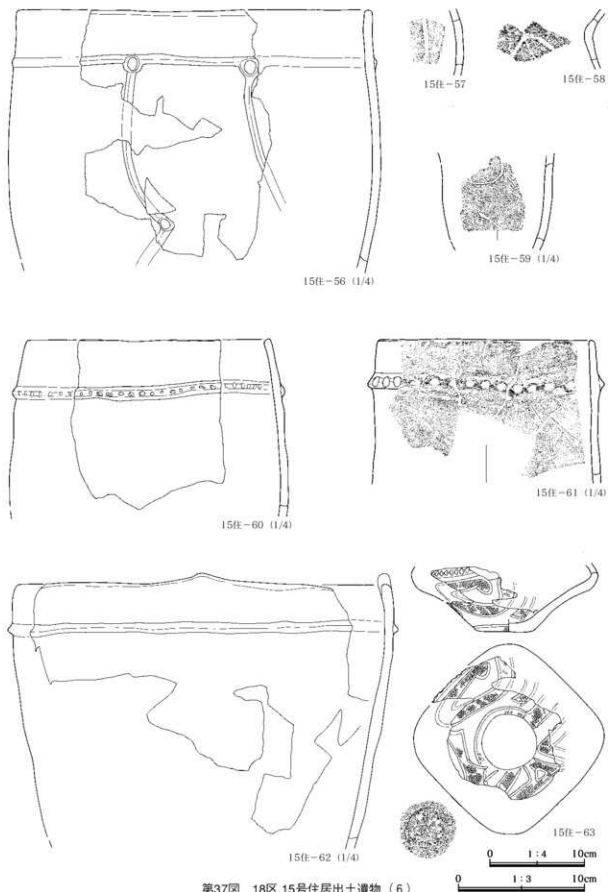


第35図 18区 15号住居出土遺物（4）

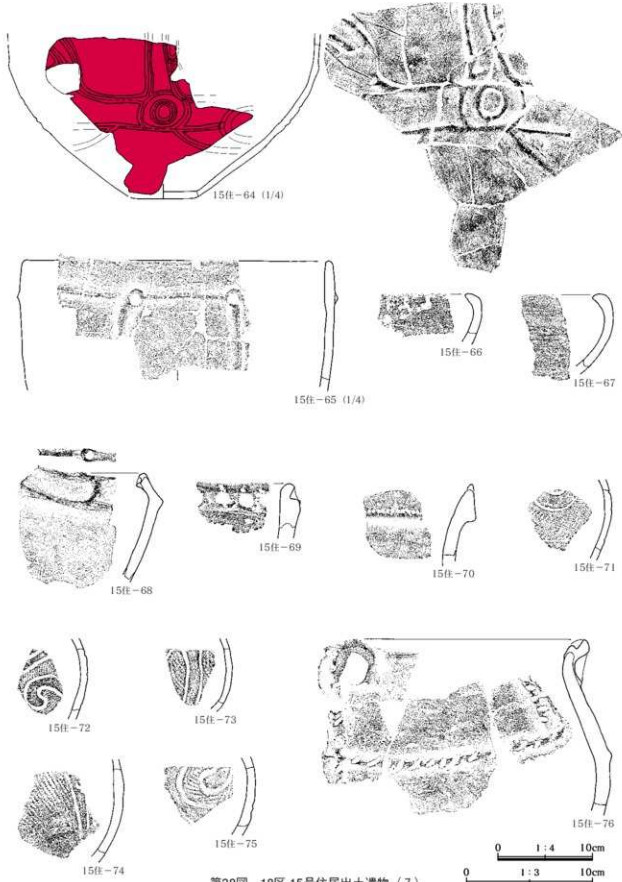


第36図 18区 15号住居出土遺物 (5)

第3章 発見された遺構と遺物

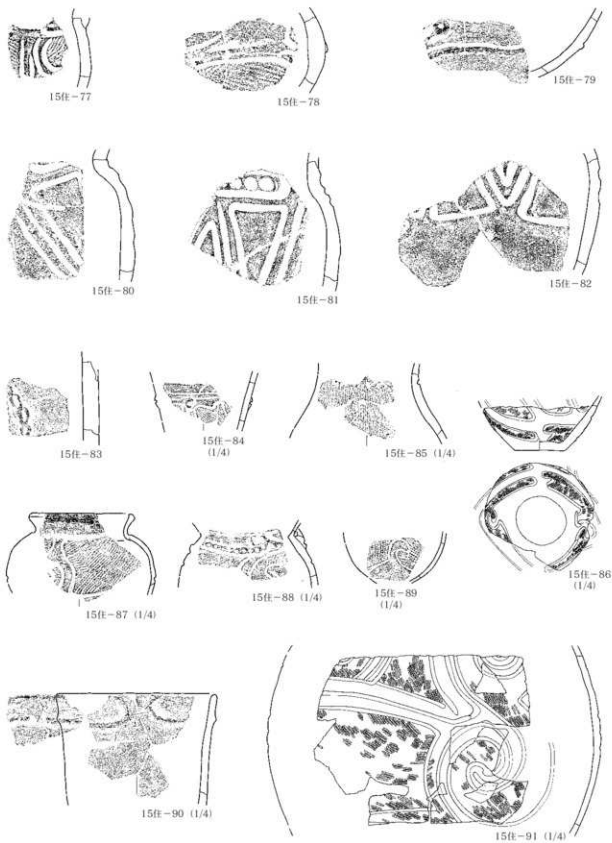


第37図 18区 15号住居出土遺物 (6)



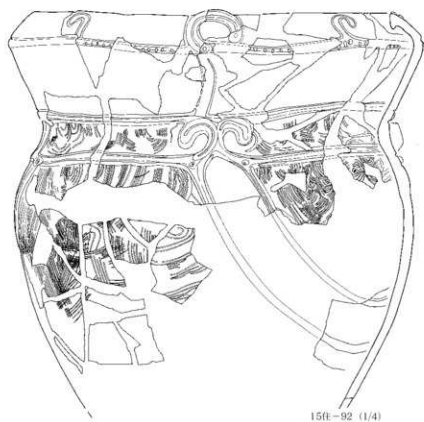
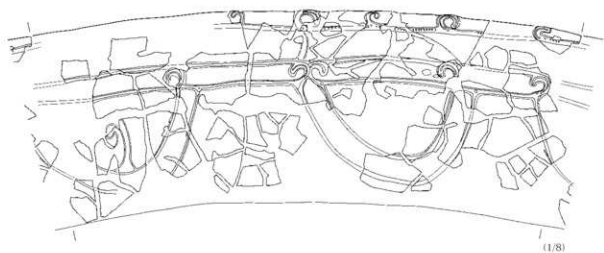
第38図 18区 15号住居出土遺物 (7)

第3章 発見された遺構と遺物



第39図 18区 15号住居出土遺物 (8)

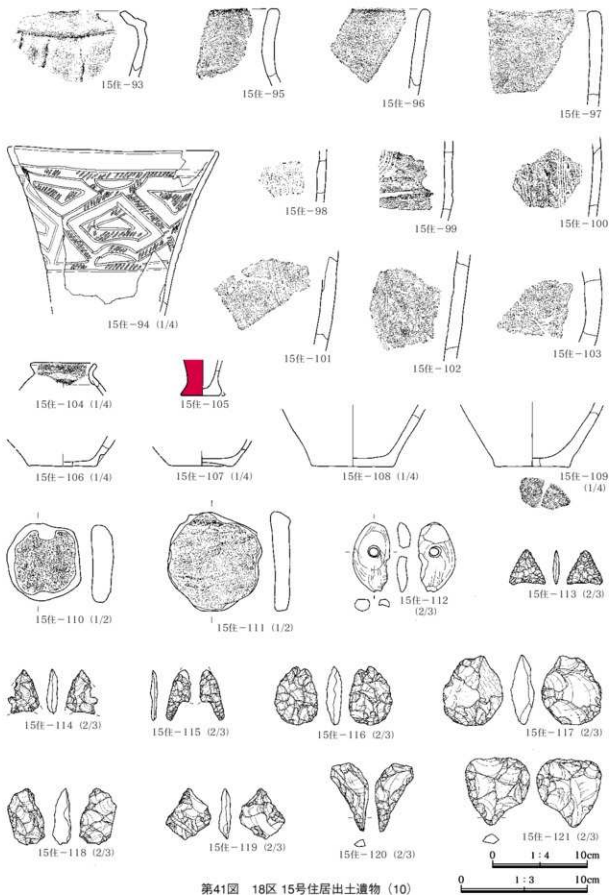




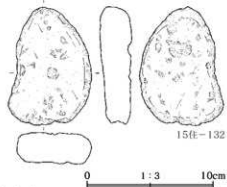
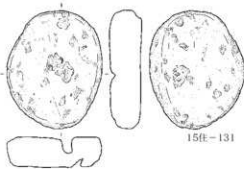
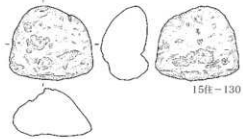
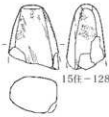
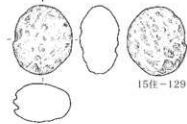
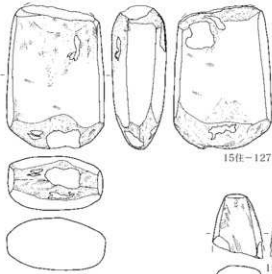
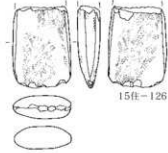
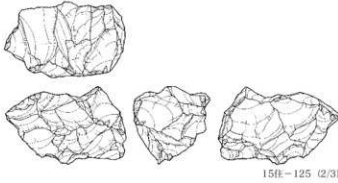
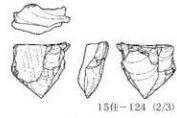
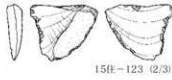
0 1:4 10cm

第40図 18区 15号住居出土遺物 (9)

第3章 発見された遺構と遺物



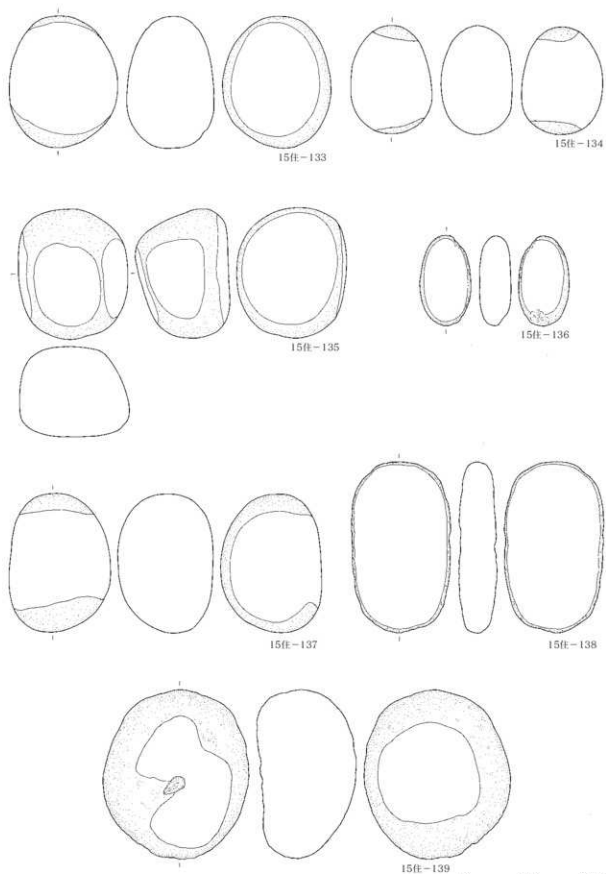
第41図 18区 15号住居出土遺物 (10)



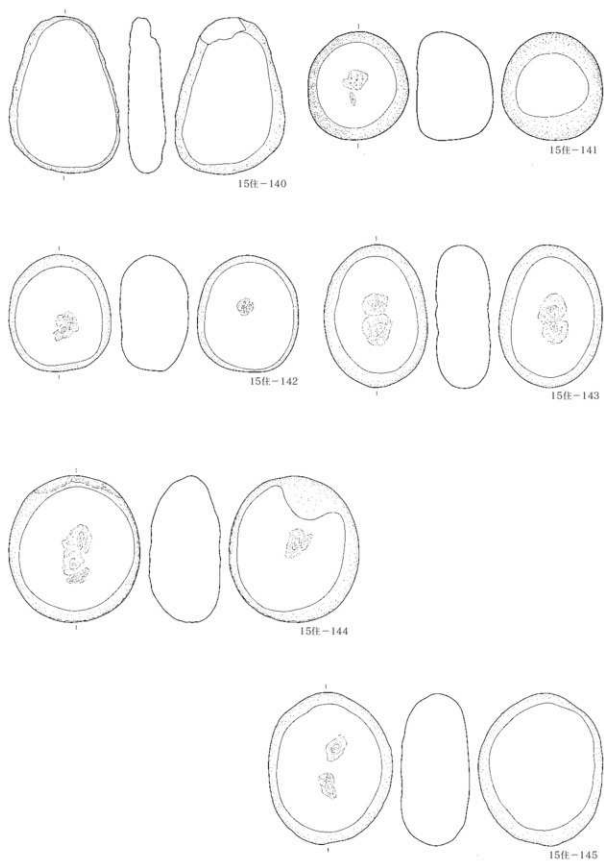
0 1:3 10cm

第42図 18区 15号住居出土遺物 (11)

第3章 発見された遺構と遺物



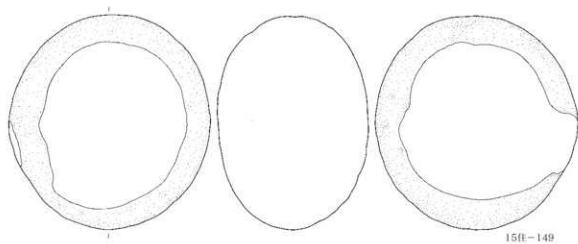
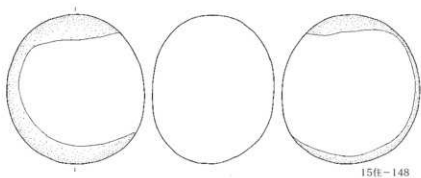
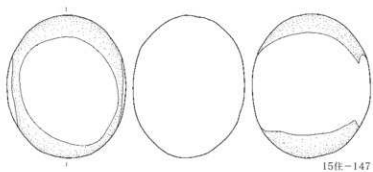
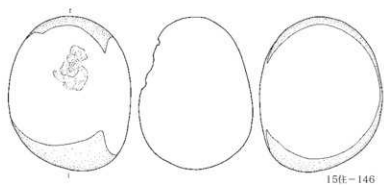
第43図 18区 15号住居出土遺物 (12)



第44図 18区 15号住居出土遺物 (13)

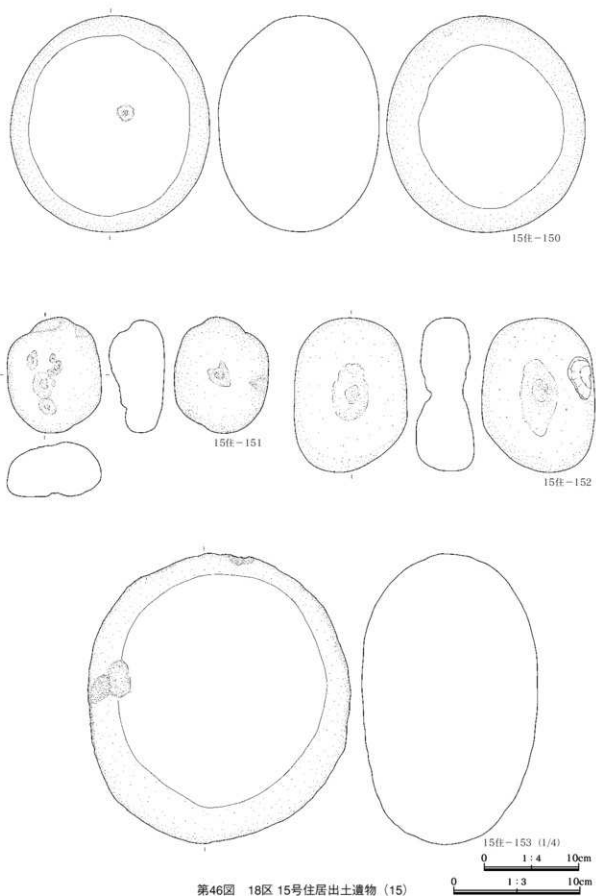
0 1:3 10cm

第3章 発見された遺構と遺物

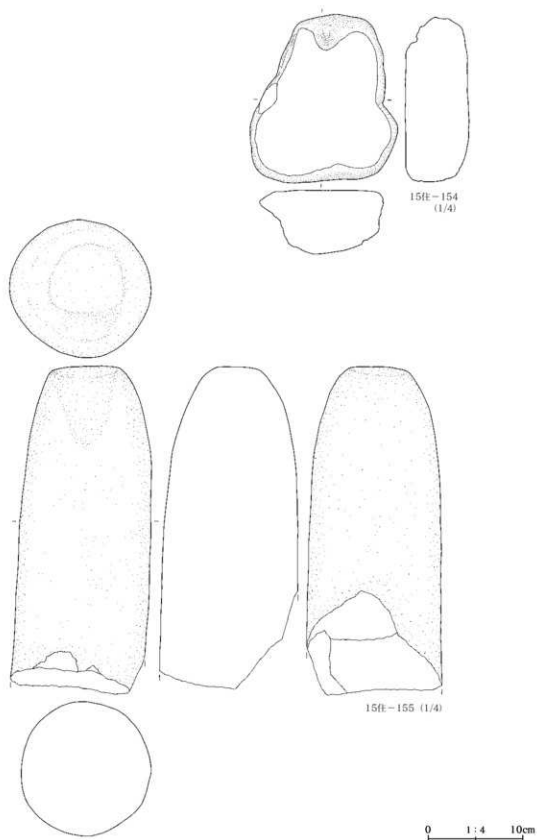


第45図 18区 15号住居出土遺物 (14)

0 1:3 10cm



第46図 18区 15号住居出土遺物 (15)



第47図 18区 15号住居出土遺物 (16)

出土土器数量は多いが、大半が称名寺2式期から堀之内1式期に収まり、比較的時期は限定される。本住居は遺存状態が良好で、住居に伴う遺物以外余り混在しなかったためであろう。主体となるのは称名寺2式で667点を数える。出土した縄文土器の中には、称名寺2式期から堀之内式期の小型の壺型縄文土器も見られた。口縁に横位隆帯を持つ、胴部隆帯または無紋の深鉢も多数確認された。

石器も80点と多数出土した。磨石が多く16点を数える。石鏃、石錐も多く、石鏃15点、石鏃未製品6点、石錐4点であった。軽石製品も4点と多いが、打製石斧については確認することができなかった。滑石製の装飾品も確認できた。剥落したものか、または未製品の可能性も考えられる。黒曜石の剥片、破片は112点、56.4g検出された。ほかの石器同様、数量は多い。

住居内の一段高い部分と低い部分の間からは、丸石が多数出土した。意図的に据えられていたようにも見える。丸石の中には、磨り面を持った磨石も多く含まれていた(第24図参照)。また、石囲炉隅には、石棒が逆位に埋設されていた。

時期 称名寺2式期。本住居より埋設土器は出土していない。住居より出土した土器は、称名寺式期、特に称名寺2式が多い。また、住居形態にも鑑断がないと思われ、本住居を当該期に比定した。

18区19号住居

調査年度 平成14年度

位置 P・Q・R-6・7、Q・R-8

経過 調査は平成14年度に行われた。想定される住居主体部中央には、被熱痕跡が顕著な土器が埋設されていたため、これを炬とする住居と認定された。住居の立ち上がりは検出されず、住居範囲は炬や柱穴の位置、出土遺物から想定した。

本住居は、調査時より列石や配石を伴う住居であるとの認識で調査された。しかし、列石の範囲は何処までか、住居に伴う列石を何処までと考えるかは、

調査段階でも判然としないうところであった。そのため、調査で5号列石と6号列石の出土遺物を明確に区分できてはいない。整理作業の中で、出土位置より5号列石と6号列石とに分けた遺物も多くあった。しかし、出土位置が確認できない遺物も多く、その際の遺物番号は、当初の遺物注記通りに5・6号列石としている。

配石についても、範囲が何処までか、どの配石までが住居に伴うものか、調査段階においても明確ではなかった。ここでは、調査所見を考慮し、遺物の接合関係や平面形状から整理担当者が判断した。ただし、18区30号配石については、調査時より18区19号住居の出入り口部であるとの判断から欠番とし、住居として報告している。

住居に伴うと考えられた列石や配石も、調査時には単独の遺構として扱われ、遺構番号が付されていた。そのため、本報告書においても同様に、調査時の遺構番号を使用していく。本住居に伴う列石は18区5・6号列石、配石は18区31・32号配石である。
重複 18区94・116・138・139・141・277・279・280・283号土坑と重複。すべての土坑に切られる。

形状 楕圓形。敷石住居か。遺存状態が悪く、住居の立ち上がりも判然としないうが、主体部は直径6.2mほどの円形を呈するものと想定できる。地形が低く傾斜している北西側、埋設谷の方向に、一部敷石が残る出入り口部が取り付く。出入り口部の規模は、長軸3.4m×短軸3.55mほど。

床面 住居立ち上がりか確認できないほど遺存状態は良好でない。鉄平石などの扁平な礫が散見できることから、主体部にも敷石が施されていた可能性があるが推測の域を出ない。また、平面図上に表現した礫の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

出入り口部は、調査時に18区30号配石として調査された遺構である。遺存状態は比較的良好で、扁平な礫が確認できたことから敷石が施されていたと

考えられる。

方 位 N-34°-W

炉 土器埋設炉。埋設された土器は2個体あった。ともに被熱痕跡が顕著で、炉に使用されたと判断できる。土器は重ねられたように検出されており、土器埋設炉として少なくとも二時期あったと考えられる。埋設された土器は、ともに堀之内1式である。また、土層では、埋設された土器の下にも焼土が確認でき、さらに数度炉が構築されていたと考えられる。土器埋設炉は住居主体部中央付近で検出された。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、確認面で42×(36)×29。掘り方は51×44、掘り方平面は円形の土坑状であった。

柱 穴 検出された柱穴は13基を数える。主柱穴は柱1～7の7基。平面亀甲形に配置されており、企画性がある。柱12は確認できなかった。欠番の可能性が高い。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：50×49×53、柱2：50×45×47、柱3：44×37×34、柱4：63×55×53、柱5：42×35×46、柱6：65×58×47、柱7：52×45×55、柱8：52×46×37、柱9：50×47×43、柱10：44×39×33、柱11：41×37×44、柱12：欠番か、柱13：98×90×25、柱14：50×46×36。

遺 物 本住居は、土器埋設炉や柱穴の出土状況から住居との認定をしたが、住居の立ち上がりも検出できず、住居範囲も炉や柱穴の位置より判断したものだ。そのため出土遺物も少ない。出土した土器は27点とわずかであるが、時期幅は加曾利E1式期から堀之内2式期まで幅広い。これは、遺存状態が悪く、住居に伴わない遺物が混在したためと思われる。石器は8点出土した。打製石斧2点、磨製石斧2点、多孔石1点などが現れた。

時 期 堀之内1式期新段階。出土遺物は少ないが、土器埋設炉は良好な遺存状態であった。炉に埋設された土器より、当該期の住居と比定した。

18区5号列石

調査年度 平成14年度

位 置 R・S-6・7、T-6

経 過 調査は平成14年度に行われ、調査当初から住居に伴う列石との認識であったが、遺構番号を付し単独の列石として調査された。だが、列石という遺構の性格からか、遺構の範囲を明確にすることはできていない。遺物も、5号列石と6号列石とに分けて取り上げることができなかったため、5・6号列石として取り上げているものが大半を占める。前述の通り、整理作業で出土位置が限定できたものは、整理担当者の判断により5号列石または6号列石として名称を変え、掲載番号を付している。また、位置の特定ができなかった遺物については、5・6号列石のまま掲載番号を付している。

重 複 18区118・125・138・139号土坑と重複し、すべての土坑に切られる。5号列石の範囲は、より広い範囲であった可能性もあり、より多くの重複関係も考えられる。ここでは、最も狭い範囲での重複関係のみ記載した。

5号列石西側には、18区32号配石が取り付くように検出されている。また、5号列石東側では、18区19号住居出入り口部に接地するように、18区31号配石が検出されている。31・32号配石は、ともに5号列石の一連である可能性も考えられる。

形 状 平面形状は、東西方向にはほぼ直線的な列を成し、南側に緩やかな弧状を描く列石である。列石という遺構の性格から考えると、数度手が増えられた可能性も高く、平面形状については不明瞭な部分がある。規模は、長軸が12.6mほど、短軸は1.0～2.0mほどか。列石という遺構の性格上、規模はおよそと考えていただきたい。

列石出土遺物とした範囲は広く、列石には伴わない遺物も混在しているように思われる。本報告書では、判断材料も希薄なため、調査時の判断を優先し掲載している。

下部遺構 なし

石材等 地山の礫を中心に構築されているが、多

孔石なども散見できた。ただし、平面図上に表現した際の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

遺物 出土土器は86点を数える。遺物の性格からか、出土土器は五領ヶ台式期から中・近世までと時期幅が広く、列石に伴わない遺物も混在していると考えられる。出土土器の主体となるのは堀之内1式期である。石器は3点出土した。凹石の破片などが確認できた。

5・6号列石として取り上げられた遺物も数多く、土器は446点を数える。五領ヶ台式期から古代までと時期幅は広い。加曾利EⅢ式、堀之内1式とともに100点を超える数量であった。列石の中には、位置の確認できなかった石器も多い。数量は8点を数える。

時期 堀之内1式期から堀之内2式期。遺物の出土状況や遺物の性格からも、時期を特定することは難しい。出土遺物の数量把握の結果と18区19号住居との関係から当該期に比定した。ただし、住居に伴う列石との判断から、図上では18区19号住居と同時期のように掲載している。

18区6号列石

調査年度 平成14年度

位置 S-8、U・V・W-7・8、X-8

経過 調査は平成14年度に行われ、調査当初から住居に伴う列石との認識もあったが、18区19号住居とは離れた位置で検出されており、5号列石よりも単独の列石となる可能性は高いだろう。遺物の取り上げは、列石の範囲が不明瞭であるため、5・6号列石として取り上げているものが大半となってしまった。前述の通り、整理作業で出土位置が限定できたものは、整理担当者の判断により5号列石または6号列石として名称を変え、掲載番号を付している。また、位置の特定ができなかった遺物については、5・6号列石のまま掲載番号を付している。

重複 18区3号掘立柱建物、18区131・144

号土坑と重複。18区3号掘立柱建物を切り、18区131・144号土坑に切られる。18区3号掘立柱建物は『横壁中村遺跡（7）』の中で、堀之内1式期に比定されている。

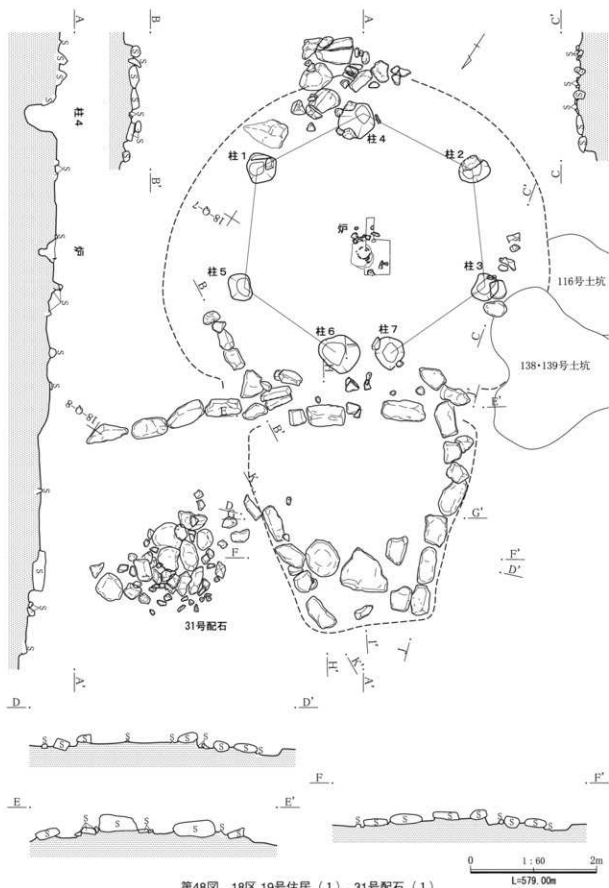
形状 平面形状は、ほぼ東西方向に直線的に列を成す列石である。西側及び東側端部では、北側へ緩やかに曲がり、全体的には緩やかな弧状を成している。列石は中央付近で分断されており、2基の列石のようにも見える。また、2列の列石にも見える。列石の規模は長軸で22.4mほど、短軸で1.0～2.4mほどか。数度、手が加えられた可能性もあり、平面形状は判然としにくい。列石の範囲についても同様である。本報告書では、整理担当者が出土位置により遺物を帰属させたが、列石に伴わない可能性のある遺物についても調査時の判断を優先して掲載しているものもある。

下部遺構 なし

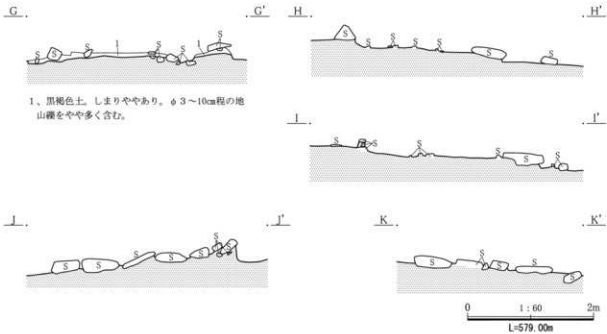
石材等 18区19号住居近隣では、鉄平石の使用が散見できた。また、多孔石も確認できた。一部の礫は立てたようにも見えるが、調査時の資料がなく、整理担当者による写真での判断が難しいため平面図上での表現はしていない。

遺物 出土土器は98点を数える。阿玉台式期から堀之内2式期まで確認できた。主体となるのは堀之内1式期である。大型の土器も多く、その接合関係は広範囲である。例えば、6号列石No16は、18区4号列石や18区25・27号配石出土土器との接合関係が見られた。6号列石No17も18区4号列石や18区27号配石出土土器との接合関係が見られた。詳細は観察表に記載している。石器は8点出土した。打製石斧が4点とやや多く、そのほかにも多孔石1点、台石1点が確認できた。

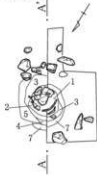
時期 堀之内1式期から堀之内2式期。遺物の出土状況や遺物の性格からも、時期を特定することは難しい。出土遺物の数量把握の結果と18区19号住居との関係から当該期に比定した。ただし、住居に伴う列石との判断から、図上では18区19号住居と同時期のように掲載している。



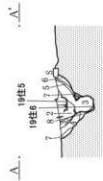
第48図 18区19号住居(1)、31号配石(1)



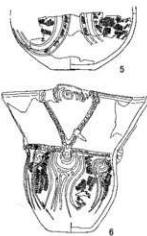
炉確認状況



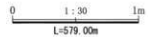
炉使用状況



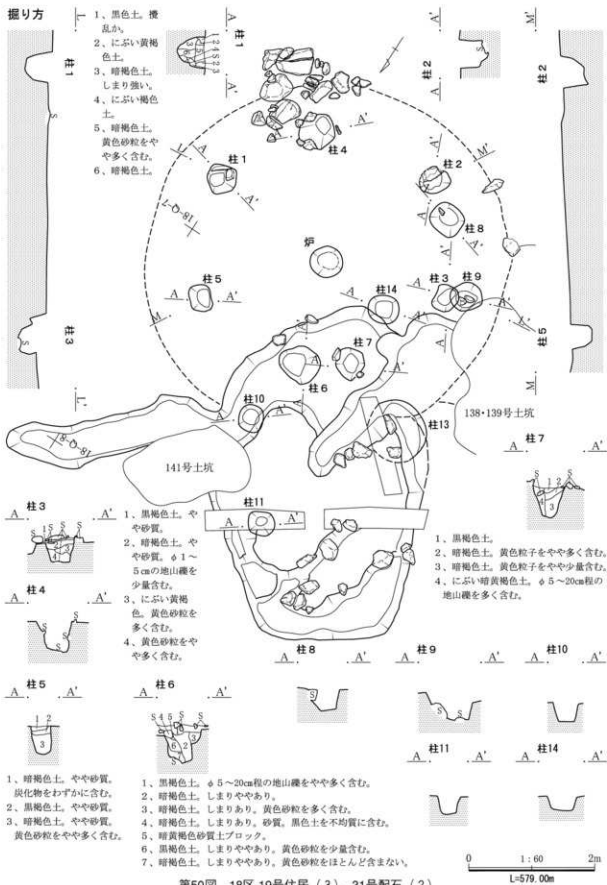
炉掘り方

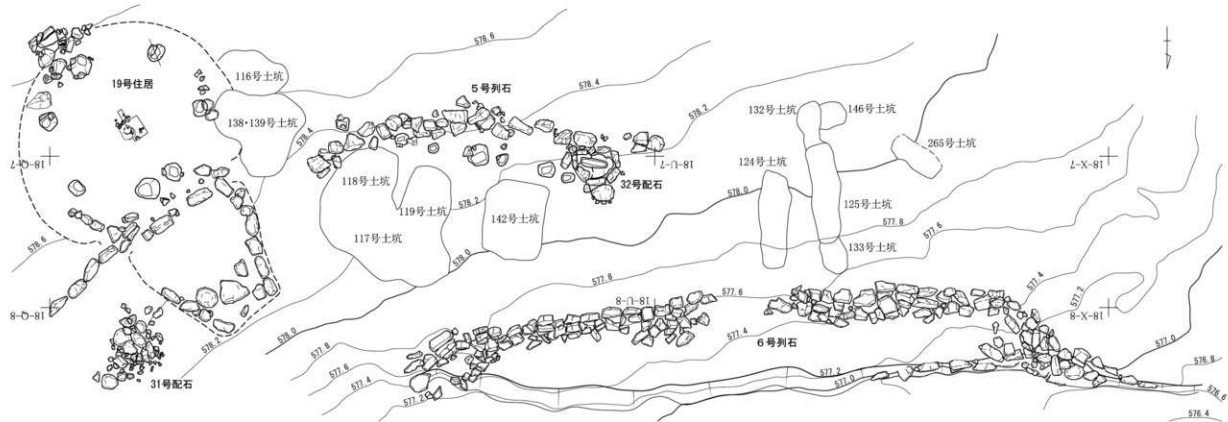


- 1、暗褐色土。しまりややあり。炭化物を少量含む。
- 2、黒褐色土。しまりややあり。黄色粒子を少量含む。
- 3、暗黄褐色土。しまりややあり。黄色粒子を少量含む。
- 4、黒褐色土。しまりややあり。炭化物を少量含む。
- 5、暗黄褐色土。しまりややあり。黄色粒子を少量含む。
- 6、褐色土。しまりややあり。
- 7、にぶい黄褐色土。しまりあり。8層のやや焼土化した層。
- 8、にぶい黄褐色土。しまりややあり。暗褐色土をわずかに含む。

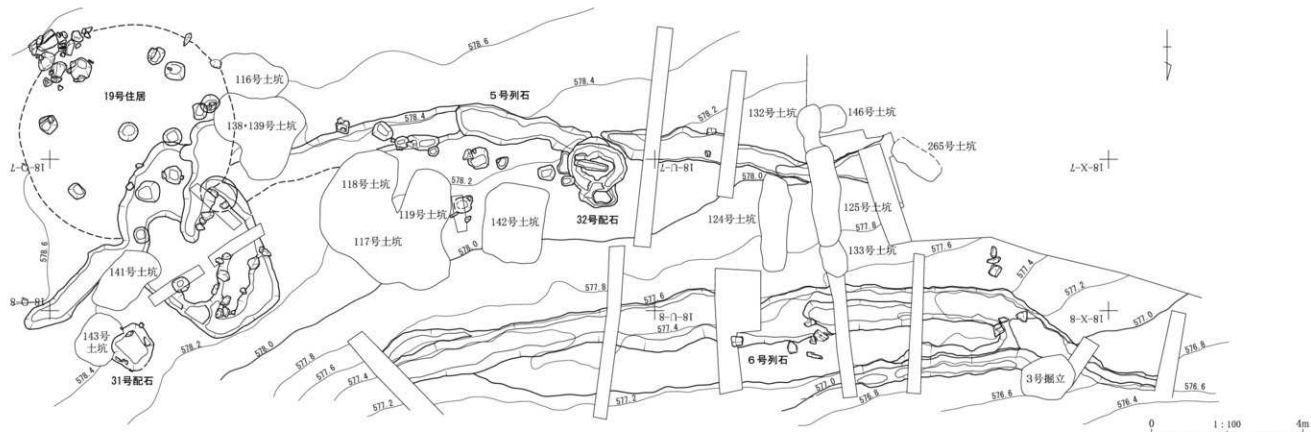


第49図 18区 19号住居 (2)

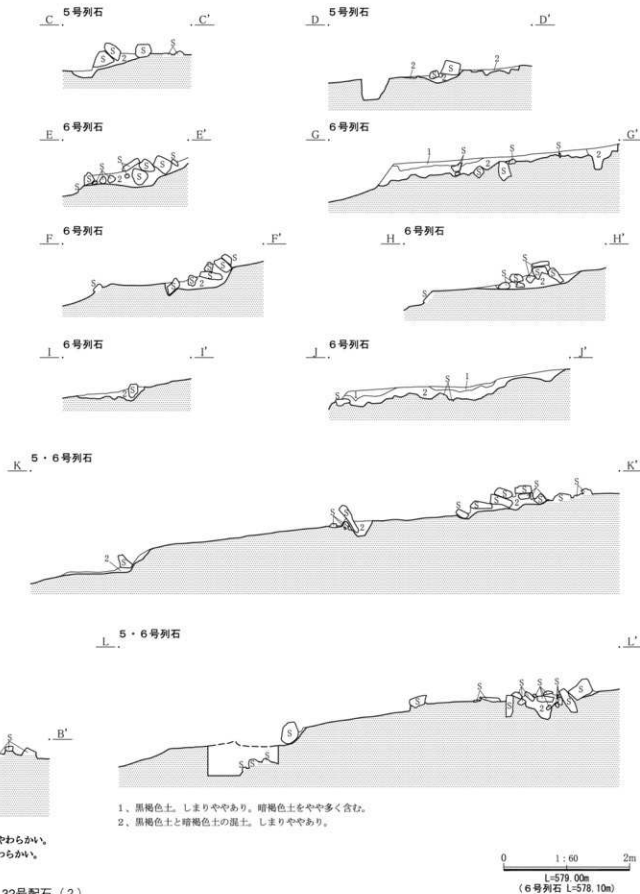
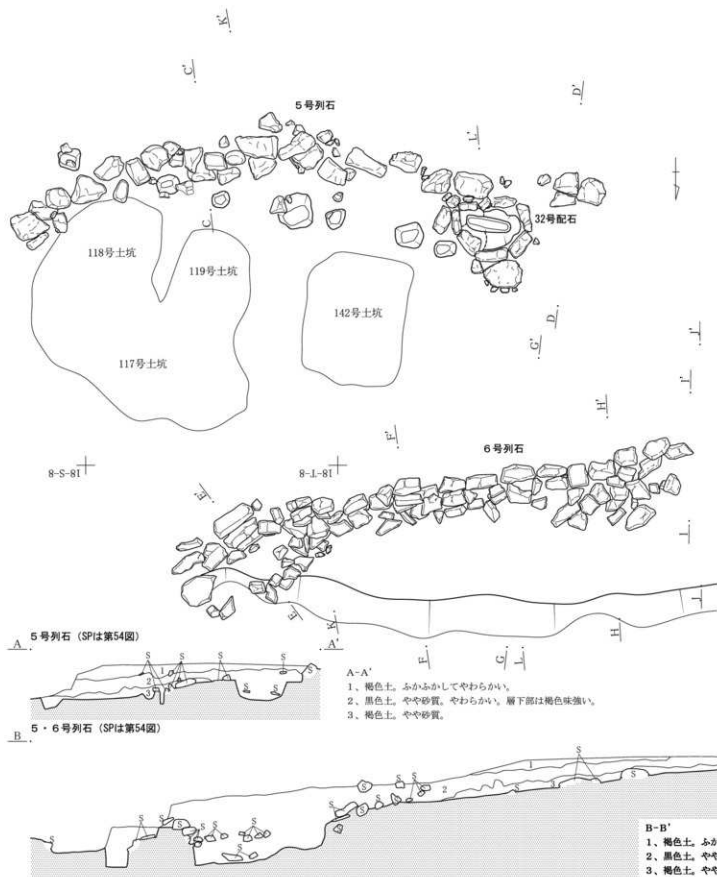




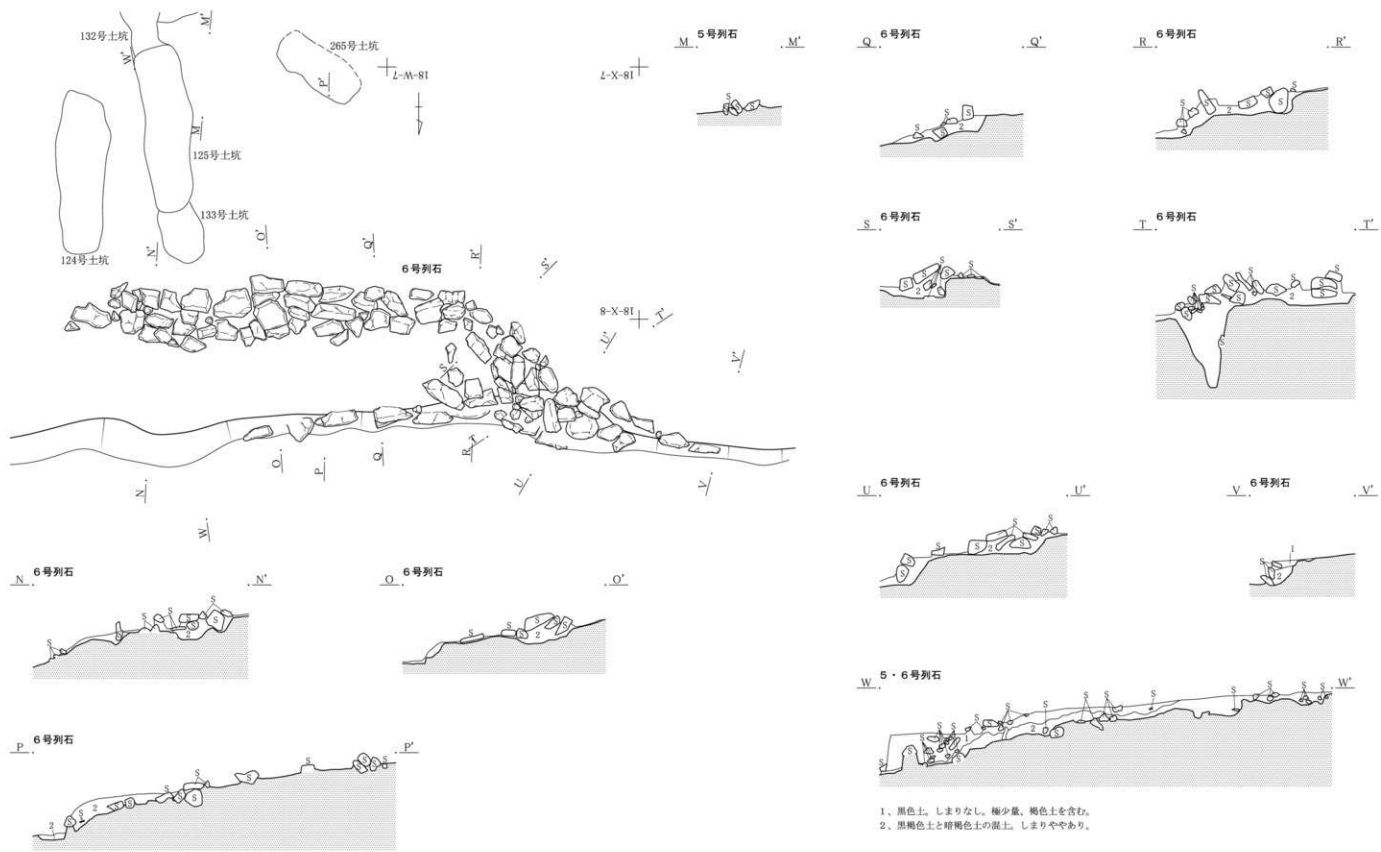
掘り方



第51図 18区19号住居(4)、5・6号列石(1)、31(3)・32(1)号配石

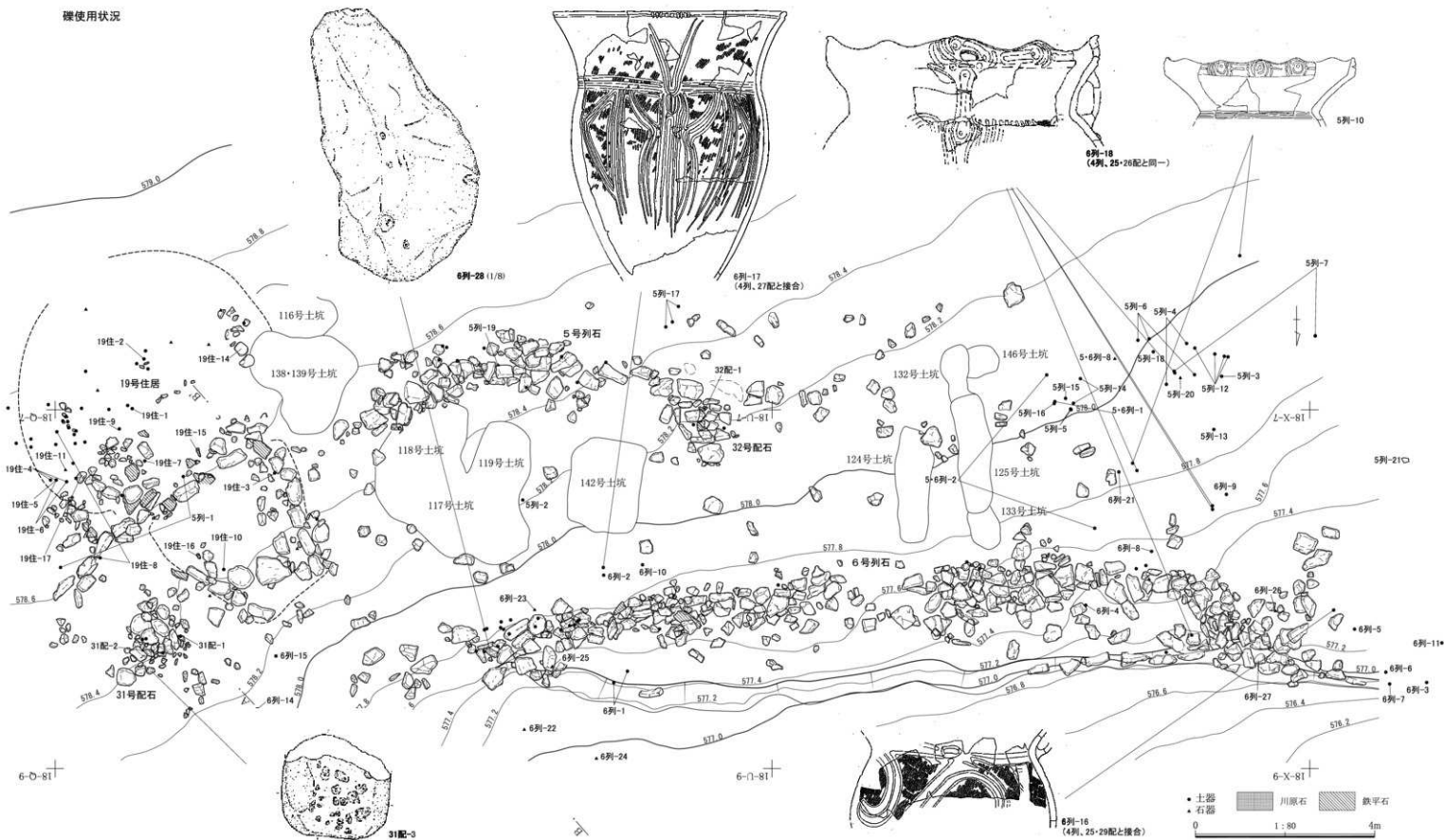


第52図 18区 5・6号列石(2)、32号配石(2)



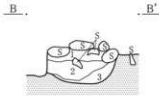
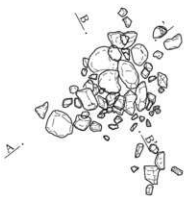
第53図 18区 5・6号列石(3)

確使用状況

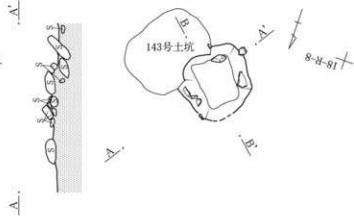


第54図 18区 19号住居 (5)、5・6号列石 (4)、31 (4)・32 (3)号配石

18区31号配石

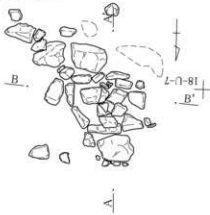


18区31号配石掘り方

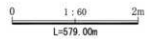
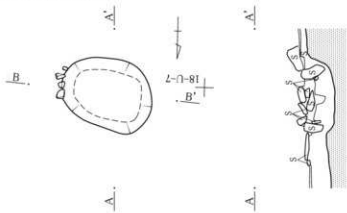


- 1、黒褐色土。しまりややあり。配石の間に充填される土。
- 2、黒褐色土。しまりややあり。φ3～5cm程の地山礫、炭化物を少量含む。
- 3、黒色土。暗黄褐色土ブロックを含む。φ3～5cm程の地山礫を少量含む。

18区32号配石

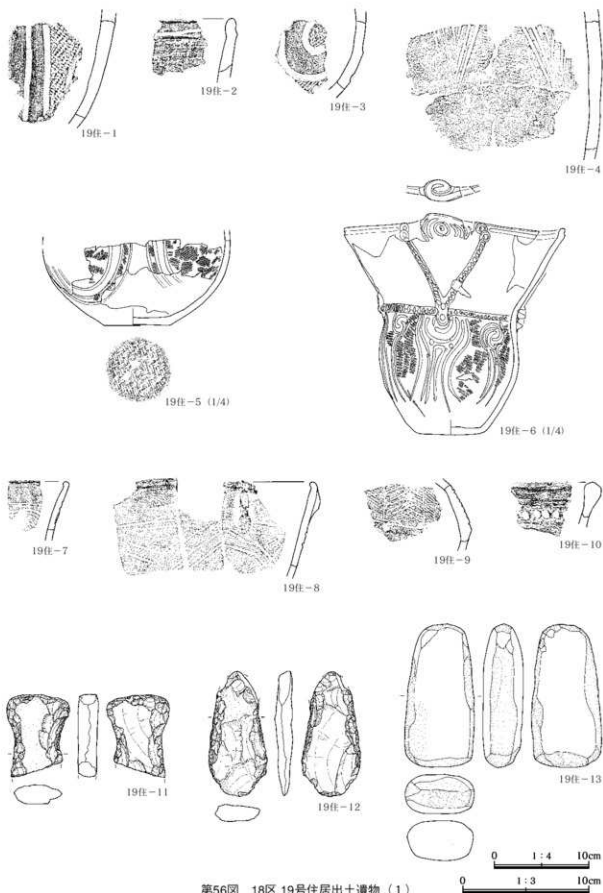


18区32号配石掘り方

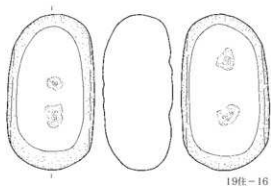
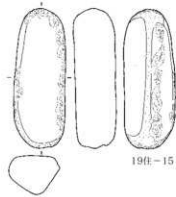
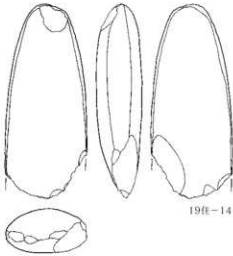


第55図 18区 31 (5)・32 (4) 号配石

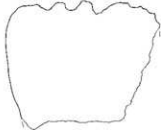
第3章 発見された遺構と遺物



第56図 18区 19号住居出土遺物 (1)



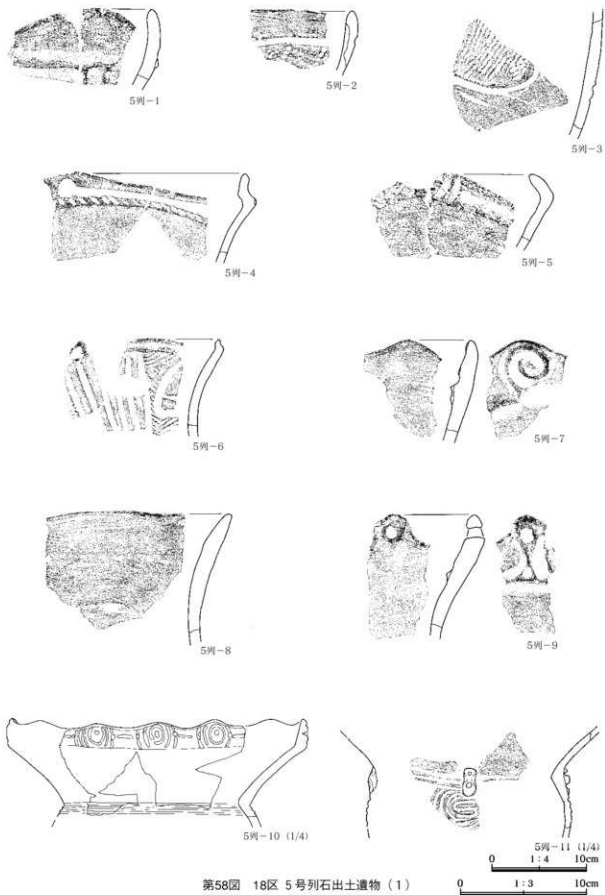
19住-17 (1/4)



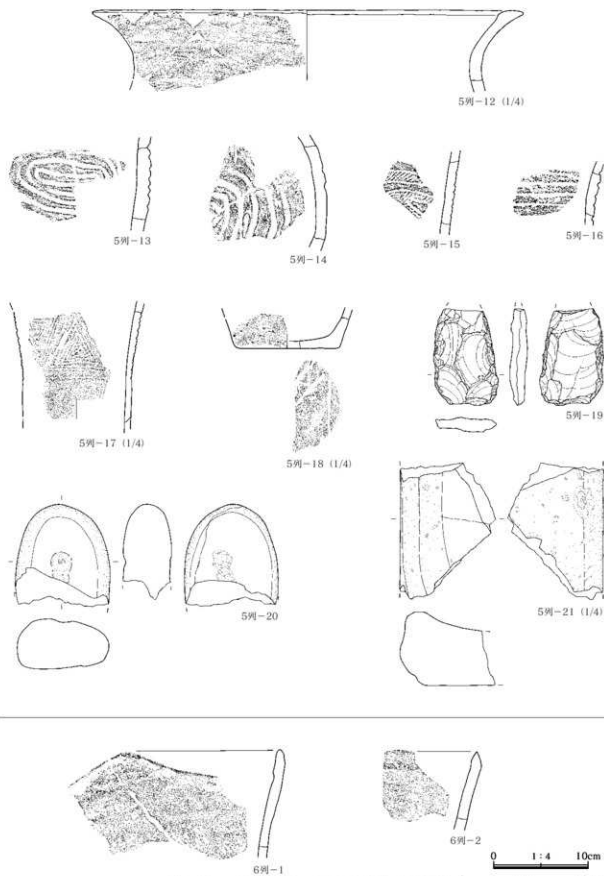
第57図 18区 19号住居出土遺物 (2)



第3章 発見された遺構と遺物



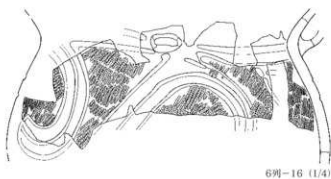
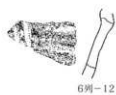
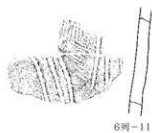
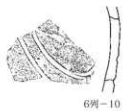
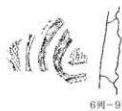
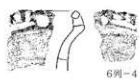
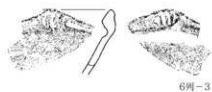
第58図 18区 5号列石出土遺物(1)



第59図 18区 5 (2) ・ 6 (1) 号列石出土遺物



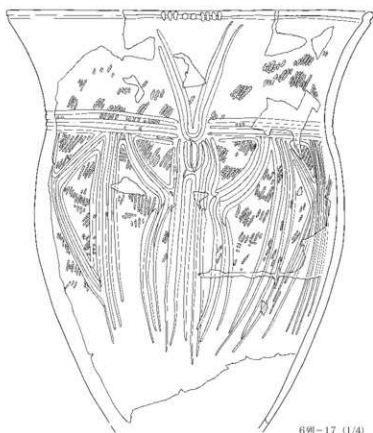
第3章 発見された遺構と遺物



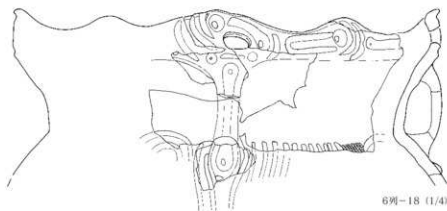
0 1:4 10cm

第60図 18区 6号列石出土遺物(2)

0 1:3 10cm



6列-17 (1/4)



6列-18 (1/4)

第61図 18区 6号列石出土遺物(3)

0 1:4 10cm

第3章 発見された遺構と遺物



6列-19



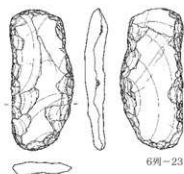
6列-20



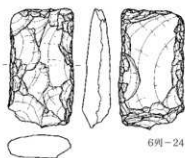
6列-21



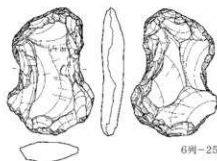
6列-22 (2/3)



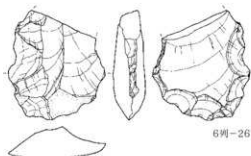
6列-23



6列-24



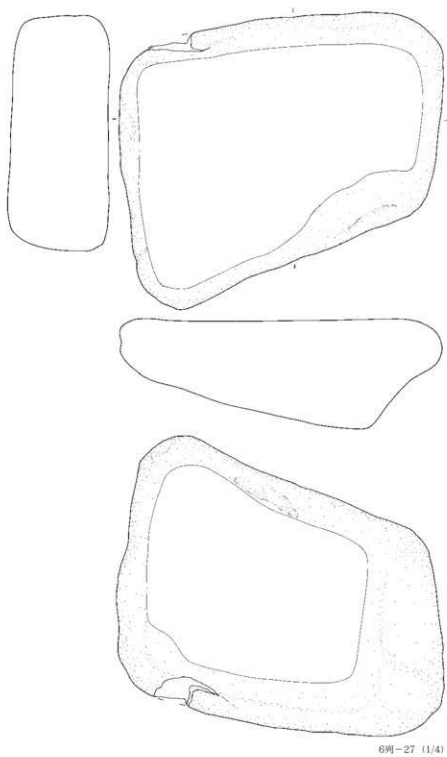
6列-25



6列-26

0 1:3 10cm

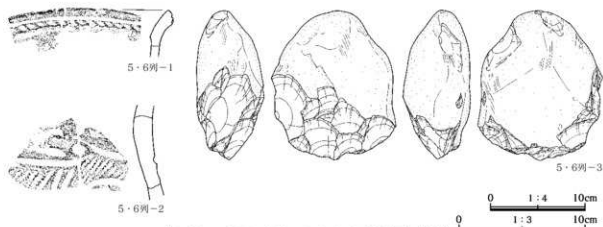
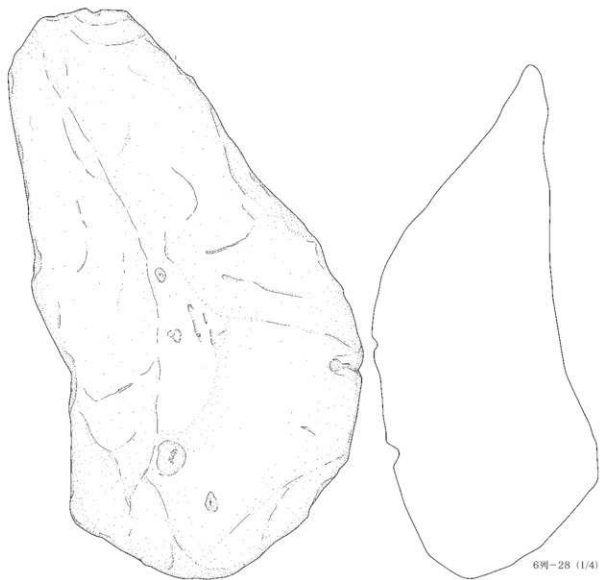
第62図 18区 6号列石出土遺物(4)



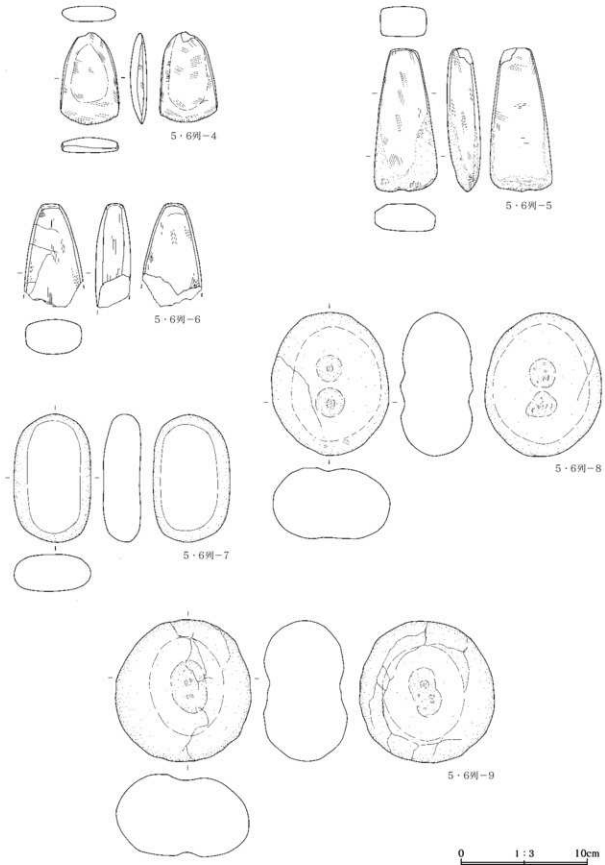
6列-27 (1/4)

0 1:4 10cm

第63図 18区 6号列石出土遺物(5)

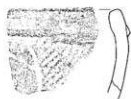


第64図 18区 6 (6)、5・6 (1) 号列石出土遺物



第65図 18区 5・6号列石出土遺物(2)

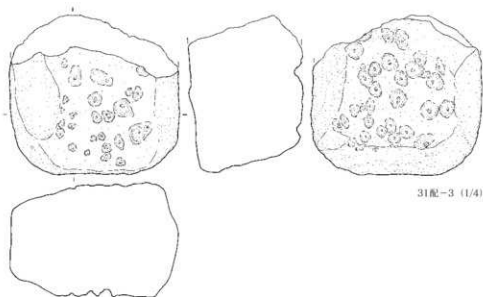
第3章 発見された遺構と遺物



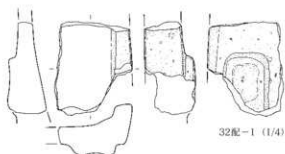
31配-1



31配-2

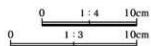


31配-3 (1/4)



32配-1 (1/4)

第66図 18区 31・32号配石出土遺物



18区31号配石

調査年度 平成14年度

位置 Q-8

経過 調査は平成14年度に行われた。18区19号住居出入り口付近の配石であり、住居に伴う遺構の可能性も考えられたが、調査時には単独の配石として調査された。

重複 なし

形状 大型礫も使用した集石状。平面形状は、細長い楕円形を呈する。小規模の列石状にも見える。規模（長辺×短辺、単位はcm）は、確認面で275×145。

下部遺構 歪んだ方形を呈する、土坑状の掘り込みが見られた。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、116×(108)×55。

石材等 地山の礫を使用している。多孔石などの石器も散見できる。ただし、平面図上に表現した礫の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

方位 N-48°-W

遺物 出土土器は102点を数える。加曾利EⅢ式期から縄文時代後期まで確認できた。主体となるのは加曾利EⅢ式期である。石器は、多孔石1点、磨製石斧1点が確認できた。検出された黒曜石の剥片、破片は少なく、4点、1.7gであった。

時期 堀之内1式期から堀之内2式期。前述の通り、18区31号配石は5号列石の継続、あるいは付属する配石の可能性が考えられる。これらを考慮し、本配石は18区5号列石と同時期になるものと判断した。

18区32号配石

調査年度 平成14年度

位置 T-6・7

経過 調査は平成14年度に行われた。18区5号列石に付属するように検出され、列石に伴う遺構または列石の一部との考えもあったが、単独の配石

として調査された。

重複 18区5号列石。重複関係は不詳。5号列石に付属する遺構の可能性もある。

形状 大型の礫を中心に集められた集石状。円形に礫を組んだようにも見える。平面形状は、歪んだ円形を呈する。規模（長辺×短辺、単位はcm）は、確認面で200×143。

下部遺構 楕円形を呈する、土坑状の掘り込みが見られた。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、148×110×48。

石材等 地山の大型礫を使用している。石皿などの石器も散見できる。ただし、平面図上に表現した礫の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

方位 N-85°-W

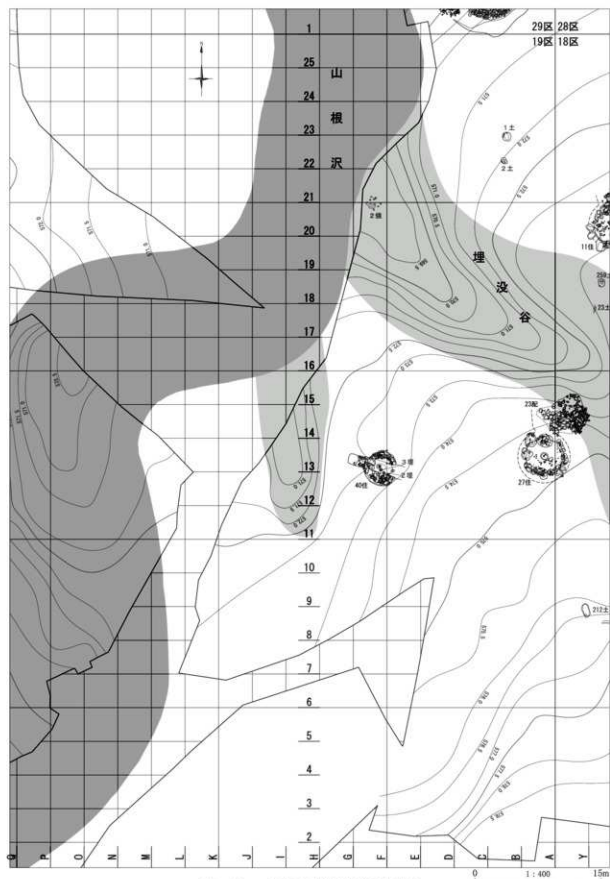
遺物 出土した土器は少なくとも24点を数えるのみである。石皿の破片のほかには、めばしい遺物も確認できない。検出された黒曜石の剥片も少なく、1点、1.1gのみであった。

時期 堀之内1式期から堀之内2式期。前述の通り、18区32号配石は5号列石の継続、あるいは付属する配石の可能性が考えられる。これらを考慮し、本配石は18区5号列石と同時期になるものと判断した。

2 19区の縄文時代後期住居

19区は、横壁中村遺跡のほぼ中央に位置する。調査区中央には山根沢が北流し、北側に東流する吾妻川へと流れ込む。調査区は、中央の山根沢及び北側へ緩やかに傾斜した地形上に位置する。

19区には、調査区を東西に分ける山根沢が成した南北方向の谷地形があり、本遺跡では、この谷の東西で住居が検出されている。本報告書では、19区の中央、山根沢が成した谷地形東側で検出された住居について扱う。報告する縄文時代後期住居は2軒、住居に伴う配石は1基である。



第67図 19区 縄文時代後期住居全体図

19区では、中央にある谷地形のほかにも、二箇所で埋没谷が検出された。埋没谷は縄文時代後期にはある程度埋もれていたと思われ、埋没谷であった場所からは、縄文時代後期の遺構が検出されている。縄文時代後期の段階では、埋没谷は緩やかに凹んだ地形としてのみ残存していたものと考えられる。縄文時代後期においても、中央の山根沢が成した谷地形は存在していたようで、集落はこれを挟むように検出されている。また、調査区東側では後期の土坑が検出されているが、その詳細については「横壁中村遺跡（6）」を参照していただきたい。

以下、個別住居ごとに報告する。

19区27号住居

調査年度 平成14年度

位置 18区Y-12・13、19区A-12・13・14
経過 調査は平成14年度に行われた。想定される住居主体部中央から炉を検出したため住居と認定された。調査時より列石や配石を伴う住居であるとの認識で調査されたが、遺構の重複が著しく、どの列石や配石が住居に伴うのか結論はでなかった。最終的には整理担当者が検討し、18区23号配石を伴う遺構と考え掲載している。また、住居の北側では調査時の掘りすぎも見られた。

重複 19区86・140号土坑と重複。19区140号土坑に切られるも、86号土坑とは不詳。

形状 柄鏡形。敷石住居か。遺存状態が悪く、住居の立ち上がりも判然としないが、主体部は直径6.2mほどの円形を呈するものか。壁高は、東側の遺存状態の良い場所で17cmほどであった。地形が低く傾斜している北側、埋没谷の方向に出入り口部が取り付くと考えられる。出入り口部の規模は、長軸2.8m×短軸3.5mほどか。ただし、検出された柱穴から考えると、調査所見とは異なり、主体部はさらに大きく出入り口部もほぼ北を向くようになると思われる（第68・69図参照）。

床面 主体部に鉄平石などの扁平な礫が散見で

きるため、敷石の可能性も考えられる。検出された小型の礫は、敷石の隙間に詰めた礫か。

18区23号配石の一部を、出入り口部と考え、出入り口部にも敷石が施されていたのかもしれない。

方位 N-19°-W、またはN-0°

炉 土器埋設炉。土器埋設炉は、想定される住居主体部中央付近で検出された。ほぼ円形を呈する土坑中央付近には、土器が正位に埋設されていた。埋設された土器は堀之内1式。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、90×87×14。

柱穴 柱穴は17基検出された。検出された柱穴は、炉を中心に円を描くように確認された。住居形状については不明瞭な点も多く、主柱穴については判然としない。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：187×156×95、柱2：124×72×60、柱3：56×(44)×25、柱4：137×73×75、柱5：70×54×52、柱6：105×86×59、柱7：74×49×49、柱8：136×94×124、柱9：(34)×27×25、柱10：56×52×52、柱11：78×(45)×44、柱12：70×(38)×43、柱13：157×138×56、柱14：欠番か、柱15：170×137×49、柱16：40×28×50、柱17：47×40×49、柱18：58×48×41。

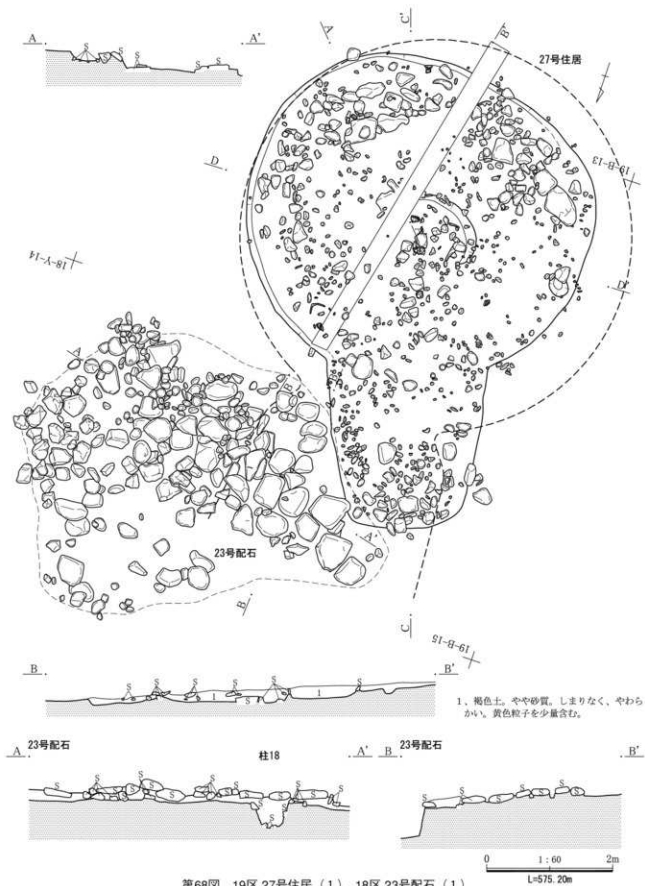
遺物 出土土器は多く604点を数える。焼町土器から堀之内2式期まで確認できたが、主体となるのは堀之内1式期である。北陸系の土器が確認できるなど、長野県に隣接し新潟県にも近い八ッ場地域らしい特徴も見られた。石器は11点出土した。磨石が8点と、その大半を占めている。黒曜石の剥片、破片は6点、13.1g検出された。

時期 堀之内1式期。炉に埋設されていた土器より当該期に比定した。

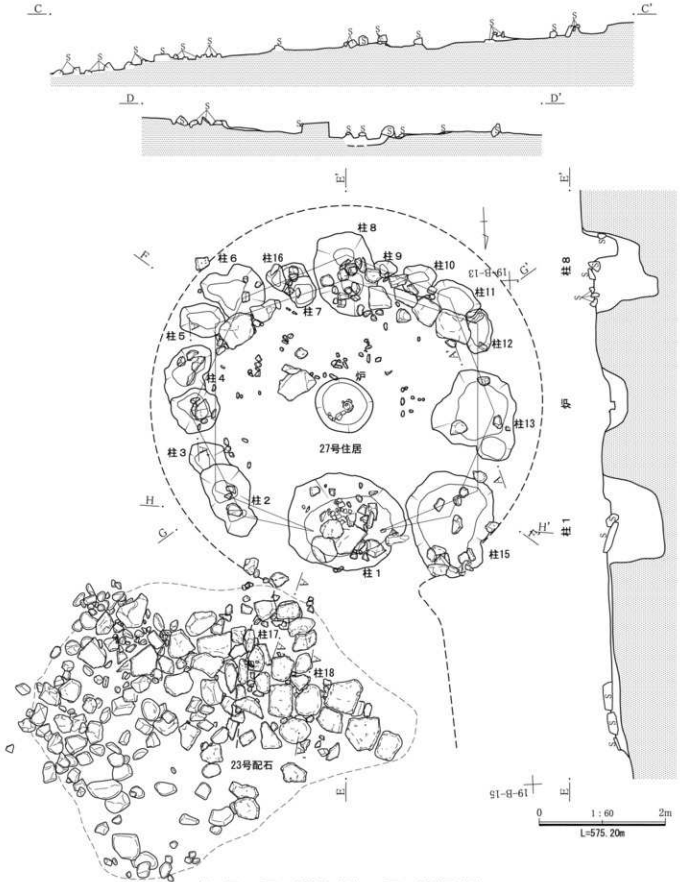
18区23号配石

調査年度 平成14年度

位置 18区Y-14・15、19区A-14

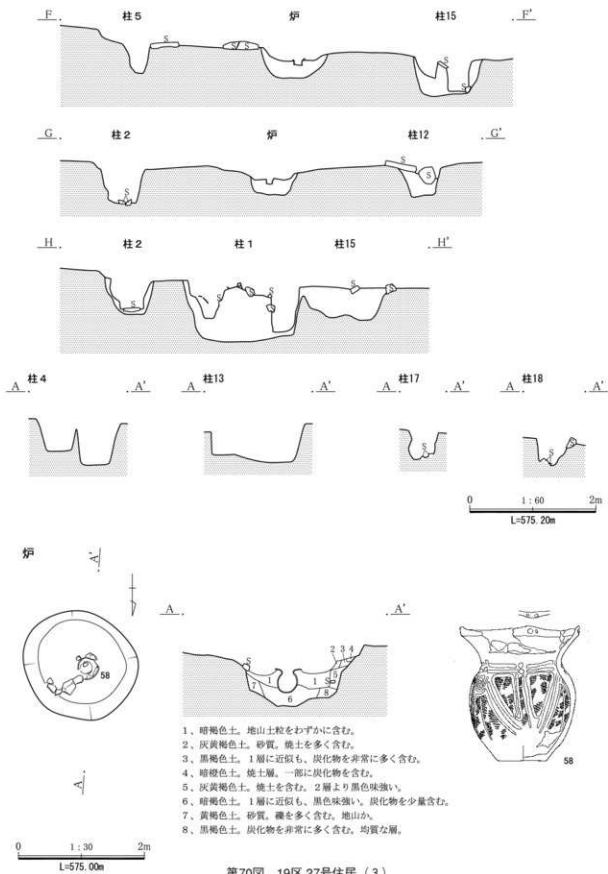


第68図 19区 27号住居 (1)、18区 23号配石 (1)

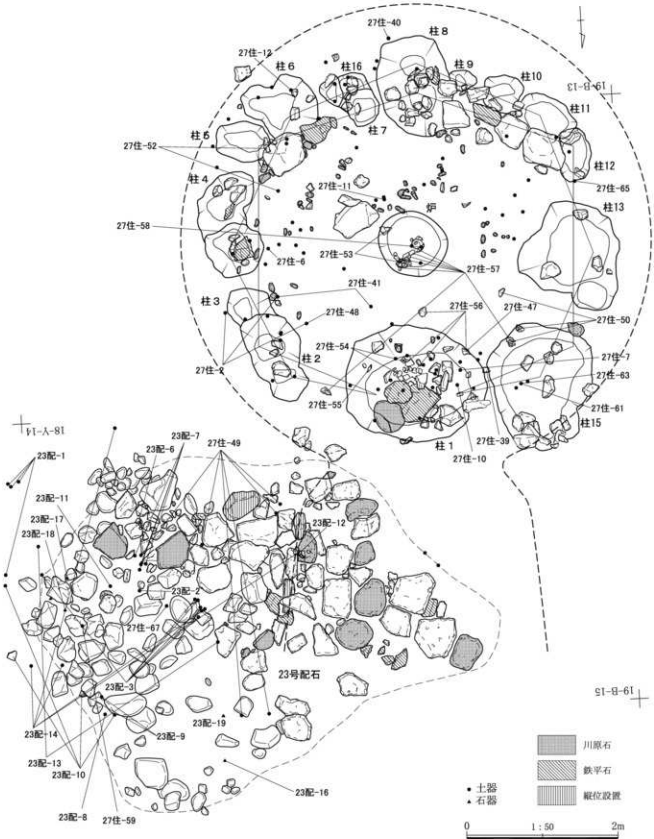


第69図 19区27号住居(2)、18区23号配石(2)

第3章 発見された遺構と遺物



礎使用状況

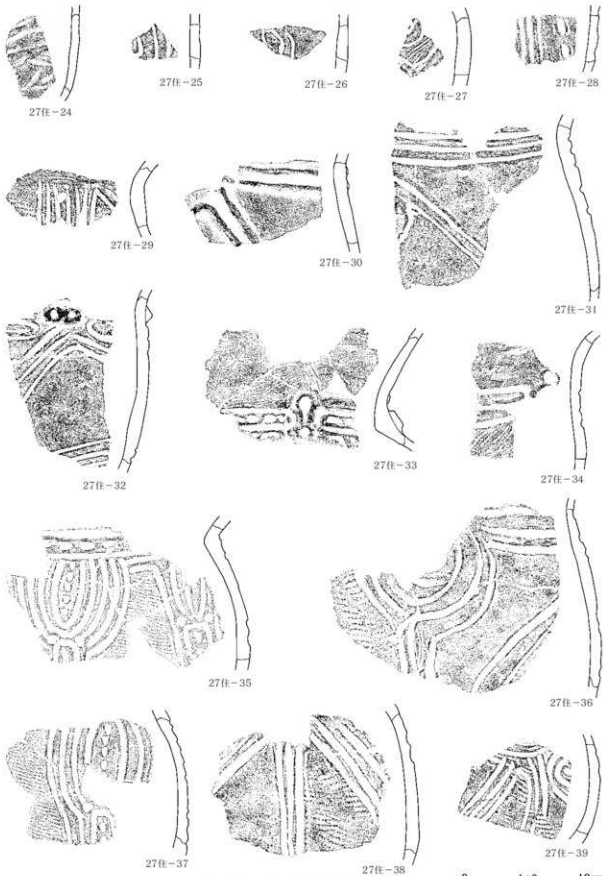


第71図 19区 27号住居 (4)、18区 23号配石 (3)

第3章 発見された遺構と遺物

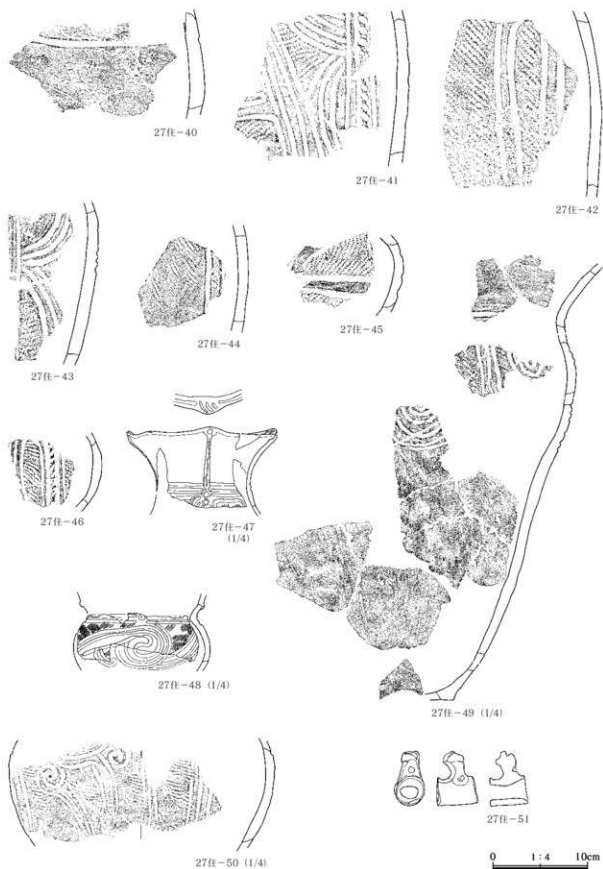


第72図 19区 27号住居出土遺物 (1)

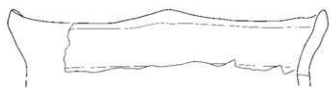


第73図 19区 27号住居出土遺物(2)

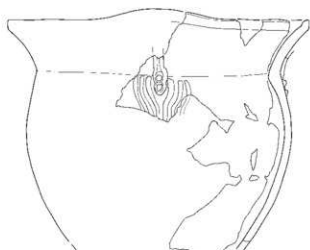
第3章 発見された遺構と遺物



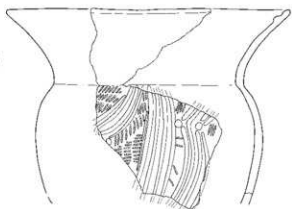
第74図 19区 27号住居出土遺物 (3)



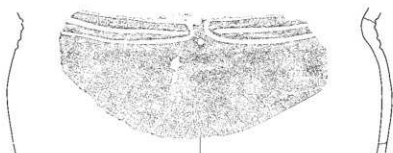
27ft-52 (1/4)



27ft-54 (1/4)



27ft-53 (1/4)



27ft-55 (1/4)

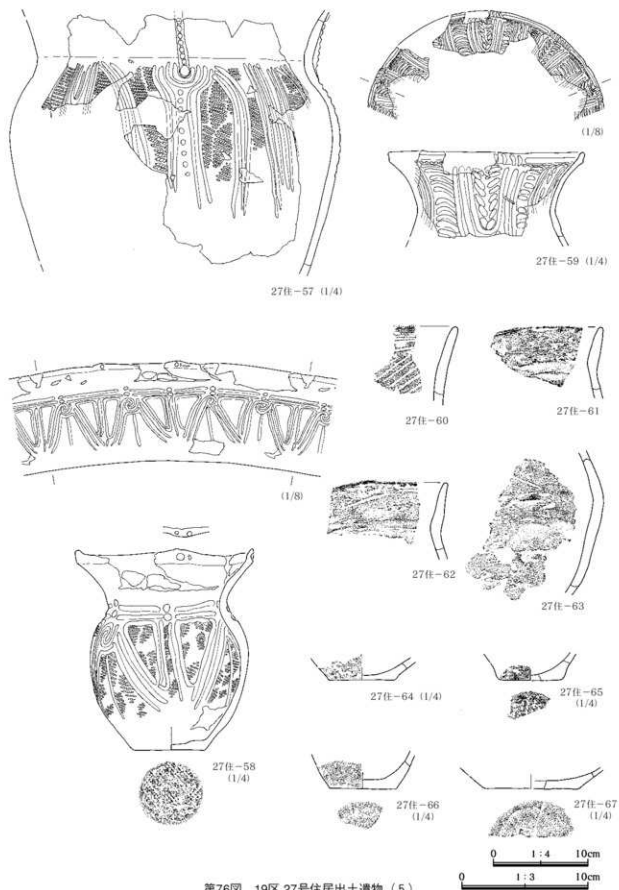


27ft-56 (1/4)

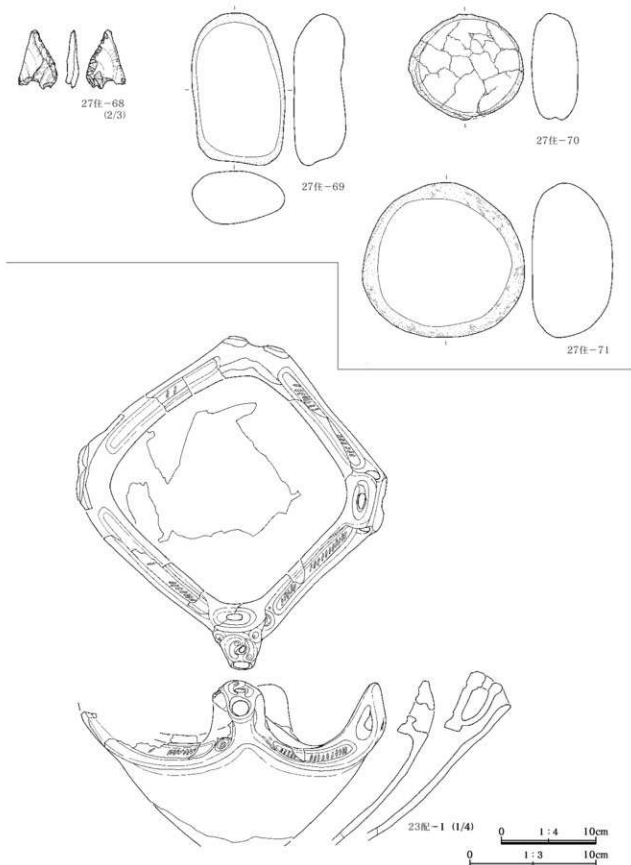
第75図 19区 27号住居出土遺物(4)

0 1:4 10cm

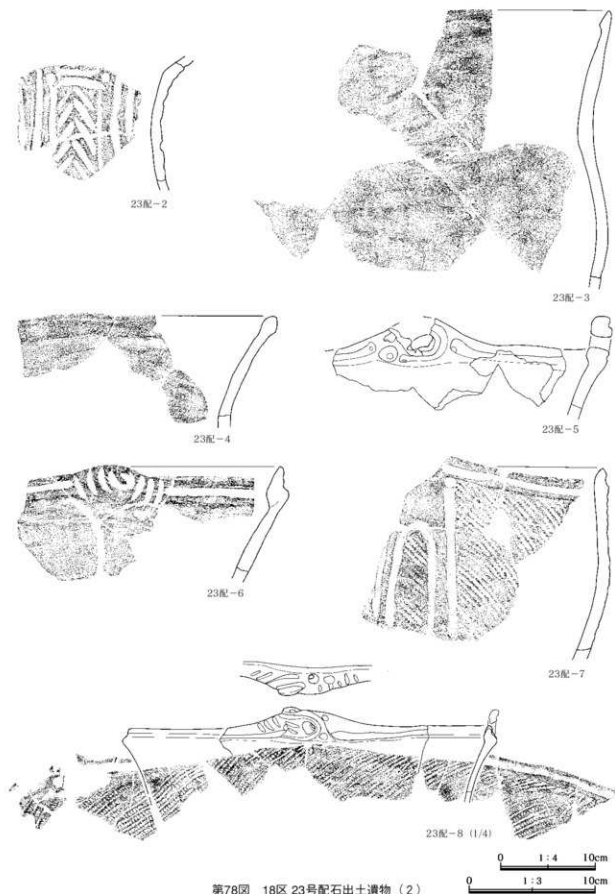
第3章 発見された遺構と遺物



第76図 19区 27号住居出土遺物 (5)



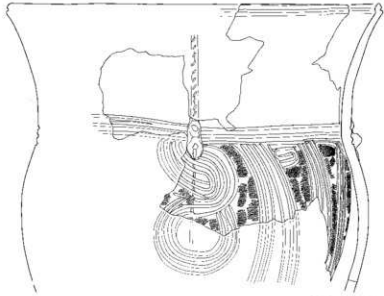
第77図 19区 27号住居 (6)、18区 23号配石 (1) 出土遺物



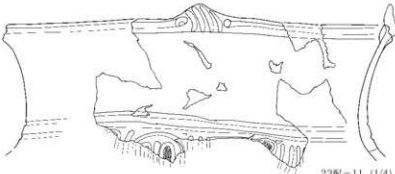
第78図 18区 23号配石出土遺物 (2)



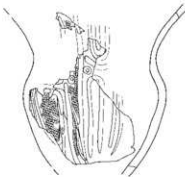
23配-9 (1/4)



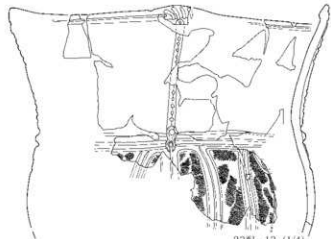
23配-10 (1/4)



23配-11 (1/4)



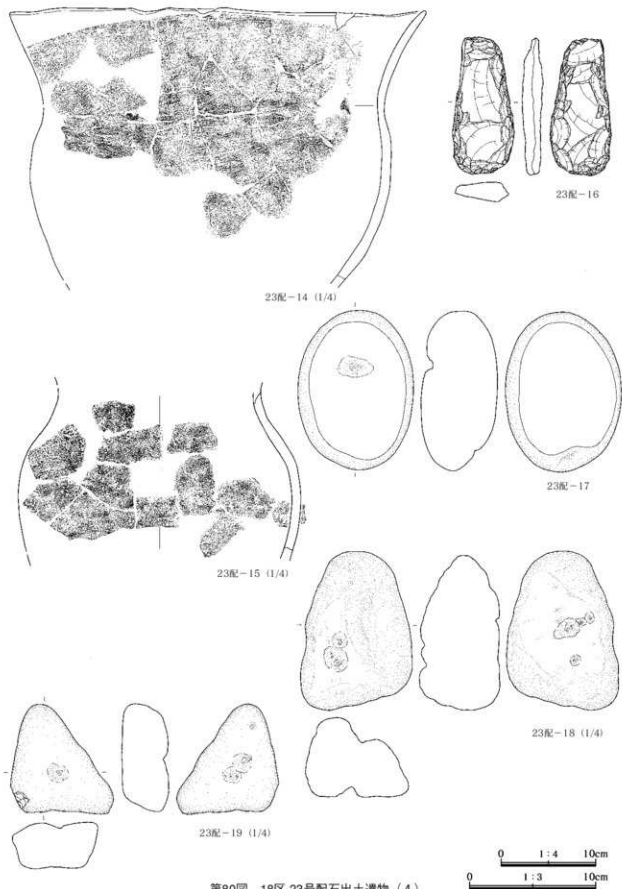
23配-12 (1/4)



23配-13 (1/4)

第79図 18区 23号配石出土遺物 (3)

0 1:4 10cm



経過 調査は平成14年度に行われた。調査時より19区27号住居に伴う配石であるとの認識で調査された。しかし、どの遺構が住居に伴うものか判然とせず、最終的には遺物の接合関係や遺構の出土状況を考慮し、整理担当者が判断した。

重複 18区4号列石、18区29号配石。重複関係は不詳。18区4号列石は、18区23号配石を切る可能性もある。そのため、23号配石の一部は18区4号列石によって壊されている可能性が考えられる。

形状 平面形状は集石状。大型の礫を見ると、ほぼ東西方向へ、列石状に並んでいるようにも見える。規模（長辺×短辺、単位はcm）は、確認面で730×430。一部は19区27号住居の出入り口部か。
下部遺構 土坑状の落ち込みは見られなかったが、柱穴が2基検出されている。柱17と柱18の規模は前述の通りである。

石材等 地山の礫のほかに、川原石や鉄平石が使用されていた。多孔石や磨石などの石器も散見できた。また、縦位に据えられた礫も見られた。

方位 不詳

遺物 出土土器は31点を数える。堀之内1式が19点と、その大半を占めている。大型土器も多く、数量以上に出土遺物は多く感じるが、他の遺構との重複関係も著しく、23号配石に伴うものかは判断し難い。石器は5点出土した。多孔石2点のほか、磨石や打製石斧も確認できた。

時期 堀之内1式期。前述の通り、多くの列石、配石が隣接、重複しており、時期を判断する材料は少ない。出土した遺物と19区27号住居に伴う遺構との認識から当該期に比定した。

19区40号住居

調査年度 平成15年度

位置 E・F-12・13、G-13

経過 調査は平成15年度に行われた。住居主体部中央から炉を検出したため住居と認定された。

住居中央には試掘調査時のトレンチがあり、トレンチ以外の箇所では、鉄平石などを使用した敷石の一部が検出された。出入り口部、土器埋設がは、比較的良好な遺存状態であった。調査所見には、重複する土器埋設遺構の存在から建て替えられた可能性が指摘されていたが、炉ではなく、単独の土器埋設遺構だと考えている。

重複 2・3号土器埋設遺構。住居炉の検出状況から考えると、住居炉を3号土器埋設遺構が切っていたと思われる。2号土器埋設遺構との重複関係は不詳。2号土器埋設遺構に埋設されていた土器も、40号住居と同様に堀之内1式期であり、重複関係は不明瞭である。

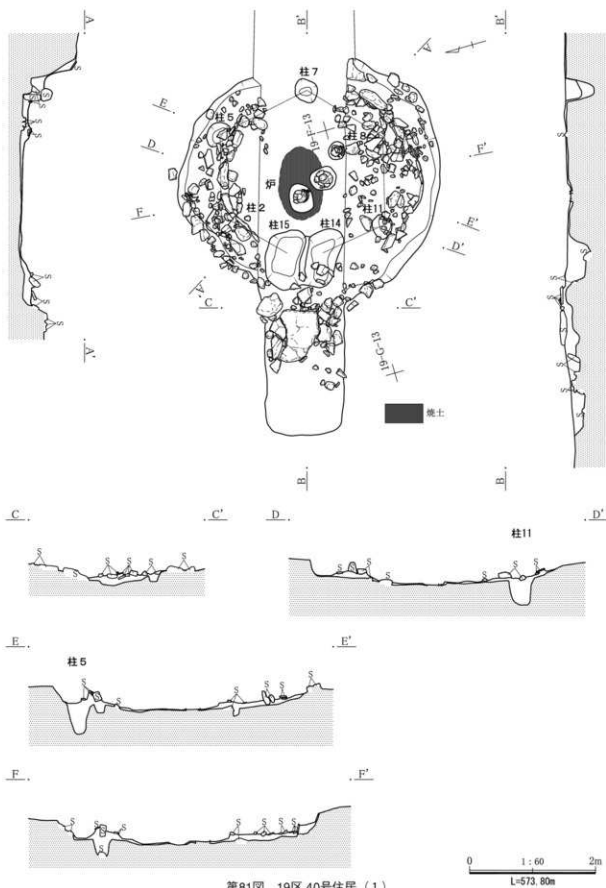
形状 柄鏡形敷石住居。試掘トレンチにより主体部の一部は確認できないが、主体部は直径4.1mほどの円形を呈する。壁高は、遺存状態の良い場所で75cmほど。地形が低く傾斜している西北西側、埋没谷の方向に出入り口部を取り付けたものと考えられる。出入り口部の規模は、長軸2.33m×短軸1.36mほどであった。

床面 敷石の一部である、鉄平石などの扁平な礫が検出された。調査所見には、鉄平石などの扁平な礫は原位置を保っているとあり、主体部と出入り口部には敷石が施されていたものと考えられる。出入り口部の大型礫には、磨れた痕跡も残っていた。

調査所見には、主体部中央、平面円形に配置された箇所を周石と指摘していた。炉を中心に縦位に据えられた礫が見られるが、これを周石と考えている。敷石の際に入れたと思われる黒土も確認でき、構築方法は18区15号住居に近似している。

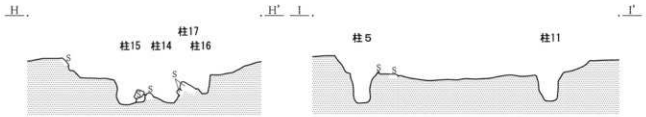
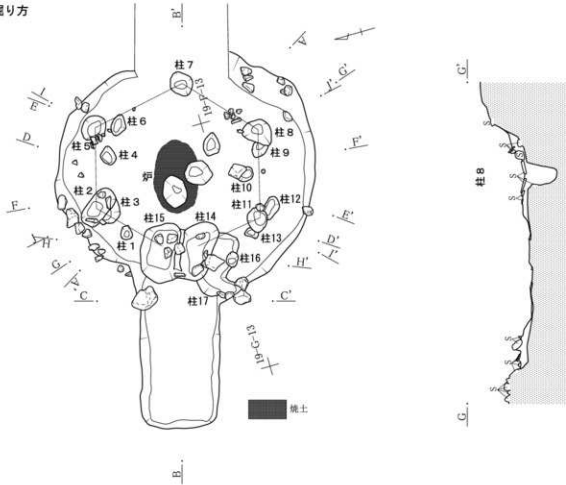
方位 N-74°-W

炉 土器埋設炉。主体部中央付近に焼土範囲が確認でき、焼土範囲の西側では、土器を埋設した炉が確認できた。土器2点は、重ねられた状態で出土した。被熱痕跡が顕著で、上から40号住居No17は堀之内1式、No24は縄文時代後期と考えられる。土器はともに胴部のみであり、丁寧に打ち欠き、転用されたものと考えられる。炉の規模（長辺×短



第81図 19区40号住居(1)

掘り方

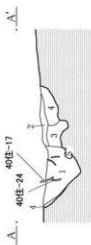
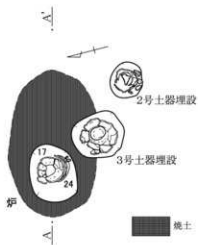


柱穴出土状況（北西から）

0 1:60 2m
L=573.80m

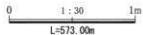
第82図 19区40号住居（2）

炉



- 1、黒褐色土。炭化物を含む。埋設土器の内と外で差はない。
- 2、焼土化した地山土の黄色粗砂と1層とのブロック凝土。
- 3、黒褐色土。床に敷いた土に近似。
- 4、焼土化した地山土の黄色粗砂。

炉掘り方



第83図 19区40号住居(3)

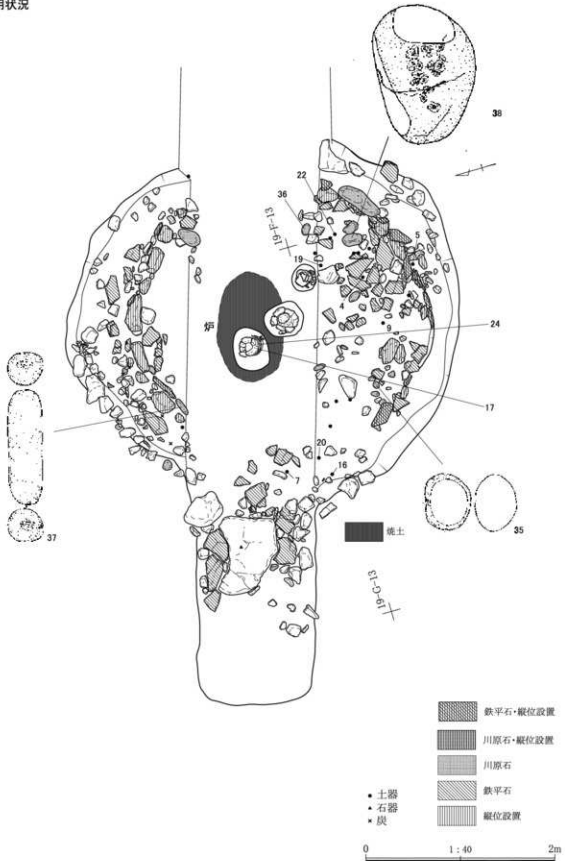


炉、土器埋設遺構(北から)



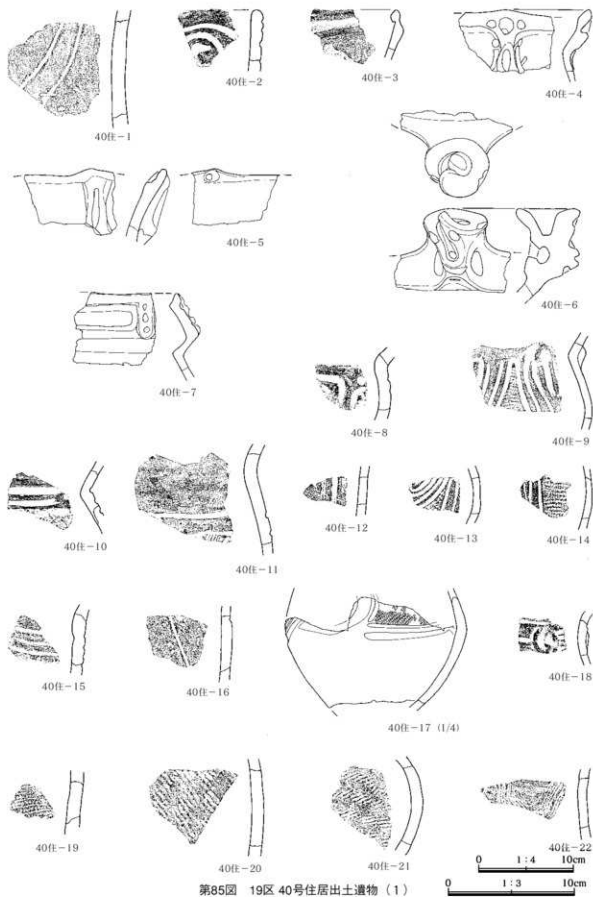
炉(南西から)

裸使用状況

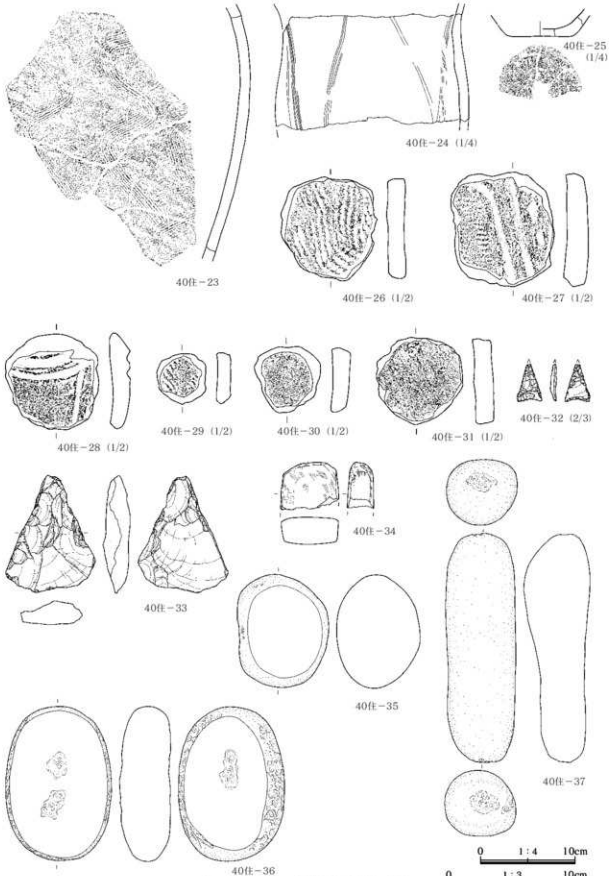


第84図 19区 40号住居 (4)

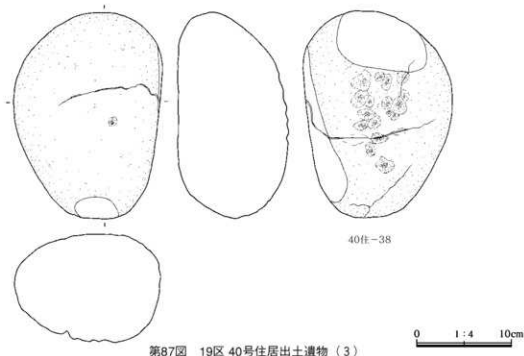
第3章 発見された遺構と遺物



第85図 19区40号住居出土遺物(1)



第86図 19区 40号住居出土遺物(2)



第87図 19区40号住居出土遺物(3)

辺×深さ、単位はcm)は、確認面で48×38×34。掘り方では117×70×56、平面形状はやや歪んだ円形を呈する土坑状であった。

近接して、2・3号土器埋設遺構が検出された。当初は、住居炉とも考えたが、単独の土器埋設遺構と判断され、既に報告されている。詳細は「横壁中村遺跡(7)」を参照していただきたい。

柱 穴 柱穴は17基検出された。炉を中心に平面円形または亀甲形に検出されており、企画面もある。検出された柱穴のうち、主柱穴は7基であろう。柱2・5・7・8・11・14・15がそれぞれにあたるが、重複して検出された柱穴も主柱穴の一部である可能性が高い。数度の建て替えが行われていたことも伺わせる。出入り口部で検出された柱穴も数基あり、前述のことを追従する出土状況と考えている。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：21×18×17、柱2：67×34×54、柱3：40×(18)×37、柱4：25×22×21、柱5：44×36×46、柱6：35×24×16、柱7：41×36×44、柱8：49×36×45、柱9：23×(23)×19、柱10：22×(15)×15、柱11：40×32×48、柱

12：(29)×22×13、柱13：22×(14)×14、柱14：96×49×36、柱15：96×56×34、柱16：24×19×30、柱17：103×(36)×23。

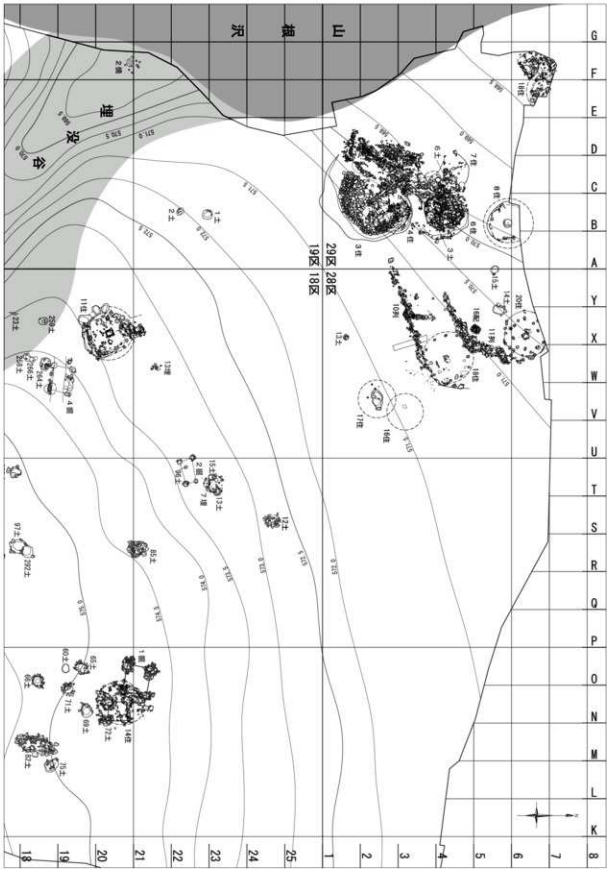
遺 物 出土土器は144点を数える。諸磯c式期から堀之内2式期までと時期幅は広いが、60点を堀之内1式が占めていた。土製円盤が6点と多く出土している。石器は14点出土した。磨石が7点と半数を占める。ほかに石鏃1点、打製石斧1点、多孔石1点などが確認できた。検出された黒曜石の碎片は少なく、2点、0.6gであった。

時 期 堀之内1式期。炉に埋設されていた土器より当該期に比定した。

3 28区・29区の縄文時代後期住居

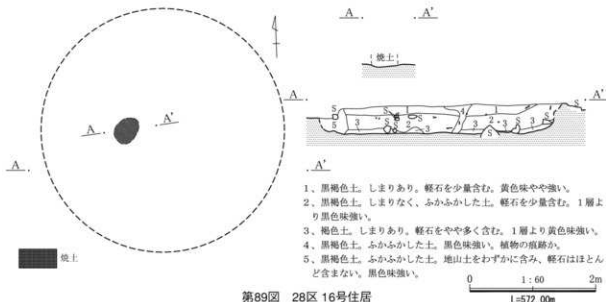
28区・29区は、横壁中村遺跡の北東側に位置する。調査区北側には吾妻川が東流し、東側には東沢が北流、中央には山根沢が北流する。調査区は、北北西へ緩やかに傾斜した地形上に位置する。

28区で検出された縄文時代後期住居は4軒、住居に伴う列石は2基、配石は1基である。29区山根沢東側で検出された縄文時代後期住居は6軒、伴



第88図 28・29区 縄文時代後期住居全体図

第3章 発見された遺構と遺物



第89図 28区 16号住居

う列石は2基、配石は1基である。

28区・29区は、多数の遺構が検出された重複の著しい調査区であった。遺構検出状況から考えると、遺跡はさらに北側へ広がる様相を示している。しかし、調査区北側を流れる吾妻川によって削平を受けたと思われ、集落の広がりなどその様相は不明瞭である。また、敷石住居や列石、配石には川原石も使用されているが、調査区と吾妻川とは、比高差40mほどの急峻な段丘崖によって隔てられているため、容易に降りることはできない。どのような意図を持って川原石を使用したのかは、現時点で結論付けることは難しい。

28区・29区からは、多くの列石や配石も検出された。単独の遺構とも考えられるが、一部については縄文時代後期住居に伴う施設と判断し報告している。縄文時代後期の土坑も数基検出されているが、その詳細については『横壁中村遺跡(6)』を参照していただきたい。

以下、個別住居ごとに報告する。

28区16号住居

調査年度 平成11年度

位置 U・V-2・3

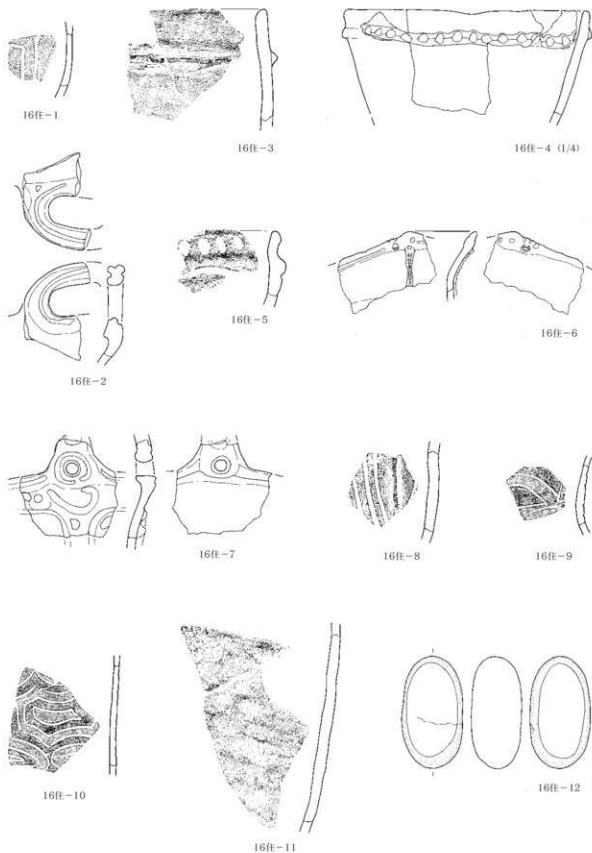
経過 調査は平成10年度より行われた。縄文時代後期の遺物が集中して出土したことにより、住居の可能性が考えられたが、炉は検出できなかった。平成11年度に最終確認のため掘り下げた際、焼土痕を確認し、これを炉とする住居と認定した。しかし、柱穴も確認できないほど遺存状態は悪く、住居範囲を想定することもままならないほどであった。

ここで示す住居範囲は、トレンチ調査で検出された状況を参考に想定した範囲であり、調査の中で立ち上がりなど住居範囲を明確にさせるような痕跡は確認できなかった。そのため、調査時には住居出土遺物として取り上げたもののほかに、グリッド出土遺物として取り上げているものも多く見られた。整理作業では、住居出土遺物とグリッド出土遺物との接合関係を確認し、住居出土遺物と接合した土器、同一の土器を住居出土遺物として認定している。そのためか、遺存状態は悪いが、出土遺物は比較的多い結果となった。

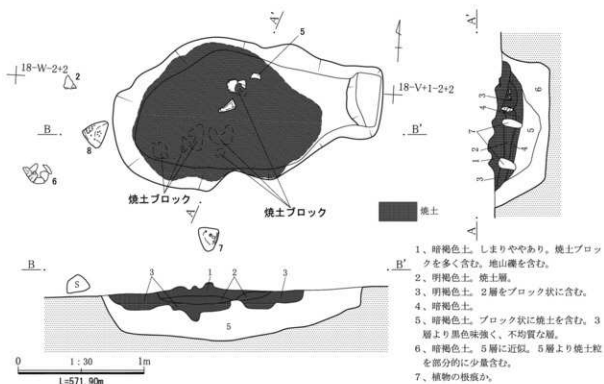
重複 なし

形状 住居範囲は判然とせず、平面形状は不詳。トレンチ調査では明瞭な掘り込みが見られるが、これが住居覆土を示すものかは不明瞭である。掘りすきの可能性も考えられる。

床面 遺存状態が悪く、敷石であったのか、硬



第90図 28区 16号住居出土遺物



第91図 28区17号住居

化面があったのかも不明。床面が平坦であったかどうかとも判断としない。

方位 不詳

炉 焼土痕。トレンチ調査の結果から考えると、焼土痕は想定される主体部中央では検出されていない。断面図にある掘り方よりも20cmほど低い高さから検出されているため、炉ではない可能性も考えられる。規模（長辺×短辺、単位はcm）は、確認面で46×33。掘り込みは確認できない。

柱 穴 検出されなかった。

遺物 住居の遺存状態は悪いが、前述の通り出土遺物は多く、土器は236点を数える。勝坂式期から縄文時代晩期末までと時期幅は広い。住居に伴わない遺物が混在しているためと考えている。主体となるのは堀之内1式期である。石器は3点、磨石2点、使用痕1点を確認した。

時期 縄文時代後期。出土遺物は堀之内1式が多いが、時期幅も広く、住居の遺存状態の悪さからも時期を比定することは難しい。ここでは、縄文

時代後期までにとどめたい。

28区17号住居

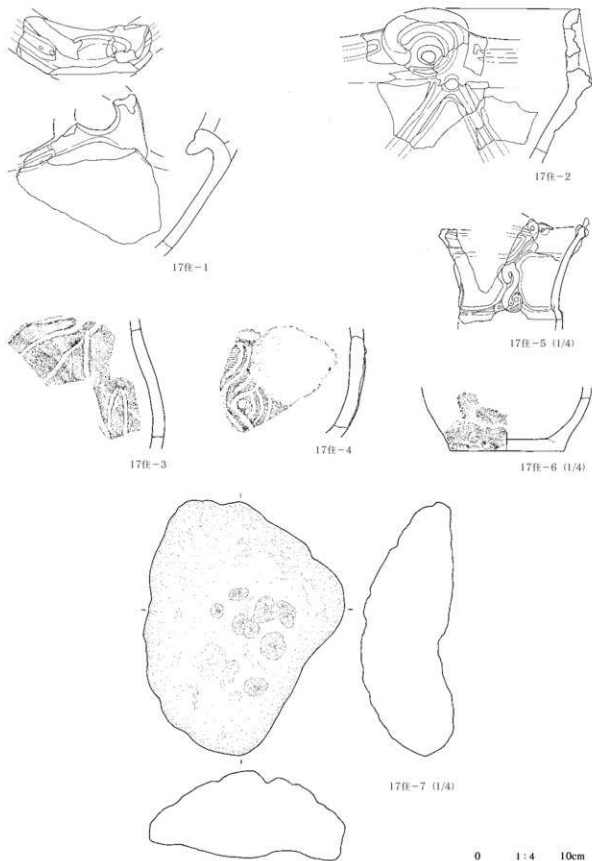
調査年度 平成10年度

位置 V-1・2

経過 調査は平成10年度に行われた。住居の遺存状態は悪く、調査の中で住居の立ち上がりなど住居範囲を明確にさせるような痕跡は確認できなかった。住居範囲を想定することもできない状況であった。

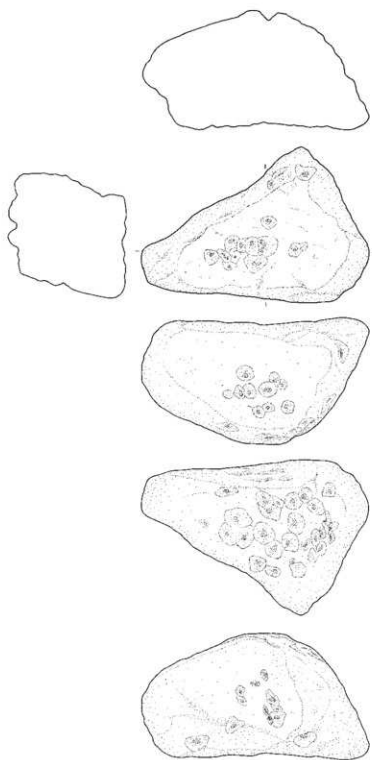
掲載した土坑状の掘り込みは住居炉の可能性が考えられる。ただし、掘り込みの規模は大きく、すべてが住居炉の痕跡ではなく、住居覆土あるいは掘り方を含んだものを検出した可能性が考えられる。

調査時には住居出土遺物として取り上げたもののほかに、グリッド出土遺物として取り上げているものも多く見られた。整理作業では、住居出土遺物とグリッド出土遺物との接合関係を確認し、住居出土



第92図 28区 17号住居出土遺物 (1)





17住-8 (1/4)

0 1:4 10cm

第93図 28区17号住居出土遺物(2)

遺物と接合した土器、同一の土器を住居出土遺物として認定している。

重複 なし

形状 焼土範囲を炉、または住居覆土か掘り方と考える。住居範囲は明らかでない。形状も不詳。

床面 遺存状態が悪く、敷石であったのか、硬化面があったのかも不明。床面が平坦であったかどうかとも判然としない。

方位 不詳

炉 焼土痕。前述の通り、焼土範囲が広範囲にあり、炉の一部ではなく住居覆土あるいは掘り方も含めた検出範囲の可能性が考えられる。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、確認面で218×105×47。

柱穴 検出されなかった。

遺物 出土土器は89点を数える。勝坂式期から堀之内1式期まで確認できた。主体となるのは堀之内1式期である。石器は3点出土した。そのうちの2点は多孔石である。

時期 堀之内1式期。遺構の遺存状態は悪く、住居炉、または住居覆土か掘り方の一部のみ検出したものと考えられる。出土した土器より当該期に比定した。

28区18号住居

調査年度 平成11年度

位置 W・X-3・4

経過 調査は平成11年度に行われた。当初は、列石、配石のみを認識して調査が進められていた。ほかに遺構がないか確認するため、さらに深く掘り下げたところ、28区10号列石と11号列石との間で敷石の一部が検出された。炉に想定できる範囲で焼土も確認できたため、これを炉とする住居と認定された。そのためか、住居の立ち上がりは確認できず、住居範囲も炉や柱穴を参考にした推定範囲でしかない。出土遺物も少ない。

調査段階に住居と認定した後も、どの列石や配石

が住居に伴うものか結論付けることはできなかった。ここで住居に伴うとした28区10号列石、11号列石、16号配石は、調査所見を参考に、整理担当者が検討、判断したものである。

重複 なし

形状 柄杓形か。敷石住居。住居出入口部は不明瞭な部分もあるが、28区11号列石の一部と16号配石がこれにあたるか。主体部の直径は4.7mほどであろう。

床面 大半が鉄平石である扁平な礫が、一部敷き詰められて検出されたことから、主体部には敷石が施されていたと考えられる。敷石の間隙には、小型の礫が詰められていた。丸石も確認できた。

検出できた敷石は、南東側に良好に残った一部分であり、ほかの大半の範囲について、その痕跡を確認することはできなかった。前述の通り、掘り下げた際に検出された住居であり、詳細については不明瞭である。出入口部についても、その形状や範囲は判然としない部分がある。

方位 N-48°-W

炉 焼土痕。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、確認面で(49)×(45)×19。平面円形の土坑状であったか。

柱穴 柱穴は11基検出された。焼土痕を中心に円を描くように検出された。平面での配置は、企画性があるようにも思われるが、やや歪である。調査経過を考慮すると、すべての柱穴が主柱穴とはならないであろう。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：26×24×35、柱2：26×23×46、柱3：29×(21)×37、柱4：25×24×53、柱5：27×19×37、柱6：29×22×38、柱7：28×25×46、柱8：24×20×35、柱9：27×20×48、柱10：27×21×48、柱11：34×23×39。

遺物 前述のような調査経過のためか、遺物出土量は少ない。出土土器は181点である。しかし、勝坂式期から加曽利B式期までと時期幅は広い。こ

第3章 発見された遺構と遺物

これは、住居に伴わない遺物が混在したためと考えている。主体となるのは堀之内1式期である。1点ではあるが、耳飾りも確認した。石器は8点出土した。石礫1点、打製石斧2点、磨石1点を確認した。黒曜石の剥片は5点、30.4gであった。

時期 堀之内1式期。本住居より埋設土器は出土していない。住居より出土した土器は堀之内1式が多いため、本住居を当該期に比定した。

28区10号列石

調査年度 平成11年度

位置 W・X-3、V・W-4

経過 調査は平成11年度に行われた。前述の通り、当初は単独の列石として認識し調査されていたが、最終段階で28区18号住居の敷石が検出され、住居に伴う列石の可能性があると判断された。ただし、何処までの範囲が住居に伴う列石か結論は出なかったため、単独の列石として番号が付されたまま調査された。

横壁中村遺跡では、出入り口部以外に列石に伴う住居の出土例はない。泉内の遺跡においては出土例があるものの、本遺跡での良好な出土例は他に確認できず、単独の列石である可能性は否定できない。

重複 28区12号列石と重複するも、重複関係は不詳。

形状 北西方向に緩やかな弧状を描く。28区11号列石と併行するように検出されている。列石の規模は、長軸が10.5mほど、短軸が0.4～1.1mほど。

下部遺構 なし

石材等 地山の礫が主体か。磨石のほか、石器も確認できるかわずかである。

遺物 出土土器は131点を数える。諸磯c式期から縄文時代晩期末までと時期幅は広い。列石という遺構の性格や、列石に伴わない遺物が混在したためと考えている。主体となるのは唐草文新段階、堀之内1式期か。石器は磨石1点などが出土した。

時期 堀之内1式期か。遺物の出土状況や遺構

の性格からも、時期を特定することは難しい。出土遺物の数量把握の結果と28区18号住居との関係から当該期と判断した。

28区11号列石

調査年度 平成11年度

位置 W・X-4・5、Y-4

経過 調査は平成11年度に行われた。前述の通り、当初は単独の列石として認識し調査されていたが、調査最終段階で28区18号住居の敷石が検出され、住居に伴う列石の可能性があると判断された。ただし、何処までの範囲が住居に伴う列石か結論は出なかったため、単独の列石として番号が付されたまま調査された。

重複 なし

形状 北西方向に緩やかな弧状を描く。28区10号列石と併行するように検出されている。列石の規模は、長軸が11.2mほど、短軸が0.6～1.7mほど。

下部遺構 なし

石材等 地山の礫のほか、川原石が点在して確認できた。丸石も見られた。18号住居出入り口部付近では、立てられたような礫も確認できた。

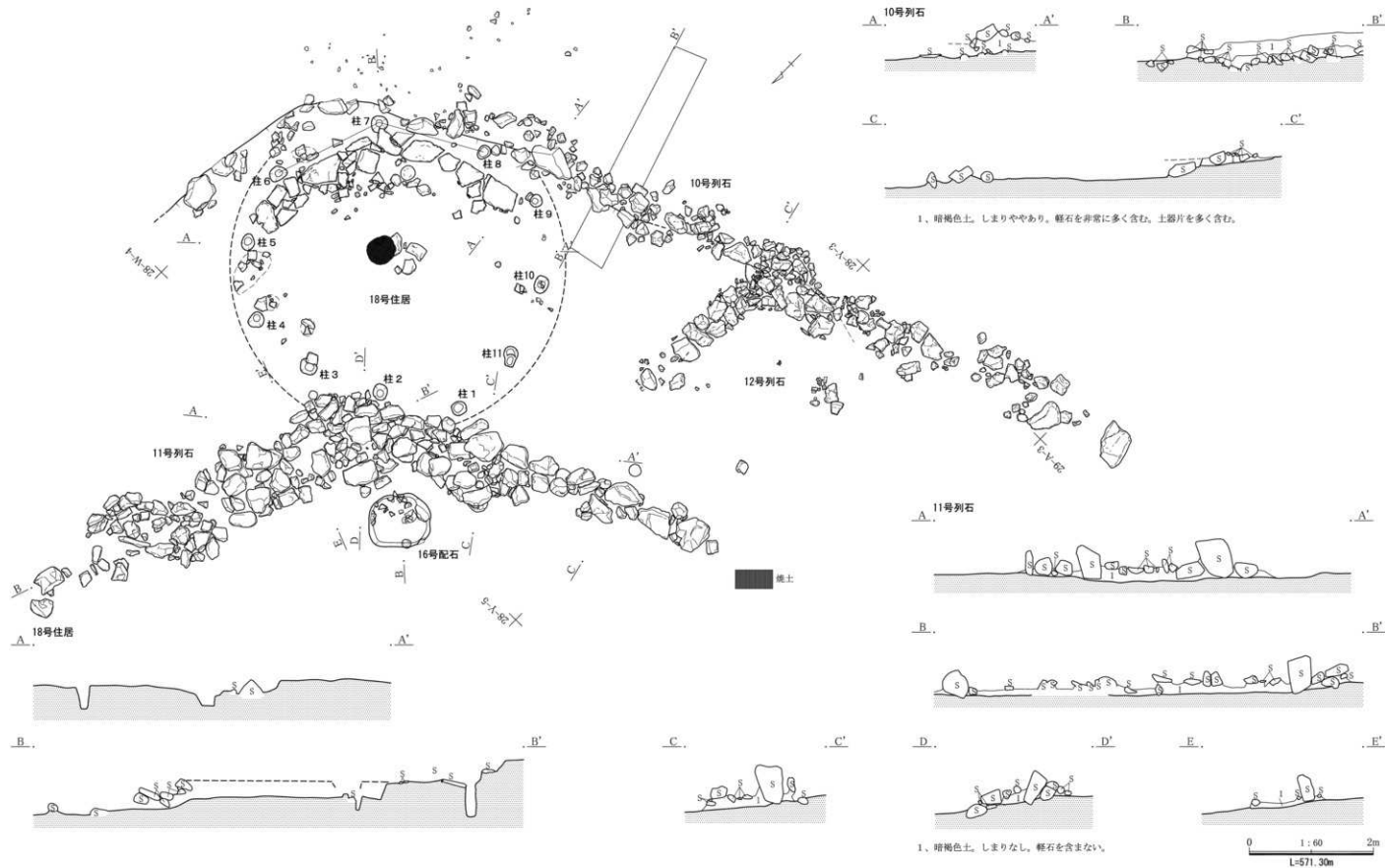
遺物 出土土器は152点を数える。勝坂式期から縄文時代晩期末までと時期幅は広い。列石という遺構の性格や、列石に伴わない遺物が混在したためと考えている。主体となるのは加曾利EⅢ式期、唐草文新段階、堀之内1式期か。石器は、磨り面を持つ丸石1点、削器1点が出土した。検出された黒曜石の剥片も少なく、剥片1点、2.4gであった。

時期 堀之内1式期か。遺物の出土状況や遺構の性格からも、時期を特定することは難しい。出土遺物の数量把握の結果と28区18号住居との関係から当該期と判断した。

28区16号配石

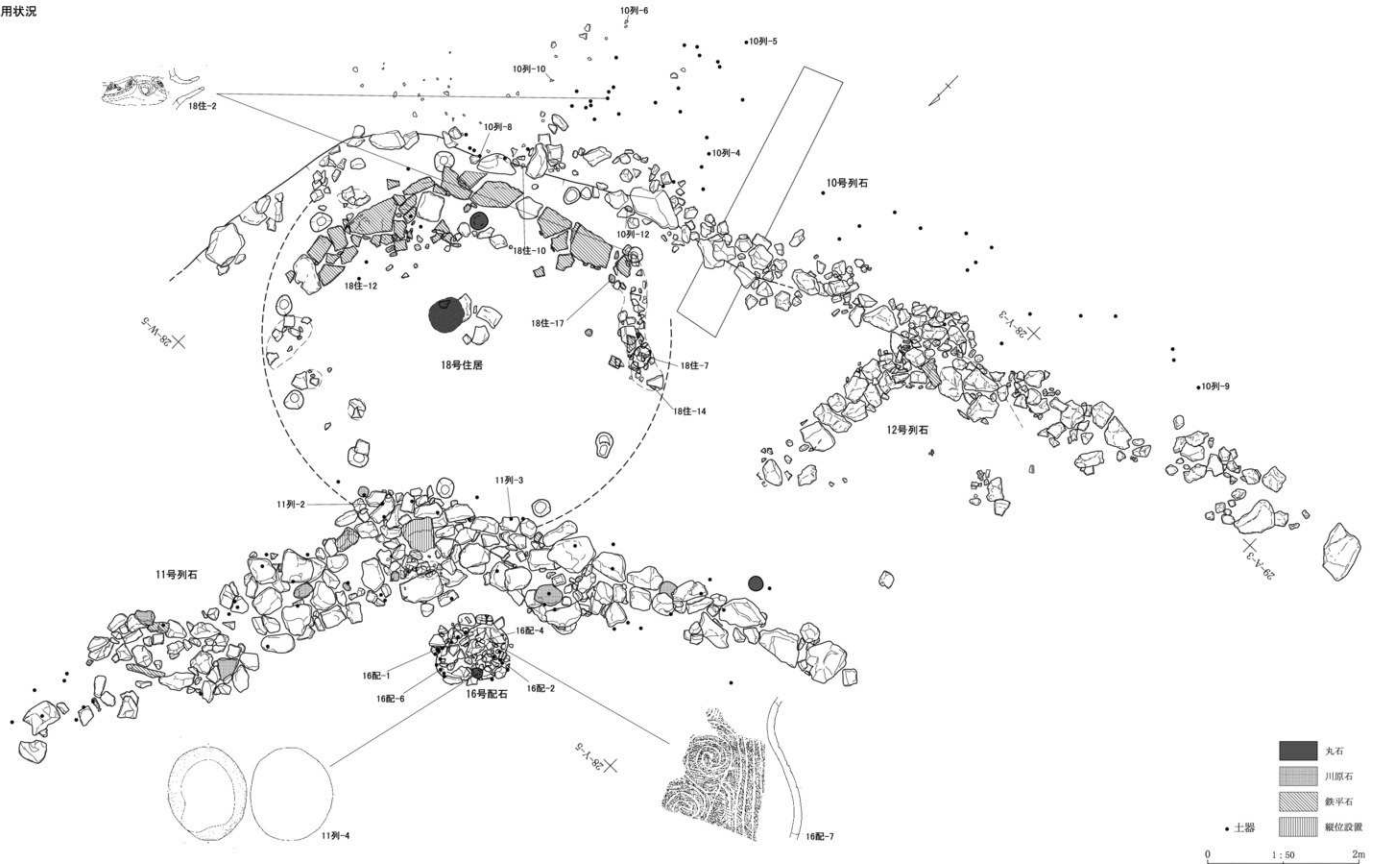
調査年度 平成11年度

位置 X-4・5



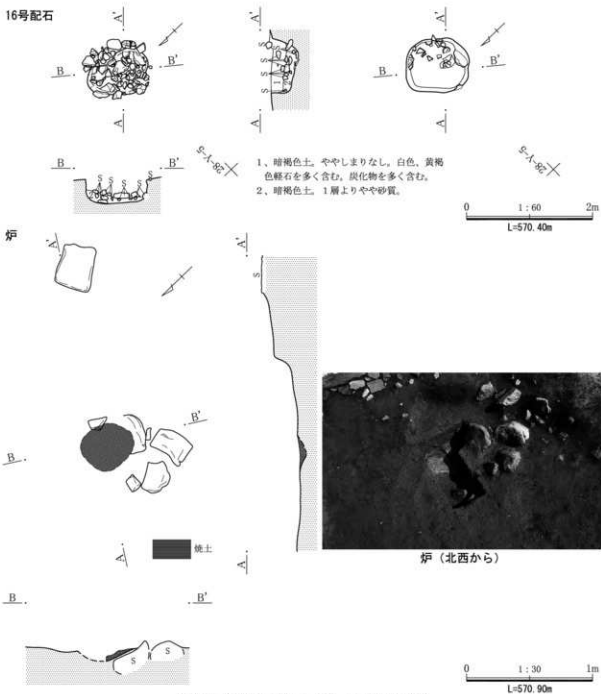
第94図 28区 18号住居 (1)、10・11号列石 (1)、16号配石 (1)

礎使用状況



第95図 28区 18号住居 (2)、10・11号列石 (2)、16号配石 (2)

16号配石



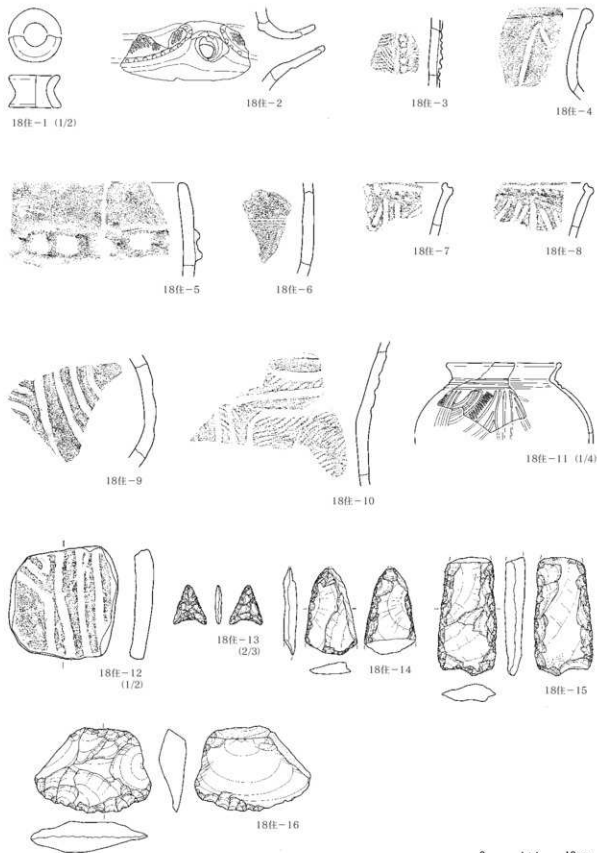
第96図 28区18号住居（3）、16号配石（3）

経 過 調査は平成11年度に行われた。当初は、住居炉の可能性が考えられていたが、焼土や炭化物が検出されなかったことから、単独の配石と認識し調査された。調査最終段階で28区18号住居の敷石が検出され、住居に伴う配石の可能性があると判断された。ただし、単独の配石として調査が進捗していたことや、単独の遺構である可能性も否定できな

いと考え、番号は付されたまま調査は終了した。

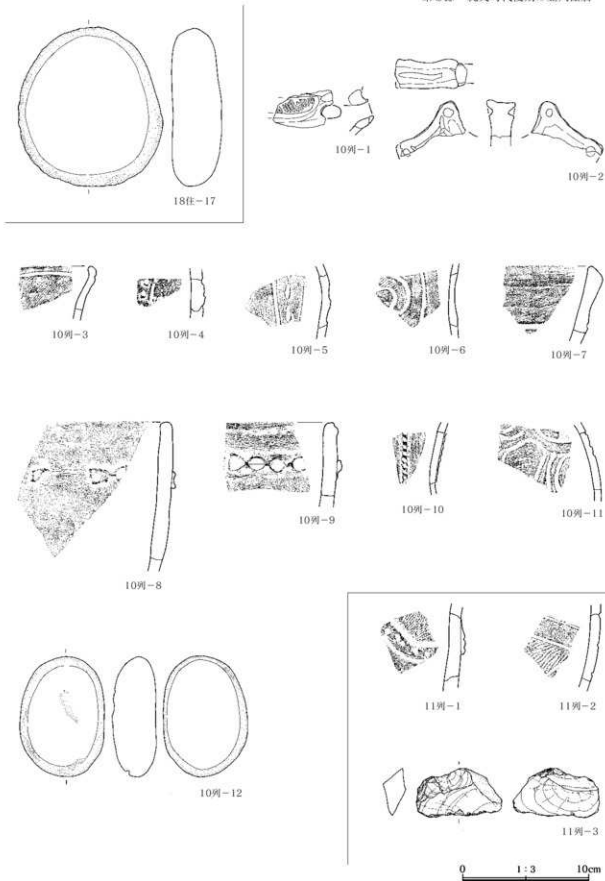
本配石は、土坑状の下部遺構を伴っていたが、石鏝が8点、石鏝未製品が5点、石鏝が3点と、遺構規模に比べ多くの石器が出土している。出土物からも、住居に伴う配石ではなく、墓坑などの特殊な性格を持った単独の遺構である可能性が高いとも考えている。

第3章 発見された遺構と遺物

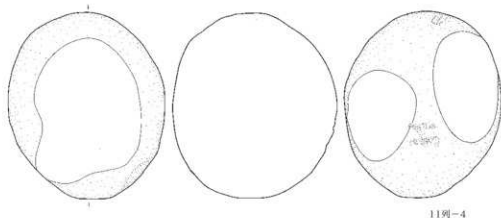


第97図 28区 18号住居出土遺物 (1)

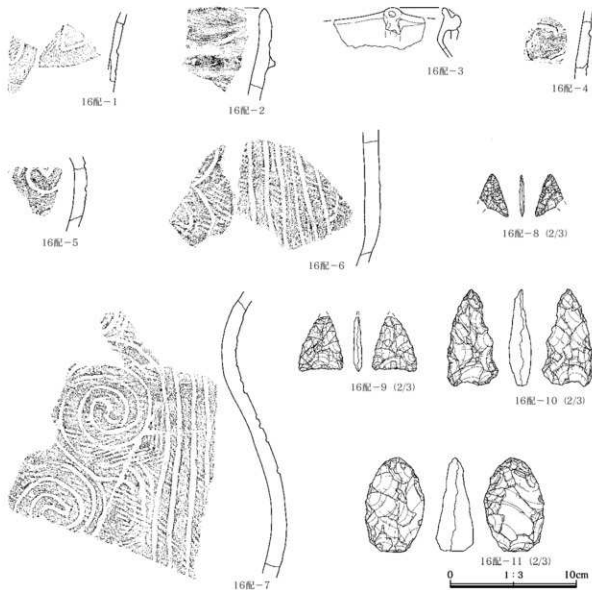




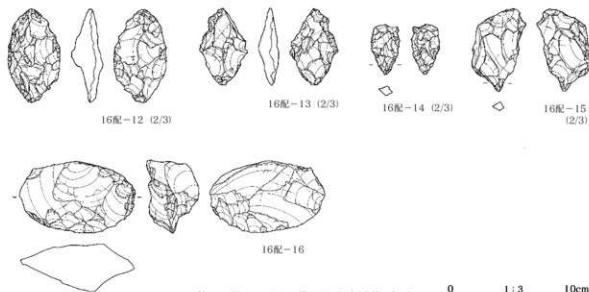
第98図 28区 18号住居(2)、10・11(1)号列石出土遺物



11列-4



第99図 28区 11号列石(2)、16号配石(1)出土遺物



第100図 28区16号配石出土遺物(2)

重複 なし

形状 集石状の遺構。やや歪んだ円形を呈する土坑内に多数の礫が見られた。規模(長辺×短辺、単位はcm)は、確認面で102×94。

下部遺構 土坑状の落ち込みが検出された。平面形はやや歪んだ円形、断面形は円筒状。礫は多数見られ、土坑下部においても多く出土した。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、99×84×41。

石材等 地山の礫が主体か、多数の石器も混在していた。また、11号列石No4の丸石は、本配石に伴う可能性が考えられる。

方位 N-38°-E

遺物 遺構規模を考えると、遺物出土量は多い。出土土器は124点を数える。勝坂式期から堀之内1式期まで確認できたが、主体となるのは堀之内1式期である。石器も30点と多数出土した。前述の通り、石鏃が8点、石鏃未製品5点、石錐3点と小型の剥片石器で半数以上を占める。加工痕も6点、黒曜石の剥片、碎片も35点、33.4gと多くあり、遺構の性格を考える上で注視すべきであろう。

時期 堀之内1式期。出土遺物の数量把握の結果と、28区18号住居との関係から当該期に比定した。

28区20号住居

調査年度 平成11年度

位置 W・X-5・6

経過 調査は平成11年度に行われた。住居の一部が調査区外にあり、北側の一部は検出できなかったが、想定される住居主体部中央で炉を検出したため住居と認定された。遺存状態は悪く、住居の立ち上がりも北側の一部で確認できたのみである。柱穴も、掘り方調査で確認された。住居範囲は、周囲に並ぶ礫により推定した範囲である。

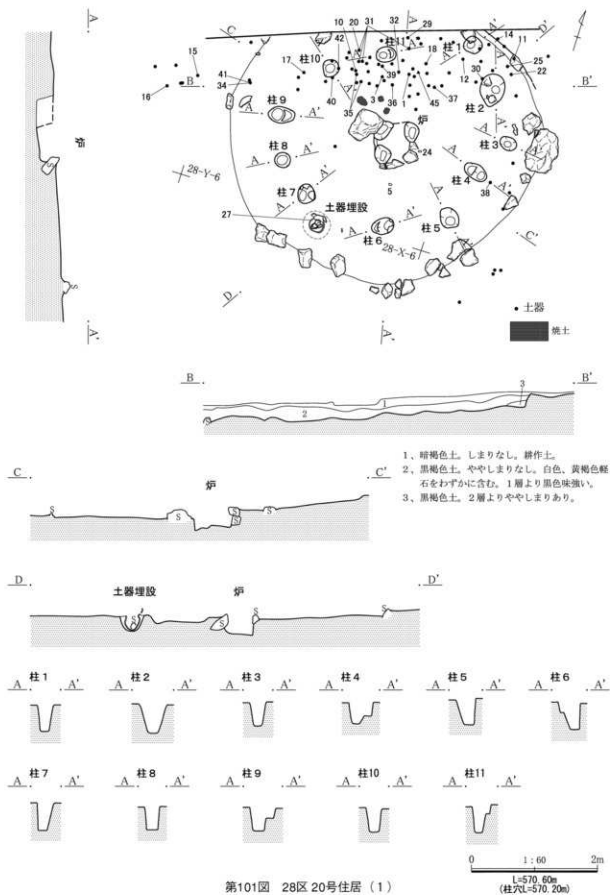
住居内より、土器を埋設した遺構が検出された。調査段階では住居の埋設と認識されていたが、整理段階で出土位置にやや整合性がないとの考えから、単独の土器埋設遺構の可能性が高いと判断した。

重複 なし

形状 主体部は直径4mほどの円形を呈する。壁高は、遺存状態の良い場所で20cmほどであった。

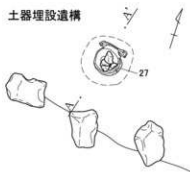
地形は北側に傾斜しており、北側の調査区外に出入り口部が取り付く可能性が考えられる。出入り口部は調査区外のためか、検出されていない。調査所見では、南側に出入り口部が取り付く可能性を示唆していたが、地形の傾斜から考え、調査区外である北側に取り付いていた可能性が高いであろう。

床面 数石住居の残存か、扁平な礫がわずかに

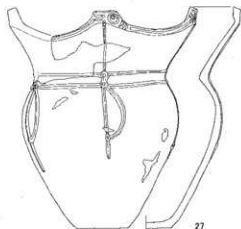


第101図 28区 20号住居 (1)

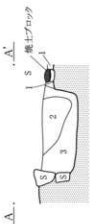
土器埋設遺構



1、暗褐色土。しまりややなし。



炉



- 1、暗褐色土。焼土ブロックを含む。乱れた層。
- 2、暗褐色土。3層よりしまりなし。乱れた層。
- 3、暗褐色土。ややしまりなし。白色、黄褐色軽石を少量含む。

0 1:30 1m
L=570.30m

第102図 28区20号住居(2)

散見できる。遺存状態が悪く、敷石であった可能性もあるか推測の域を出ない。

方位 N-18°-Wか。出入り口部が検出されていないため、炉の形状と地形の傾斜により判断した。

炉 遺存状態は悪いが、検出された遺構を方形の掘り方と考えると、磔の一部が除かれた方形石囲炉の可能性も考えられる。調査所見には、南東側に残る磔は原位置を保っていると指摘されていた。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で75×71×28。

柱穴 柱穴は11基検出された。炉を中心に円を描くように検出されたが、前述の通り、掘り方調査の中で検出されたものである。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1: 27×26×40、柱2: 58×39×46、柱3: 29×

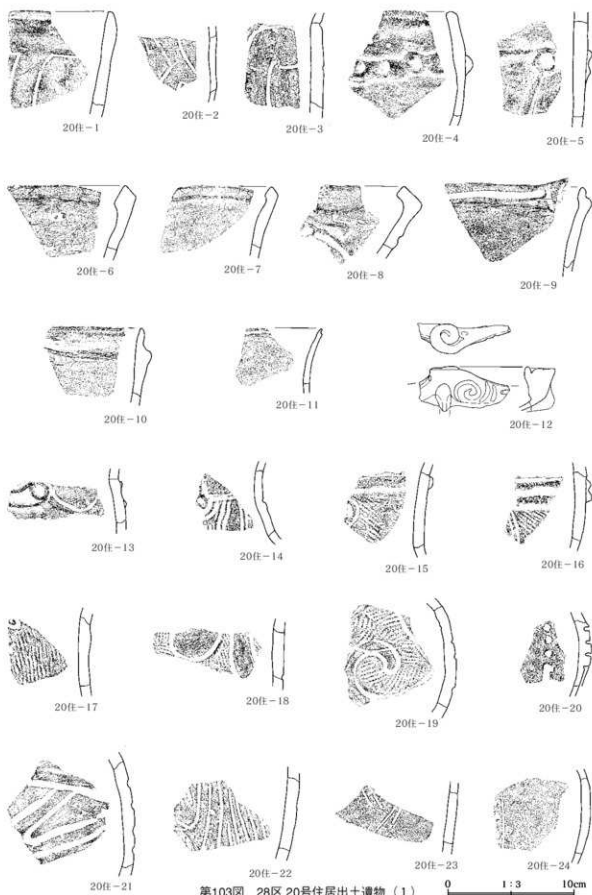
20×37、柱4: 40×24×33、柱5: 33×28×41、柱6: 37×25×43、柱7: 30×27×44、柱8: 24×24×36、柱9: 43×25×36、柱10: 29×27×38、柱11: 33×23×44。

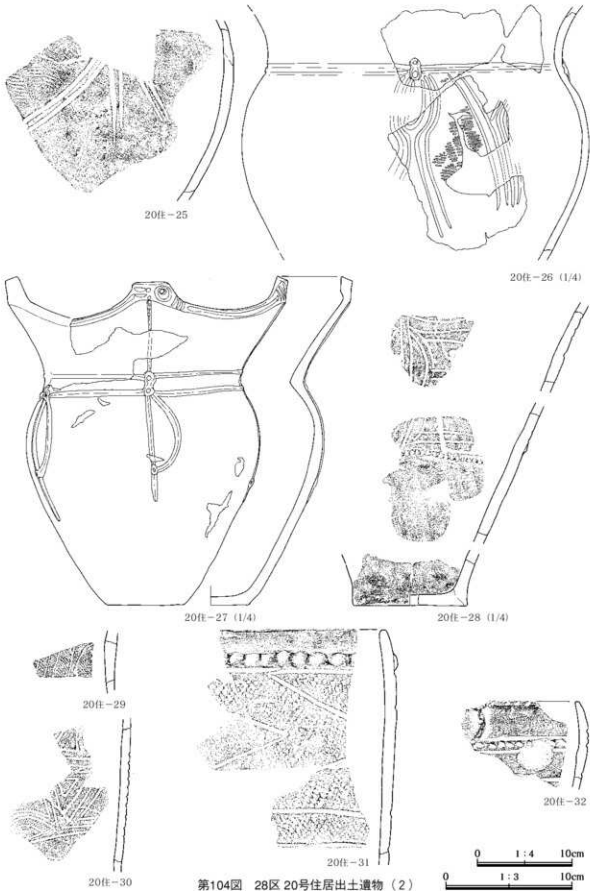
土器埋設遺構 前述の通り、本住居に伴う埋設ではない可能性が高いため、ここでは土器埋設遺構の名称を使用する。

本遺構は、20号住居炉の南西側1.5mほどから検出された。土器内からは、拳大ほどの磔が4個出土している。埋設されていた土器は堀之内1式で、正位に埋設されていた。口縁部の一部が欠損するものの良好な遺存状態であった。土器埋設遺構の掘り方は、平面円形の土坑状か。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で43×41×24。

20号住居炉の形状から考えると、土器埋設遺構が検出された位置はやや整合性に欠ける。これは、住居の埋設ではなく単独の土器埋設遺構であるため

第3章 発見された遺構と遺物



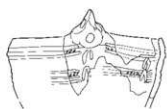


第104図 28区20号住居出土遺物(2)

第3章 発見された遺構と遺物



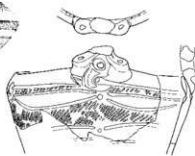
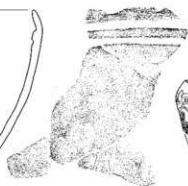
20fe-33



20fe-35 (1/4)



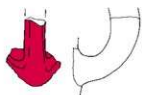
20fe-34



20fe-36 (1/4)



20fe-37



20fe-38



20fe-39 (1/4)



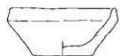
20fe-40 (1/4)



20fe-41 (1/4)



20fe-42 (1/4)



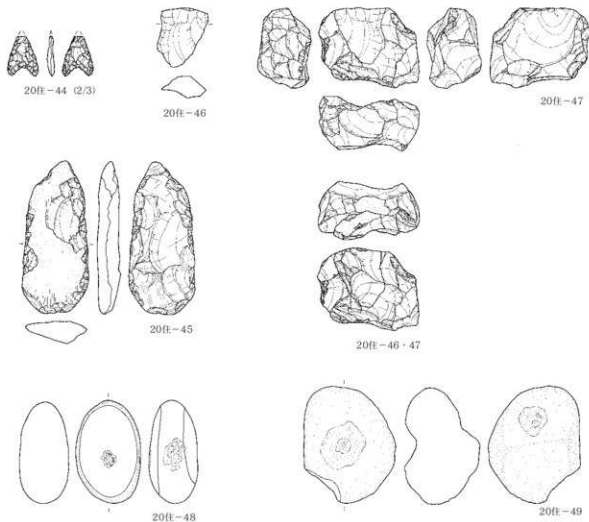
20fe-43 (1/4)



第105図 28区20号住居出土遺物(3)

0 1:4 10cm

0 1:3 10cm



第106図 28区20号住居出土遺物(4)

と判断したが、炉の遺存状態は悪く、炉石の一部も原位置を保っているとは限らない。住居の方向を表していない可能性もあるだろう。

遺物 住居の遺存状態は悪いが出土遺物は多く、土器は710点を数える。諸磯c時期から縄文時代晩期末までと時期幅は広い。検出状況から考えると、住居に伴わない遺物が混在しているものと考えられる。主体となるのは堀之内1式期である。石器は12点出土した。珪質変質岩製の石核に接合する剥片も確認できた。黒曜石の剥片は12点、20.8gであった。

時期 縄文時代後期。ここで報告する土器埋設遺構は、本住居に伴わない単独遺構の可能性が考えられるため、時期認定の材料からは外した。本住居

より埋設土器は出土していない。住居より出土した土器は堀之内1式期が多いが、確認できた出土遺物の時期幅は広い。住居の遺存状態の悪さも考慮し、ここでは縄文時代後期までにとどめた。

4 29区の縄文時代後期住居

29区は、横壁中村遺跡の北側ほぼ中央に位置する。先述の通り、調査区の北側には吾妻川が東流し、中央には山根沢が北流する。このため調査区は、吾妻川が流れる北側及び山根沢が流れる西側へ緩やかに傾斜する地形上に位置する。ここで報告するのは、29区山根沢東側の、わずかな調査面積で検出された縄文時代後期の住居、住居に伴う列石、配石につ

いてである。

29区山根沢東側で検出された縄文時代後期住居は6軒、伴う列石は2基、配石は1基である。調査区には地山に多数の礫があり、その中で多くの住居や列石、配石が重複していた。また、北側に吾妻川が東流し削平を受けていること、西側に山根沢が北流し谷地形を成していることなどから、遺構の全容を捉えにくい調査区と言える。

第107図は、29区縄文時代後期住居の重複関係が著しい部分を抜き出し、図化したものである。図化した住居は、29区3号・4号・6～8号住居の5軒である。また、住居に伴う列石2基、配石1基についても掲載している。重複が著しいため、称名寺2式期の住居に伴う列石、配石については、灰色で表現している。

掲載した住居は、称名寺2式期が3軒、堀之内1式期が2軒である。称名寺2式期から堀之内1式期までの限られた期間、限られた狭い範囲に住居を構築している様子が分かる。特に29区3号住居と4号住居は、ほぼ重なるように構築されていた住居である。ともに、出入り口部に位置する同じ立石を意識して構築されたようにも思われ、縄文時代後期の集落形態を考える上でも注視すべきであろう。また、本調査区では縄文時代中期の住居も検出されており、縄文時代中期の大規模環状集落から縄文時代後期の集落へと、どのように集落が変容したのか考える上でも重要な調査区と言える。

29区3号住居

調査年度 平成11年度

位置 A・B・C-I・2、B-3、D-1

経過 調査は平成11年度に行われた。住居主体部中央より土器埋設が検出されたため住居と認定された。第107図に示した通り、29区は重複の著しい調査区である。攪乱も見られることから本住居の範囲も不明瞭な箇所はあるが、概ね良好な遺存状態であり、多くの資料が得られている。周堤帯状に

見られる礫の列も検出されている。ここでの呼称は調査時に使用されていた「周堤帯礫」としているが、本来の周堤帯と同義であるかは検討が必要であろう。今後の課題と考えている。横壁中村遺跡では、ほかに3軒で周堤帯状の礫の列を検出している。詳細は、表6を参照していただきたい。

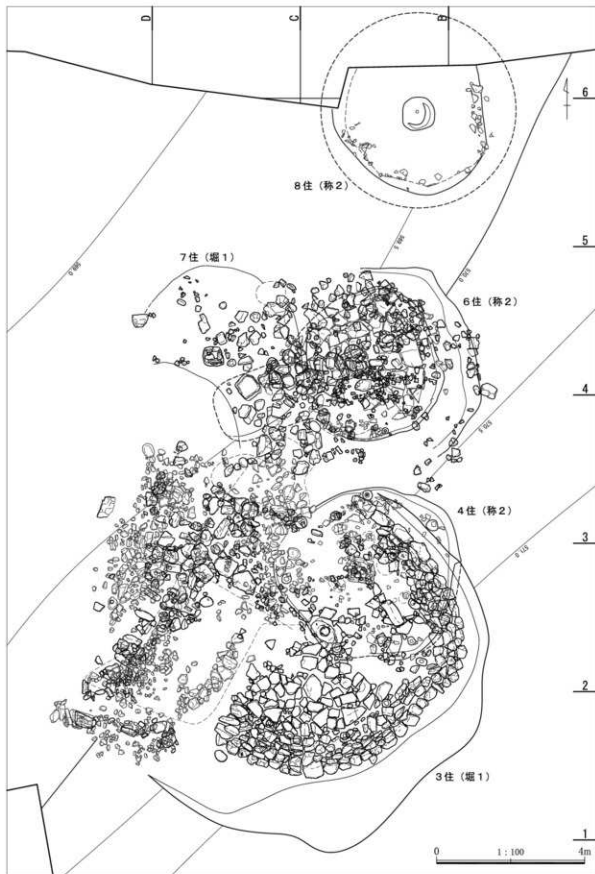
主体部には良好な遺存状態で敷石が見られた。波打つように検出されているが、本来は平坦に敷き詰められていたものと考えている。また、出入り口部には列石が伴い、その中央、住居出入り口部付近には立石も見られた。この立石は29区4号住居でも意識されていたと考えられ、本住居と29区4号住居との関係を考える上でも重要と思われる。

重複 29区4号住居、29区1号土坑と重複し、ともに切る。

形状 楕円形敷石住居。住居出入り口部南側の一部が攪乱により壊されているが、良好な遺存状態である。主体部の直径は5.4mほどで、円形を呈する。壁高は、南東側の遺存状態の良い場所ですべて150cmほどであった。

出入り口部も攪乱を受けるが一部に敷石を残す。地形が低く傾斜している北西側、埋没谷の方向に出入り口部を取り付けたものと考えられる。規模は長軸3.0mほど。短軸は連なる列石で判然としない。列石を含めた規模は6.8mほどか。出入り口部には直線的な列石が取り付く。列石には、幅20cm、長さ50cmほどの細長い礫4石が、40～50cm間隔ほどで規則的に据えられていた。列石の両端は配石の痕跡かもしれないが、その範囲や形状については攪乱もあり不明瞭である。列石の出入り口部分には、礫を立てた立石も見られた。石器ではなく、遺物としては取り上げていない。前述の通り、29区4号住居でも意識されていたと思われる立石である。

「周堤帯礫」は周堤帯状に土を盛り上げたところ、礫が貼り付いた状態で検出された。調査所見には、周堤帯状に盛り上げられた土と敷石を敷き詰める際使用された土が同様であったことが指摘されている。周堤帯礫には、袖の部分に大型の礫が多数使



第107図 29区 縄文時代後期住居

第3章 発見された遺構と遺物

用されており安定性を高めていたようだ。

床 面 住居主体部で、敷石が良好な遺存状態で検出された。敷石には板状の扁平な礫が多数使用されていたが、その大半は鉄平石であった。柱穴間を結ぶ箇所には小型の礫が列状に検出され、その内側には大型の礫が敷き詰められていた。大型礫を敷き詰められた間には、隙間を埋めるように小型の鉄平石や礫を埋め込み、隙間なく敷石しようとする意図が見られた。

出入り口部分には、より大型の扁平な礫を使用していた。使用された礫は鉄平石ではない。使用する箇所により礫の使い分けが行われていたようである。

方 位 N-48° -W

炉 土器埋設炉。埋設されていた土器は堀之内1式である。口縁部はなく、頸部付近で丁寧に打ち欠かれており、正位に埋設されていた。被熱痕跡も顕著であった。規模（長辺×短辺×深さ、単位はcm）は、確認面で106×78×41であった。

埋設された土器は、ほかに3住No70がある。時期は堀之内1式。被熱痕跡も顕著であった。2個体は重ねられるようにあったのかも知れないが、出土状況からは確認できない。土器埋設炉として2時期あった可能性も考えられる。

柱 穴 柱穴は8基検出された。柱穴は周堤帯礫の内側、主体部に沿うよう円形に検出された。企画性も高い。すべて主柱穴になるものと考えられる。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：27×22×47、柱2：25×22×53、柱3：35×20×63、柱4：30×20×36、柱5：22×21×28、柱6：25×18×31、柱7：26×21×23、柱8：29×24×70。

遺 物 住居の遺存状態が良好なためか、出土遺物は非常に多く1,807点の土器が出土した。縄文時代前期前半から高井東式期までと時期幅も広い。重複により、ほかの遺構の遺物が混在したためとも考えられる。器種も多様で、深鉢を主体に、鉢や注口、壺や台付、ミニチュア土器などが見られた。土製円

盤も9点と多い。主体となるのは、385点を数える堀之内1式である。

石器も78点と多数出土した。磨石が24点、石核が8点と、報告する住居の中では最も多い。石鏃は8点、石錐は1点を数える。打製石斧4点、石棒3点、石皿1点、台石4点、多孔石3点と、どの石器も数多く出土している。しかし、同様に良好な出土様相を示していた18区15号住居と比較しても丸石の出土量が少ない。時期の違いから来る差異であるのかは判然としない。出土した石器の中には、本遺跡に多く出土する軽石製品も見られた。大型楕円形の深い皿状の軽石製品も出土している。18区13号住居でも出土した、断面が方形で柱状、二面に凹みを持つ凹石も見られた。

黒曜石の剥片、破片も数多く149点、30.9g検出された。前述の通り、石核も多く加工痕も13点と多い。石核や破片、剥片などが多く見られるのは、本住居の特徴と考えている。

時 期 堀之内1式期。炉に埋設されていた土器より当該期に比定した。炉内より出土した土器は接合すると2個体となった。3住No70とNo71である。ともに頸部から上半は欠損している。3住No71は正位に据えられた状態で出土しているが、No70は不詳。No71の上に重ねられていたのかも知れない。ともに堀之内1式であり、被熱痕跡も顕著である。

29区4号住居

調査年度 平成11年度

位 置 A・B・C-2・3

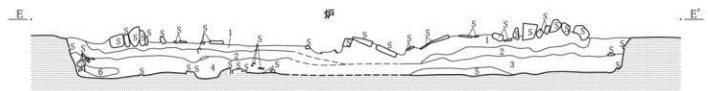
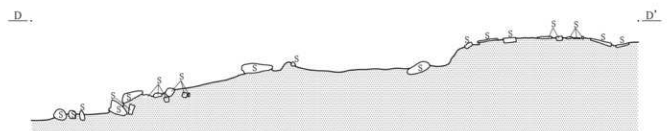
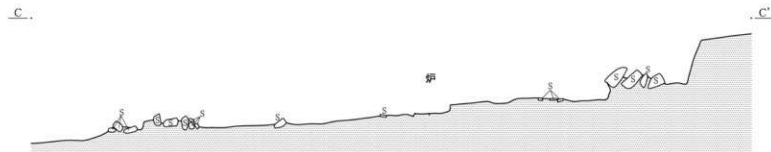
経 過 調査は平成11年度に行われた。住居主体部中央より石圍炉を検出したため住居と認定された。29区は重複の著しい調査区であり、住居の形状も含め判然としない部分があった。また、調査時より列石を伴う住居との認識ではあったが、重複もあり、住居の時期も考慮すると列石を伴う住居とするべきかどうかは結論がなかった。ここでは、住



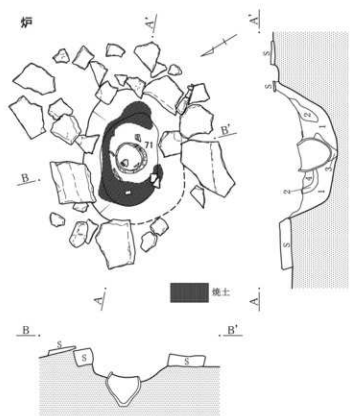
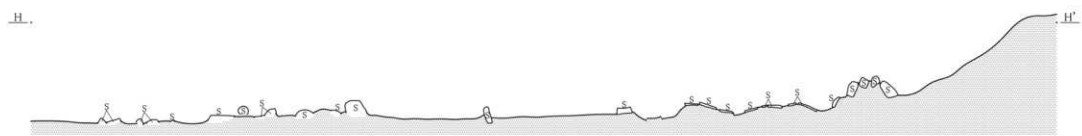
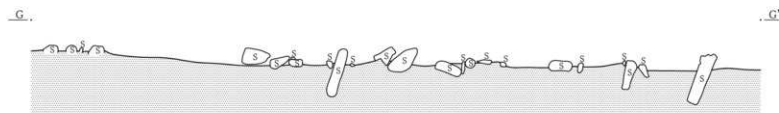
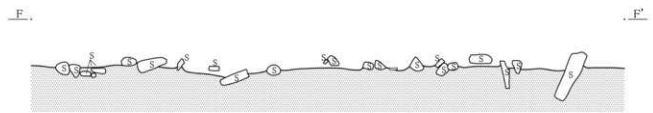
第108図 29区 3号住居 (1)

- 1、黒褐色土、しまりなく、ふかふかした土。榎石を含まない。榎石を含まないが、榎石を伴った土が、
- 2、黒褐色土、黒山土と下層の黒土、しまりなくふかふかした土。榎石を伴った土。榎石を伴った土が、
- 3、黒褐色土、しまりあり、榎石を伴った土。榎石を伴った土が、
- 4、黒褐色土、しまりあり、自然層土と認められる。
- 5、黒褐色土、しまりあり、炭化物を含む。専らこの層が多数に存在。
- 6、黒褐色土、土層よりしまりあり、榎石を含む。
- 7、黒褐色土、黒褐色土をまばらに含む。しまりあり、榎石入り口部下にある特徴的な土。
- 8、黒褐色土、しまりなく、ふかふかした土。
- 9、黒褐色土、7層に類似、ややしまりなし。

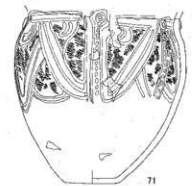
- 1、黒褐色土、しまりなく、ふかふかした土。榎石を含まない。榎石を含まないが、榎石を伴った土が、
- 2、黒褐色土、黒山土と下層の黒土、しまりなくふかふかした土。榎石を伴った土。榎石を伴った土が、
- 3、黒褐色土、しまりあり、榎石を伴った土。榎石を伴った土が、
- 4、黒褐色土、しまりあり、自然層土と認められる。
- 5、黒褐色土、しまりあり、炭化物を含む。専らこの層が多数に存在。



1. 黒褐色土。しまりなく、ふかふかした土。軽石をほとんど含まない。敷石住居を作る際、充填した土が。
2. 黒褐色土。しまりあり。軽石を均質にまばらに含む。
3. 黒褐色土。2層よりややしまりなし。やや砂質。
4. 褐色土。しまりあり。炭化物を少量含む。住居覆土と思われる。
5. 褐色土。砂質。地山への層移動。
6. 黒色土。しまりあり。炭化物を多く含む。



1. 黒褐色土。やや粘性あり。5cm程の礫を含む。埋設土器設置の際に入れたものか。
2. 黄色土。焼土ブロックの層。骨片含む。埋設土器設置以前、炉の使用面であったと考えられる。
3. 黄色土。焼土ブロックの層。骨片含む。2層よりややくすんだ色。
4. 褐色土。しまりなくやわらかい。焼土ブロック、骨片を含む。



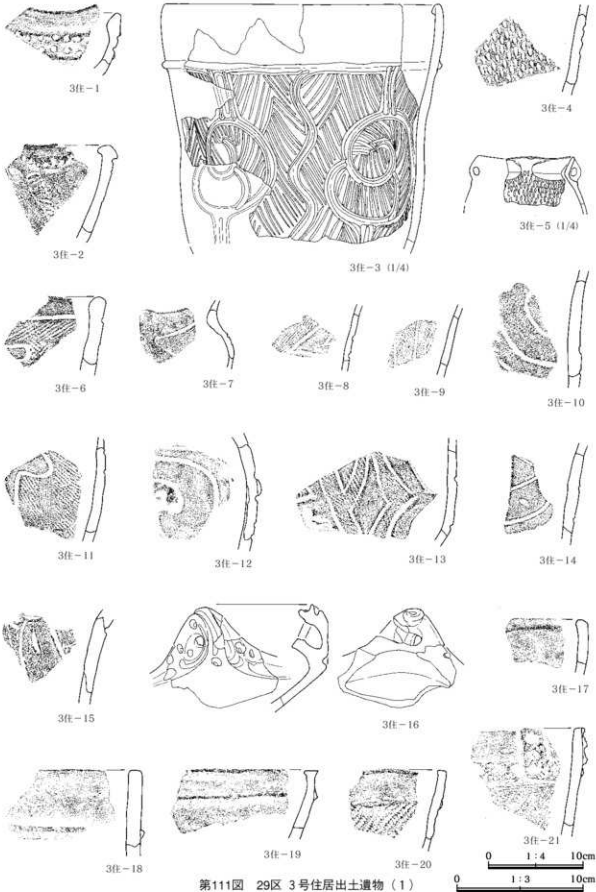
第109図 29区 3号住居 (2)

0 1:60 2m
L=570.00m
(C-H L=571.00m)

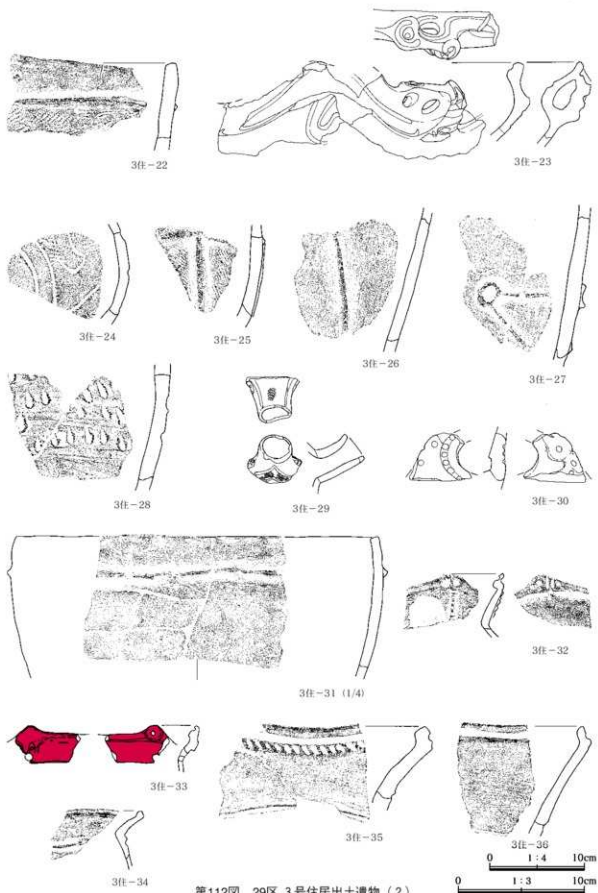
礎使用状況



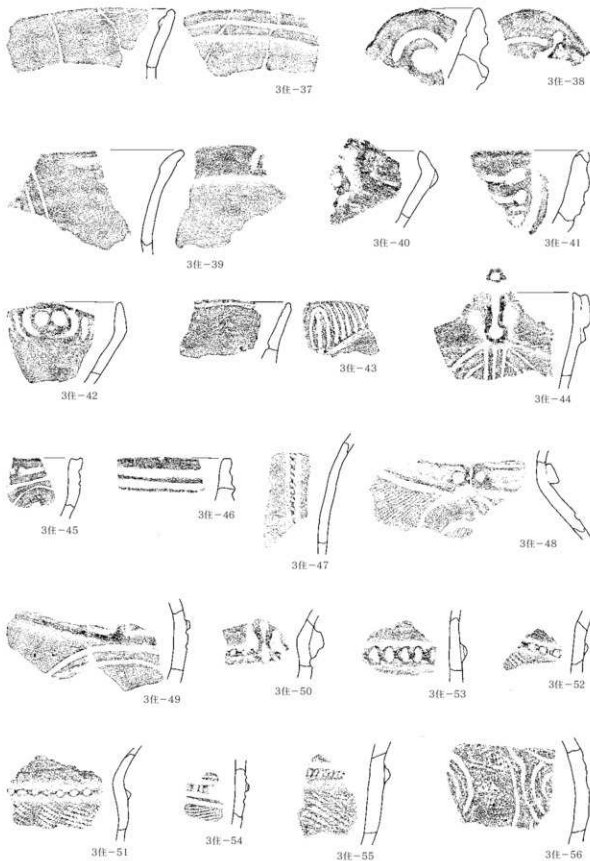
第110図 29区 3号住居 (3)



第111図 29区 3号住居出土遺物(1)



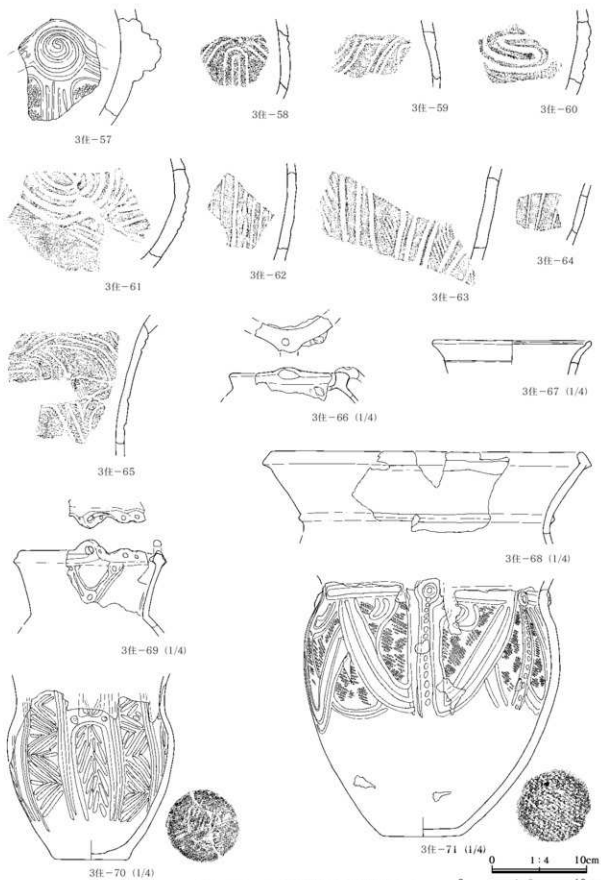
第112図 29区 3号住居出土遺物(2)



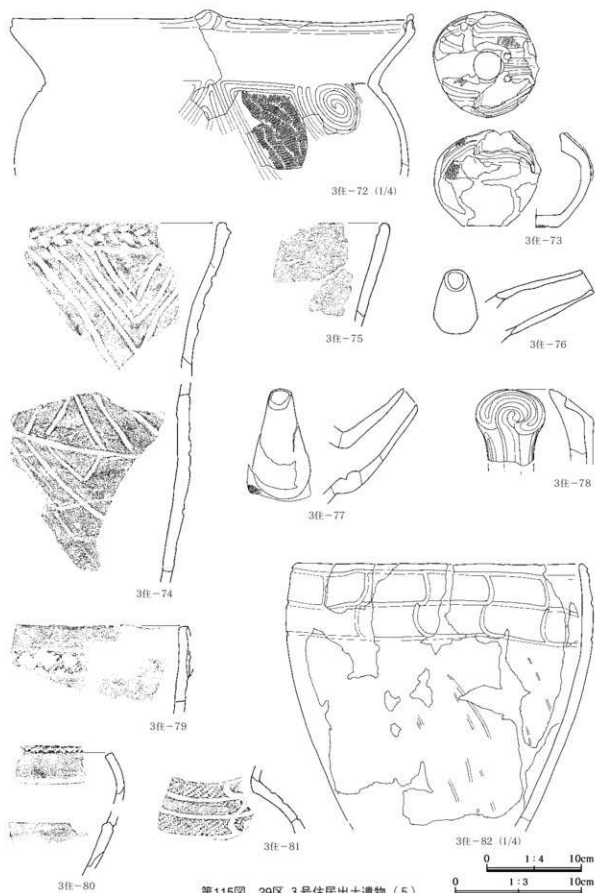
第113図 29区 3号住居出土遺物(3)

0 1:3 10cm

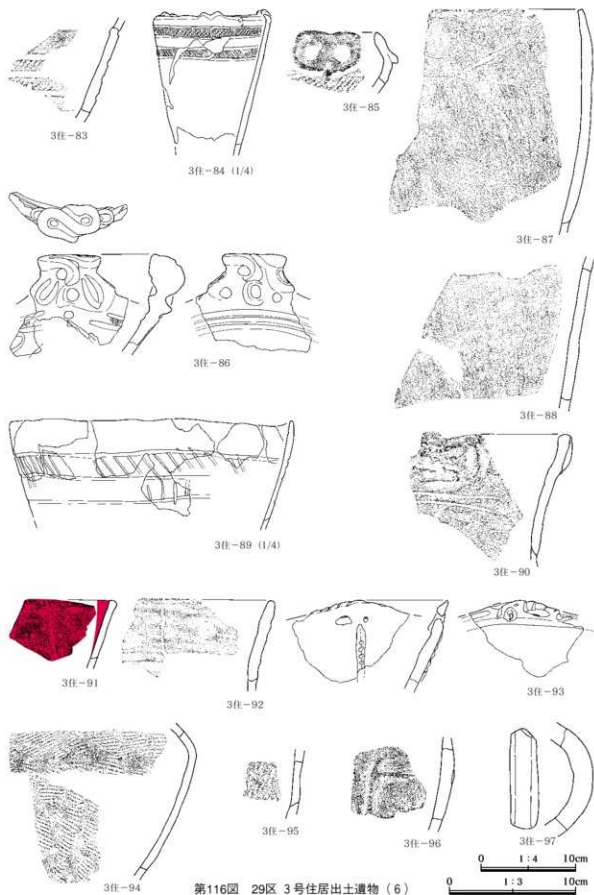
第3章 発見された遺構と遺物



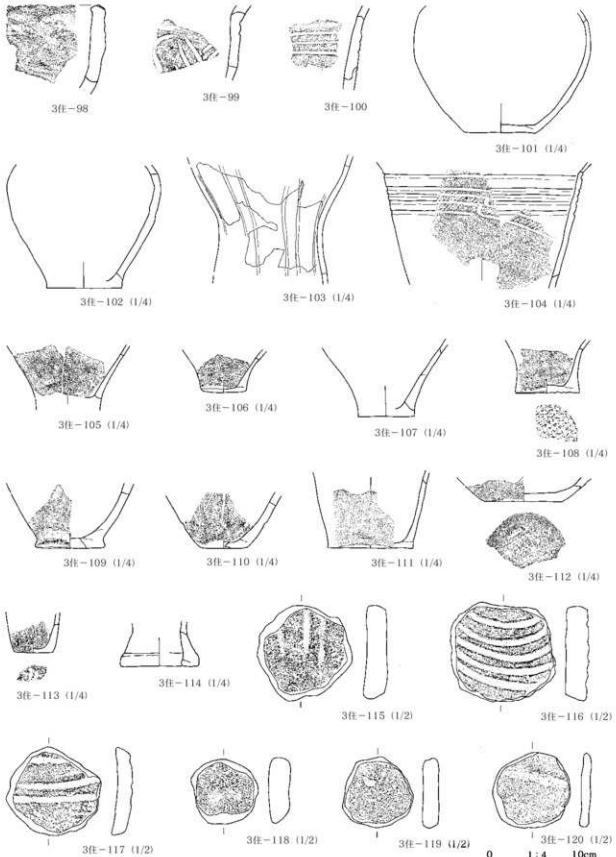
第114図 29区 3号住居出土遺物(4)



第115図 29区 3号住居出土遺物 (5)

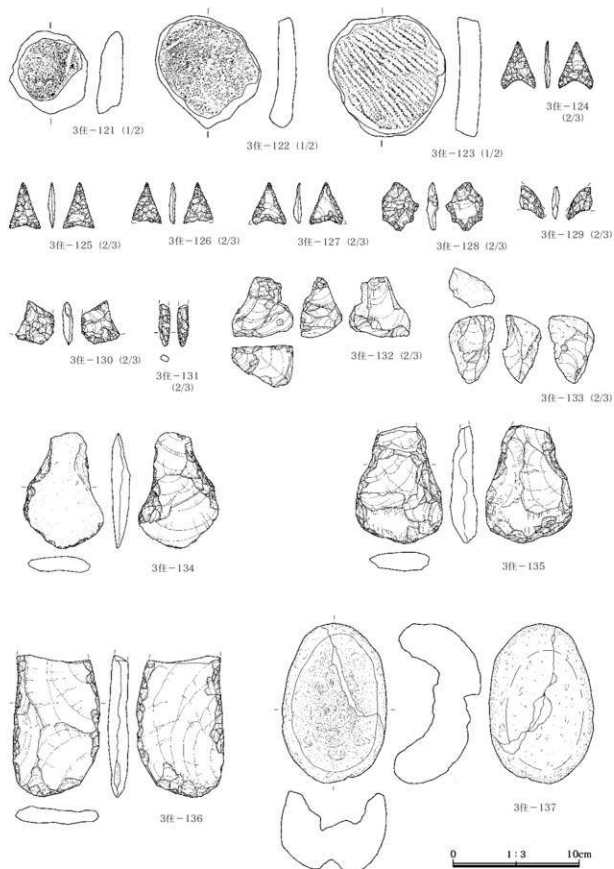


第116図 29区 3号住居出土遺物(6)

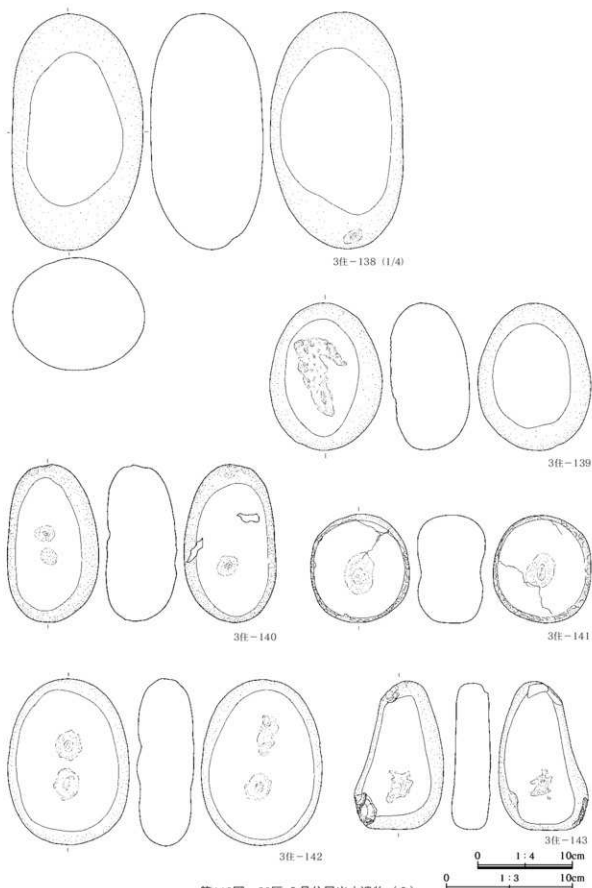


第117図 29区 3号住居出土遺物(7)

第3章 発見された遺構と遺物

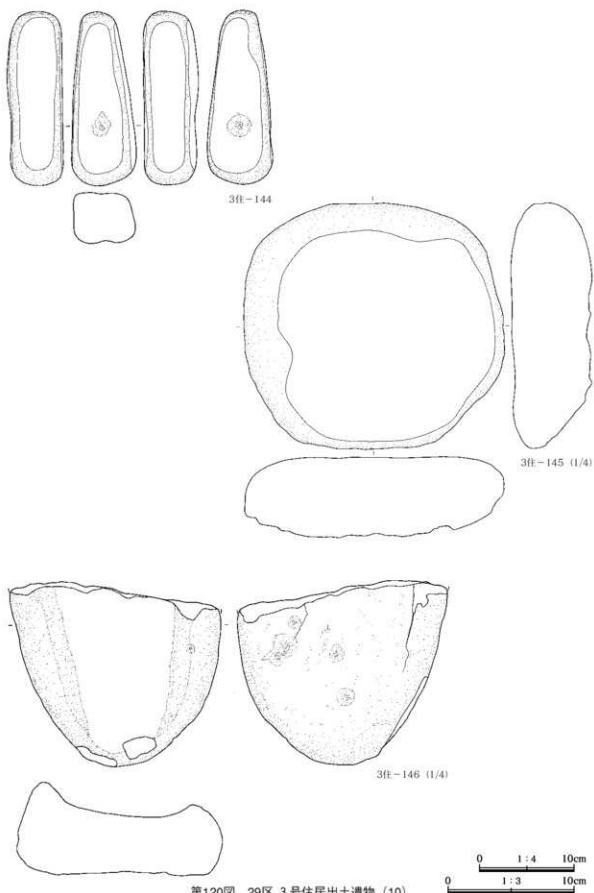


第118図 29区 3号住居出土遺物(8)

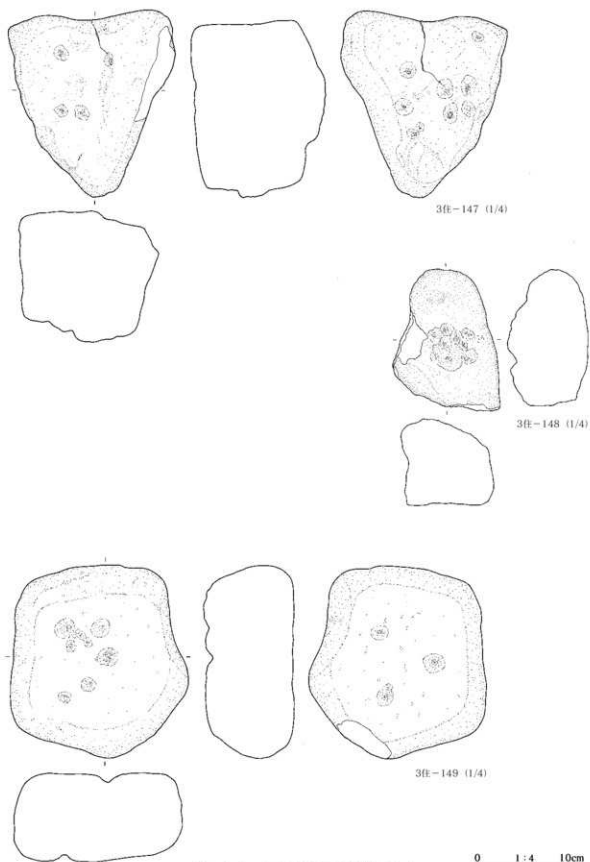


第119図 29区 3号住居出土遺物 (9)

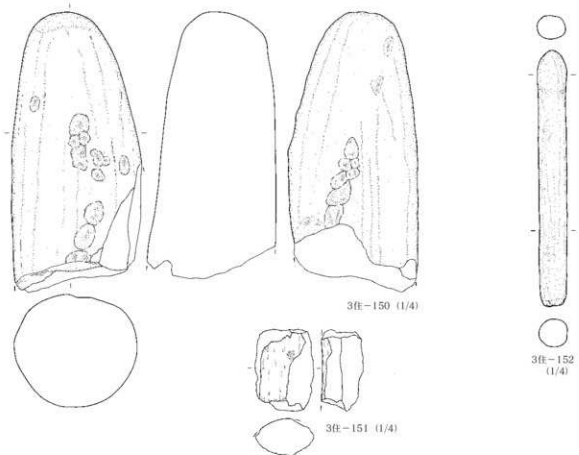
第3章 発見された遺構と遺物



第120図 29区 3号住居出土遺物 (10)



第121図 29区 3号住居出土遺物 (11)



第122図 29区 3号住居出土遺物 (12)

居に伴う遺構として、29区1号列石、2号列石を報告するが、これは調査所見を参考に整理担当者が検討した結果である。未だ結論は付け難く、今後も検討が必要であろう。

重複 29区3号住居、29区1号土坑と重複し、29区1号土坑を切り、29区3号住居に切られる。

形状 柄鏡形敷石住居か。主体部の直径は4.6mほどで、重んだ円形を呈する。壁高は、東側の遺存状態の良い場所では89cmほどと深いのが、本住居の壁高であるか疑問もある。

出入り口部の遺存状態も良好ではなく、列石との関わりも分かりにくい。そのため、出入り口部の形状や規模は不明瞭と言える。出入り口部の規模は長軸2.2mほど。短軸は不明。

29区3号住居出入り口部付近で検出された立石は、本住居の出入り口部分にも位置し、ともにこの

立石を意識していた可能性が考えられる。

床面 柱穴間を中心に、鉄平石を含めた扁平な礫が散見できる。遺存状態が悪く不明瞭な部分はあるが、扁平の礫の一部は原位置を保っている可能性が高い。礫の一部は、敷石の隙間を埋めたものとも考えられ、主体部には敷石が施されていたと思われる。ただし、平面図上に表現した礫の種類や使用状況については、調査時の資料がなく整理担当者が写真を見て判断したことを付け加えておく。

方位 N-73° -W

炉 土器埋設方形石囲炉。住居主体部中央付近で検出された。大型の扁平礫、4石ほどを使用した炉である。被熱のためいくつかに割れていた。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で69×66×25。

埋設されていた土器は2個体あった。4住No32

は炉下半で潰れたように検出され、4住No33は正位の状態で埋設されていた。No32は頸部から上半と底部が欠損していた。No33は、胴下半に円孔を穿っていた。ともに被熱痕跡は明瞭であり、炉に使用されていたと考えられることから、少なくとも炉として二時期あったものと想定できる。埋設された土器は、ともに称名寺2式であった。

柱 穴 柱穴は7基検出された。平面亀甲形に配置された状況で検出されており、企画性がある。7基すべてが主柱穴となるであろう。調査所見には、柱穴の周囲を小型の礫が囲んでいたとあった。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：36×33×、柱2：31×30×56、柱3：32×25×63、柱4：33×32×63、柱5：27×24×43、柱6：27×27×47、柱7：22×19×52。

遺 物 出土土器は952点を数える。縄文時代前期後半から堀之内1式期までと時期幅は広い。大型深鉢、注口、釣手などが出土した。主体となるのは称名寺式期か。石器は33点出土した。磨石が14点と多く、石核4点、磨製石斧3点も確認できた。また、円孔を穿った、板状の軽石製品も確認できた。黒曜石製の石核では、剥片と接合する資料も確認できた。黒曜石の剥片、破片は、16点、34.1g検出されたが、ほかの剥片、破片との接合関係は確認できなかった。

時 期 称名寺2式期。炉に埋設された土器は2点あった。ともに称名寺2式であるため、当該期に比定した。

29区1号列石

調査年度 平成11年度

位 置 C-1・2、D-E-1

経 過 調査は平成11年度に行われた。重複の著しい調査区であり、列石という遺構の性格からもその範囲は判然としない。調査時より、29区4号住居に伴う列石との認識があったが、単独の列石である可能性も考えられる。

重 複 なし

形 状 南西から北東方向に列を成す。西側に緩やかな弧状を描くような形状を呈する。29区2号列石と併行するように検出されている。列石の規模は、長軸が9.9mほど、短軸が0.7~1.7mほど。

下部遺構 なし

石材等 地山の礫が主体か。縦位に礫を据えた箇所が、列を成すように検出された。川原石や鉄平石などがわずかに見られるが、住居出入り口付近にあり、住居に伴うものかもしれない。

遺 物 出土土器は97点を数える。焼町土器から堀之内1式期まで確認できた。主体となるのは称名寺式期から堀之内1式期までか。石器は4点出土した。特筆すべきは、三角柱状、三面に凹を持つ石冠である。本遺跡でも出土量はわずかだ。

時 期 縄文時代後期。遺物の出土状況や列石という遺構の性格から考えても、時期を特定することは難しい。出土遺物の総量把握の結果と29区4号住居との関係から当該期と判断した。ただし、住居に伴う列石の可能性もあり、図上では29区4号住居と同時期のように掲載している。

29区2号列石

調査年度 平成11年度

位 置 C・D-2・3、D-1

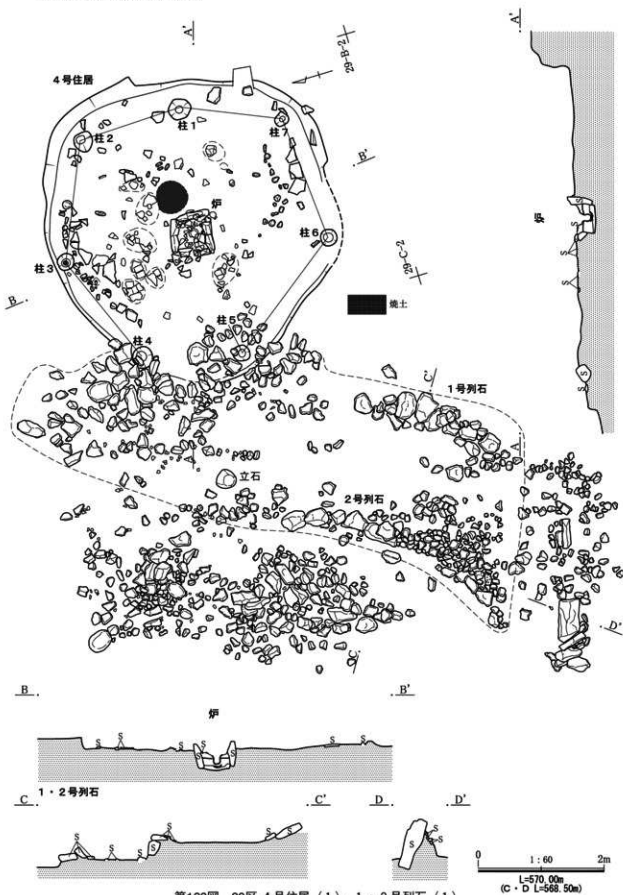
経 過 調査は平成11年度に行われた。重複の著しい調査区であり、列石という遺構の性格からもその範囲は判然としない。調査時より、29区4号住居に伴う列石との認識があったが、単独の列石である可能性も考えられる。

重 複 なし

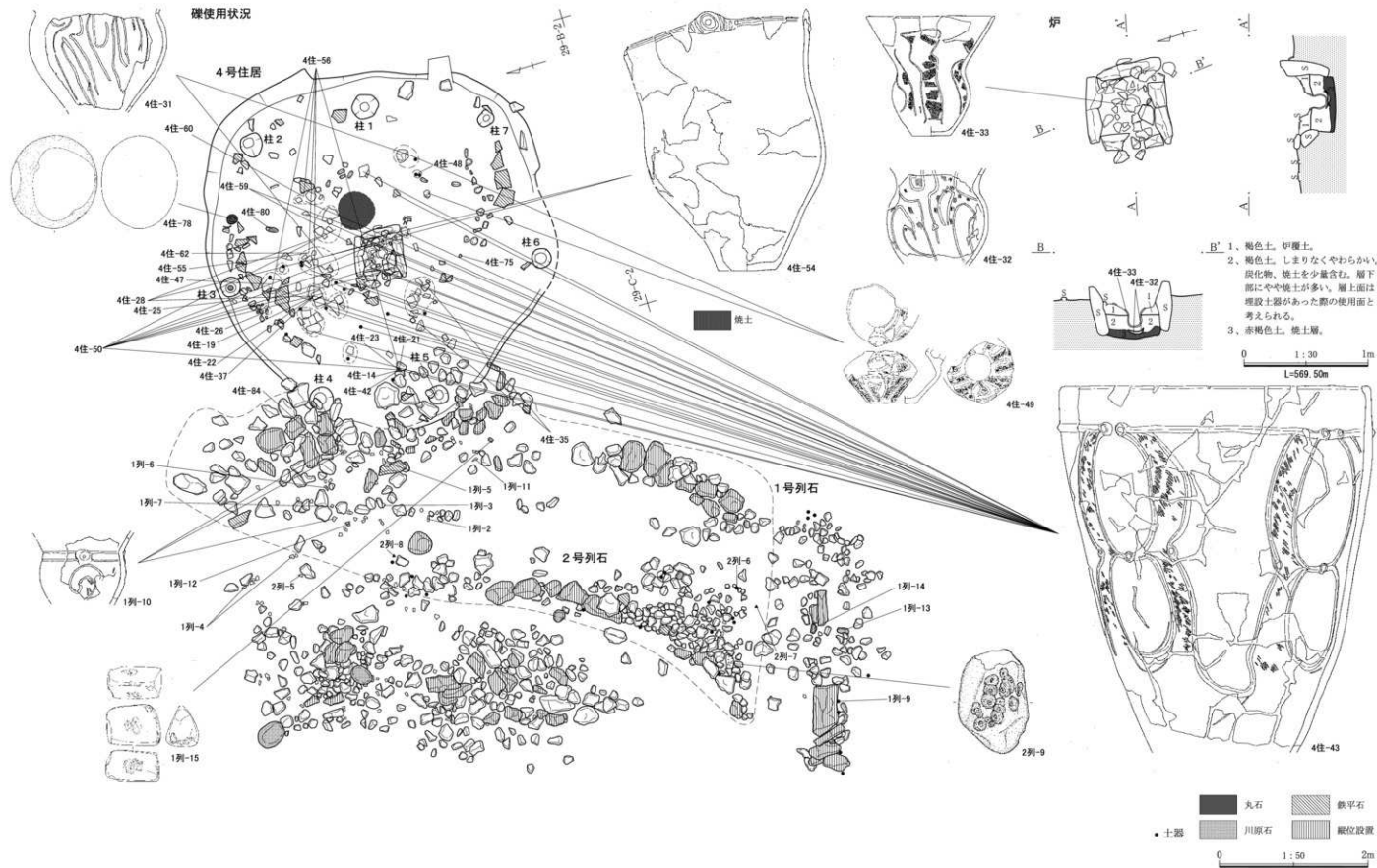
形 状 南西から北東方向に列を成す。西側に緩やかな弧状を描くような形状を呈する。29区1号列石と併行するように検出されている。列石の規模は、長軸が5.6mほど、短軸が0.7~1.3mほど。

下部遺構 なし

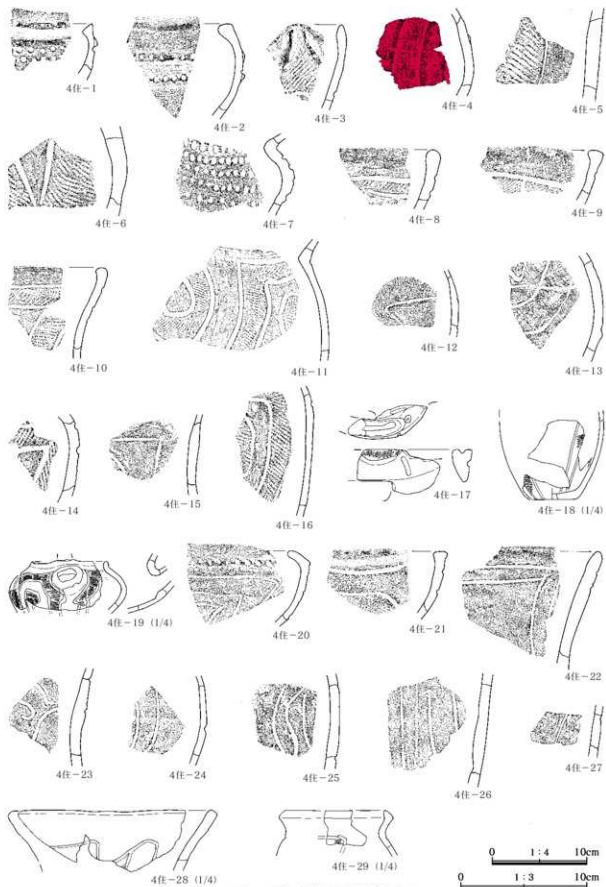
石材等 地山の礫を主体に、川原石や鉄平石などがわずかに散見できる。また、多孔石などの石器も



第123図 29区 4号住居 (1)、1・2号列石 (1)

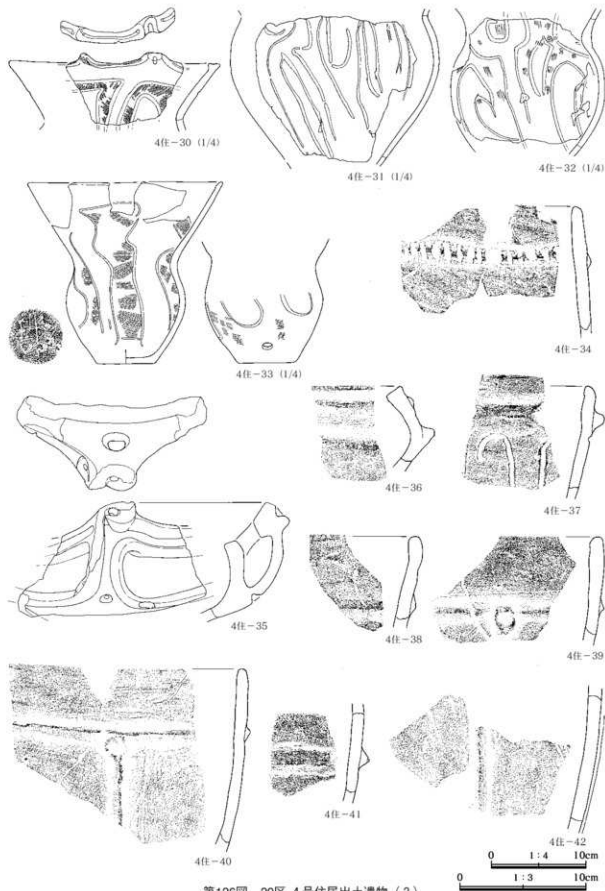


第124図 29区 4号住居(2)、1・2号列石(2)

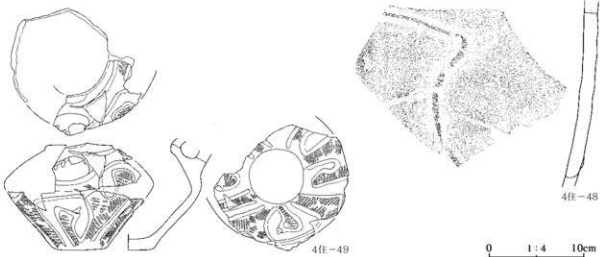
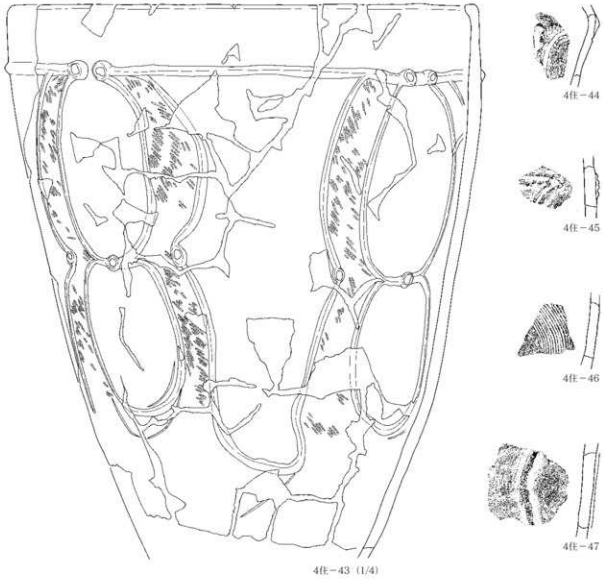


第125図 29区 4号住居出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

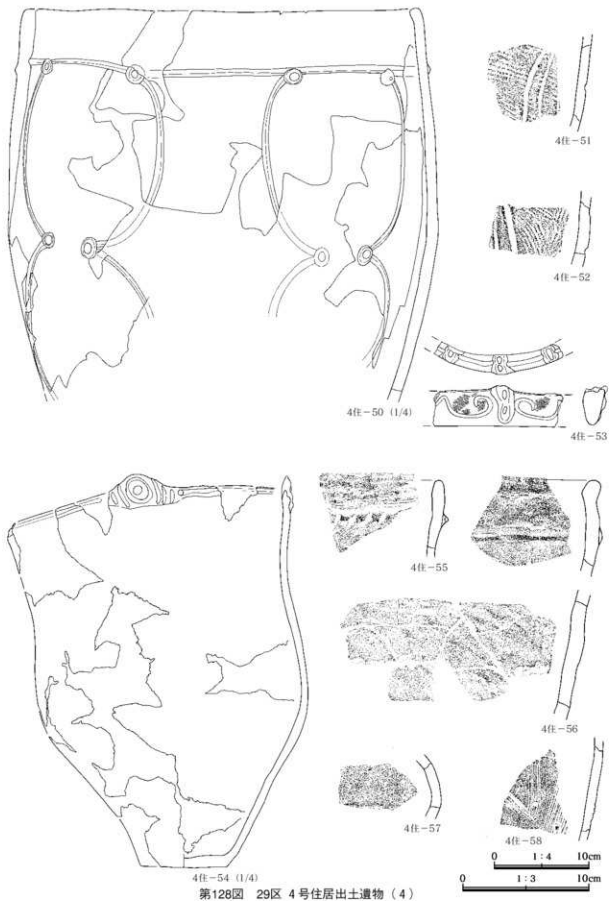


第126図 29区 4号住居出土遺物(2)

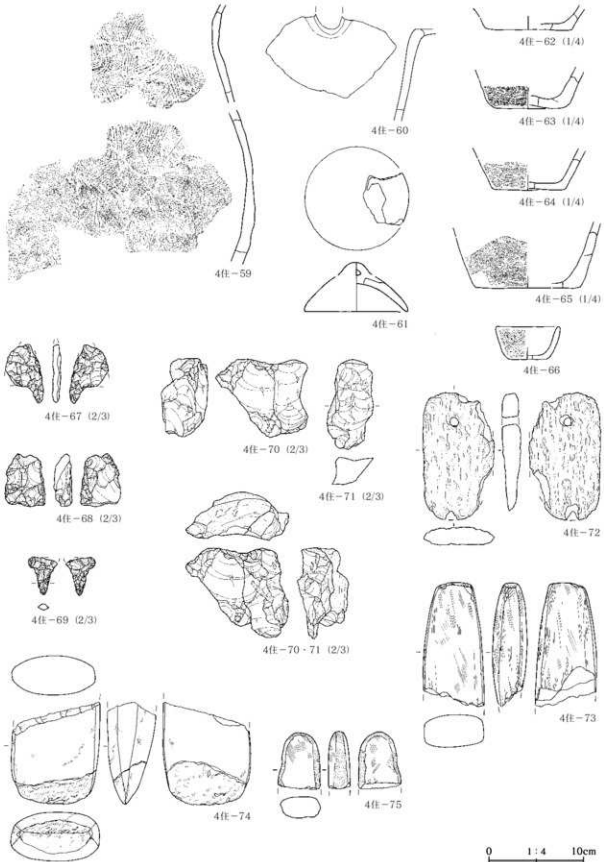


第127図 29区 4号住居出土遺物(3)

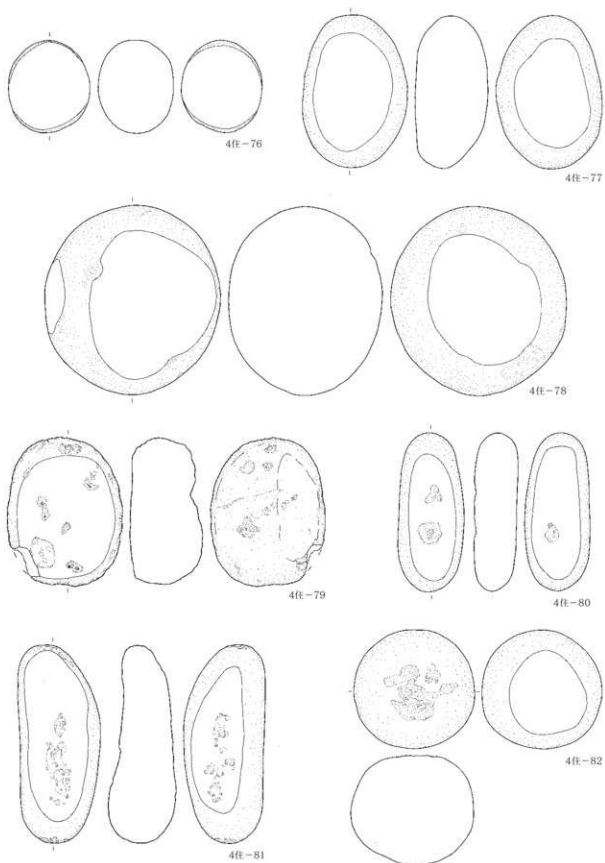




第128図 29区 4号住居出土遺物(4)

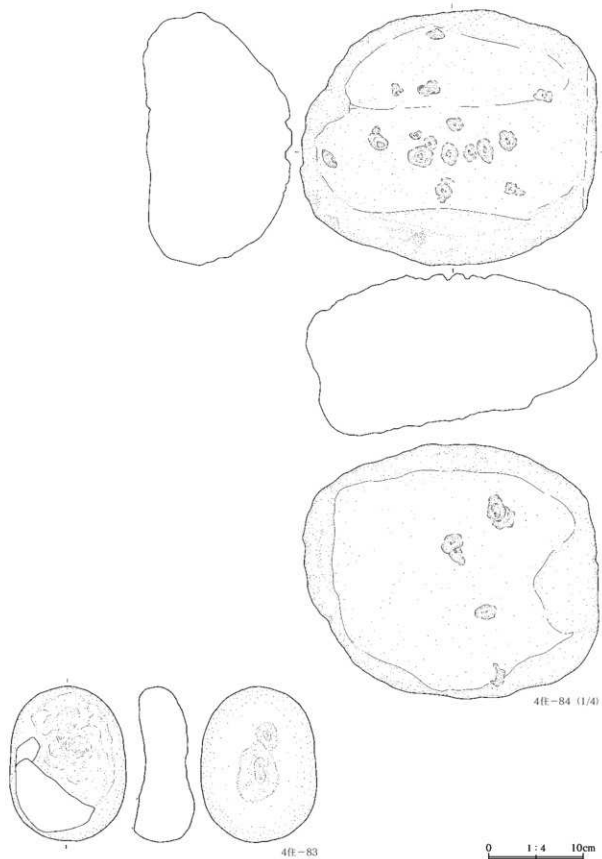


第129図 29区 4号住居出土遺物(5)



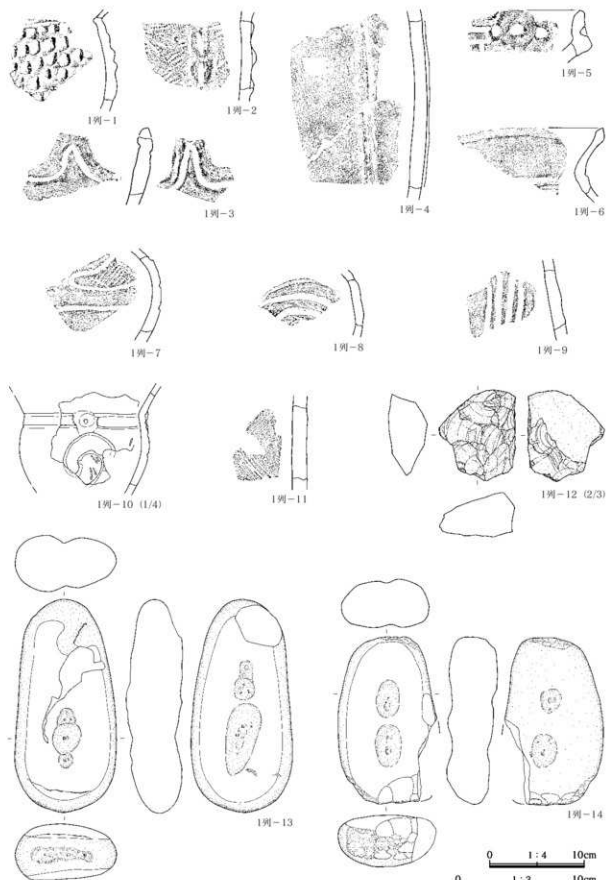
第130図 29区4号住居出土遺物(6)

0 1:3 10cm

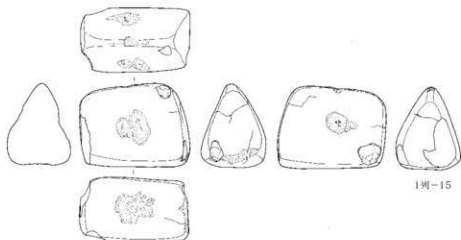


第131図 29区 4号住居出土遺物 (7)

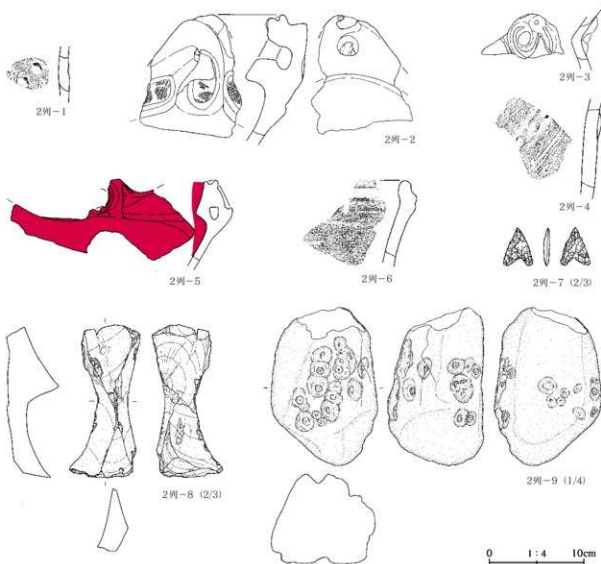
第3章 発見された遺構と遺物



第132図 29区 1号列石出土遺物 (1)



1列-15



2列-1

2列-2

2列-3

2列-4

2列-5

2列-6

2列-7 (2/3)

2列-8 (2/3)

2列-9 (1/4)

第133図 29区 1 (2) ・ 2号列石出土遺物



第3章 発見された遺構と遺物

出土した。2号列石の北西側には、縦位に据えられた礎や川原石の広がりも見られた。

遺物 出土土器は83点を数える。加曾利EⅢ式期から堀之内Ⅰ式期まで確認できた。主体となるのは称名寺式期から堀之内Ⅰ式期までで、石器は3点出土した。石鏃、石核、多孔石が各1点確認できた。

時期 縄文時代後期。遺物の出土状況や列石という遺構の性格から考えても、時期を特定することは難しい。出土遺物の総量把握の結果と29区4号住居との関係から当該期と判断した。ただし、住居に伴う列石の可能性もあり、図上では29区4号住居と同時期のように掲載している。

29区6号住居

調査年度 平成11年度

位置 A・B・C-3・4

経過 調査は平成11年度に行われた。住居主体部中央付近より石囲炉を検出したため住居と認定された。調査段階では、29区5号住居と6号住居の重複する2軒の住居を想定していたが、整理段階で検討した結果、1軒の住居である可能性が高いと判断した。また、5号住居に伴うと想定されていた29区1・2号列石は、6号住居に変更されたため、本住居には伴わないと判断した。

本住居の遺存状態は良好であり、主体部、出入り口ともに敷石が良好に検出された。炭化物や焼骨も多数出土している。「横壁中村遺跡(6)」で報告された29区3号土坑は、本住居覆土を掘削した可能性が高い。29区3号土坑は称名寺Ⅰ式期に比定され、土器とともに焼骨も出土している。

重複 29区7号住居と重複し、これに切られる。ただし、29区7号住居は遺存状態が悪く、検出状況からの重複関係は判然としない。29区2・4号土坑との重複関係も不詳。

形状 柄鏡形敷石住居。住居出入り口は、調査時に5号住居出入り口と考えられていた部分である。出入り口の規模は、長軸1.55mほど。短

軸は推定範囲でもあり判然としないが、1.53mほどか。

6号住居主体部の上面、5号住居調査時に確認された、やや歪んだ門を描くような礎の列は、周礎の可能性も考えられる。主体部の直径は4.0mほどで、隅丸方形に近い円形を呈する。壁高は、東側の遺存状態の良い場所で26cmほどであった。地形が低く傾斜している南西側、埋没谷の方向に出入り口部を取り付けていた。

主体部と出入り口部の間に、扁平な礎が横長、縦位に据えられ、境目を成すように見られた。また、扁平な礎に接して、小型の石囲い状の遺構が検出された。石囲い状の遺構底部には石が敷かれていた。18区15号住居にも同様の遺構が2箇所検出された。住居とともに称名寺Ⅱ式期であり、同時期の特徴的な遺構の可能性が考えられる。構築した意図も同様の可能性が考えられる。

床面 主体部及び出入り口部の敷石は、良好な遺存状態で検出された。主体部、出入り口ともに敷石が施されていたと考えられる。

敷石に使用された礎は鉄平石が大半であり、その他の扁平な礎はわずかであった。柱穴の内側には、大型の扁平な礎が敷き詰められ、その隙間を小型の礎が埋めていた。29区3号住居と同様、柱穴間を結ぶ箇所には小型の礎が列を成していた。

出入り口部には大型の扁平な礎が列を成すように検出された。出入り口部は主体部床面よりも50cmほど高く構築されていたと考えている。

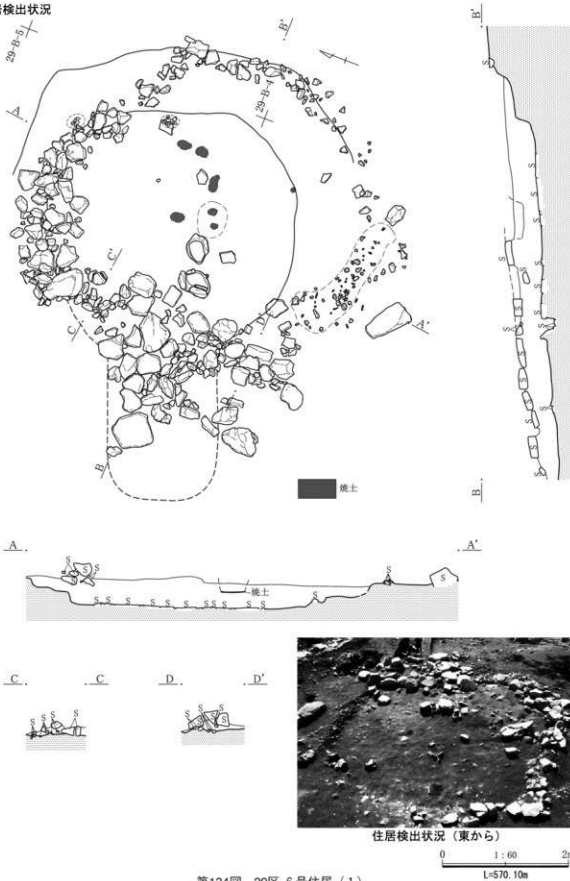
方位 N-74°-E

炉 方形石囲炉。炉は住居主体部ほぼ中央、わずかに出入り口部寄り検出された。鉄平石を4石使用し、構築されていた。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で86×77×38。

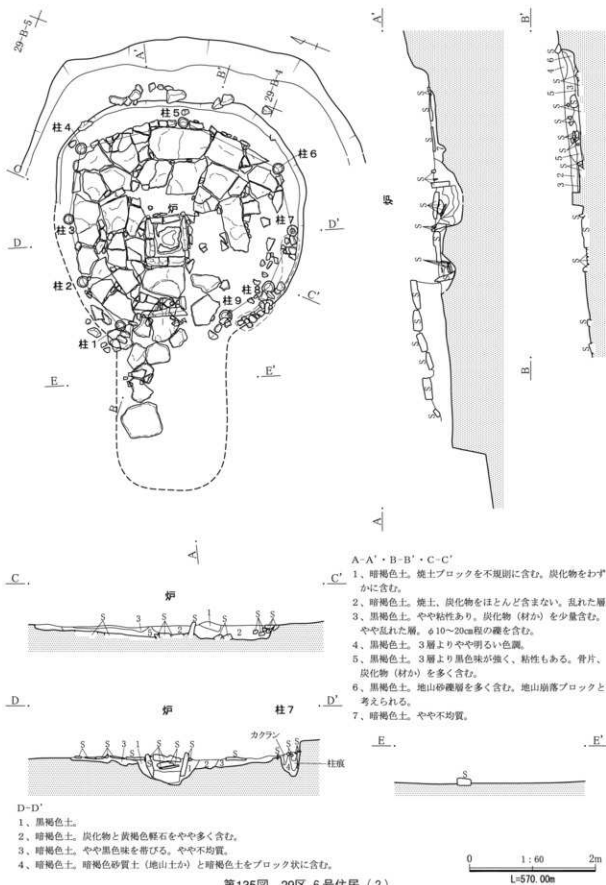
炉石は、被熱による剥離が顕著に見られた。また、炉内からは蓋をするように扁平な大型礎が検出され、その一部は鉄平石であった。

炉の南西隅には石棒を転用した敷石が正位に立てられ、対角線上の北東隅には凹石が立てられていた。

住居検出状況



第134図 29区 6号住居 (1)



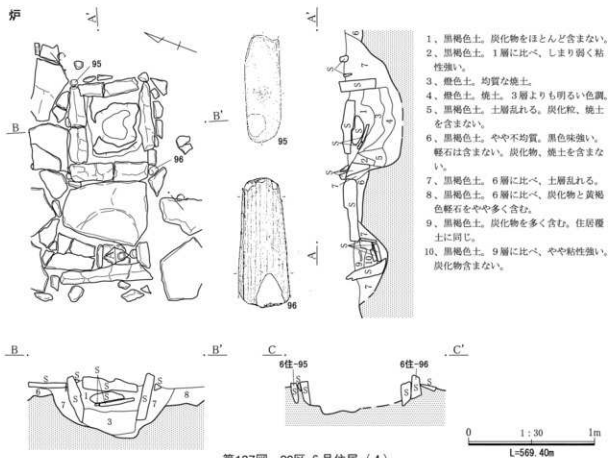
第135図 29区 6号住居(2)

礎使用状況



第136図 29区 6号住居 (3)

第3章 発見された遺構と遺物



第137図 29区 6号住居 (4)

石棒を転用した敲石、凹石は、ともに被熱痕跡が顕著であった(第137図参照)。

柱 穴 柱穴は9基検出された。柱穴は敲石の外側、主体部に沿うよう円形に検出された。企画性もあり、9基すべてが主柱穴となるであろう。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：17×15×33、柱2：18×17×39、柱3：16×15×34、柱4：17×17×31、柱5：17×15×39、柱6：17×16×43、柱7：17×16×36、柱8：19×18×34、柱9：18×14×30。

遺 物 住居の遺存状態が良好なためか、出土遺物は非常に多く1,013点の土器が出土した。勝坂式期から加曽利B2式期までと時期幅も広い。主体となるのは称名寺2式期から堀之内1式期までか。併せると163点の土器が確認できた。石器は32点出土した。磨石が10点と多く、その中には丸石も確認

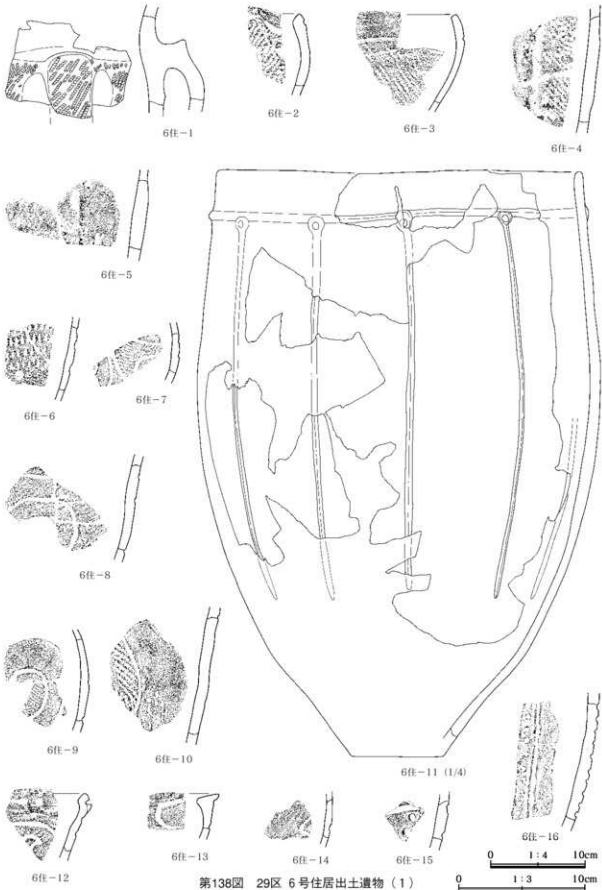
できた。黒曜石の剥片、碎片も多く42点、26.22g検出された。

焼骨も761.6gと多数出土しており、ほかの住居を圧倒する。出土した焼骨については、第4章に詳しい。また、「横壁中村遺跡(6)」で報告された29区3号土坑は、本住居の覆土を掘削した可能性の高いことが整理段階で確認できた。29区3号土坑からも、多数の焼骨が検出され、ニホンジカやニホンイノシシの骨と同定されている。

時 期 称名寺2式期。本住居より埋設土器は出土していない。住居より出土した土器は、称名寺2式、堀之内1式が多い。住居形態も考慮し、当該期の可能性が高いと判断した。

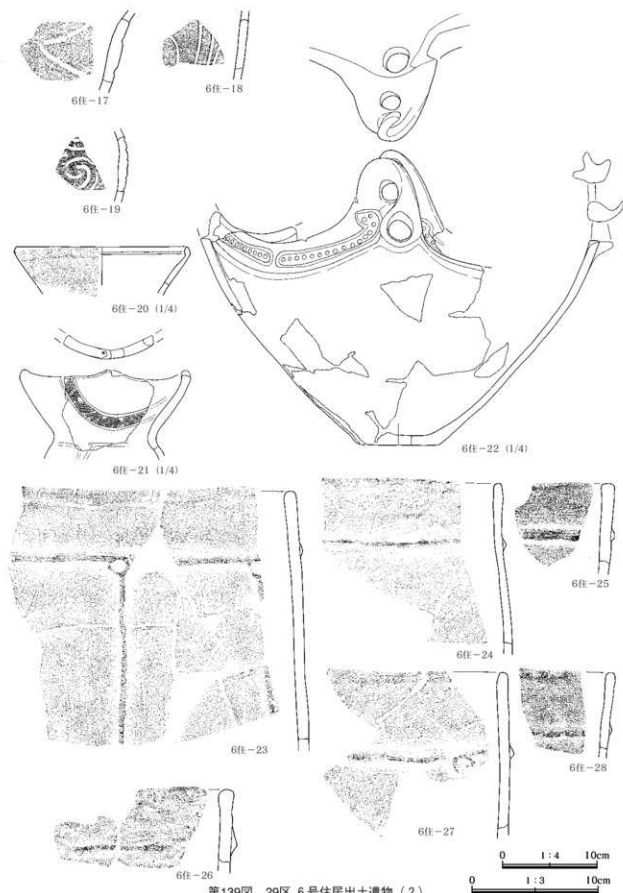
29区7号住居

調査年度 平成11年度

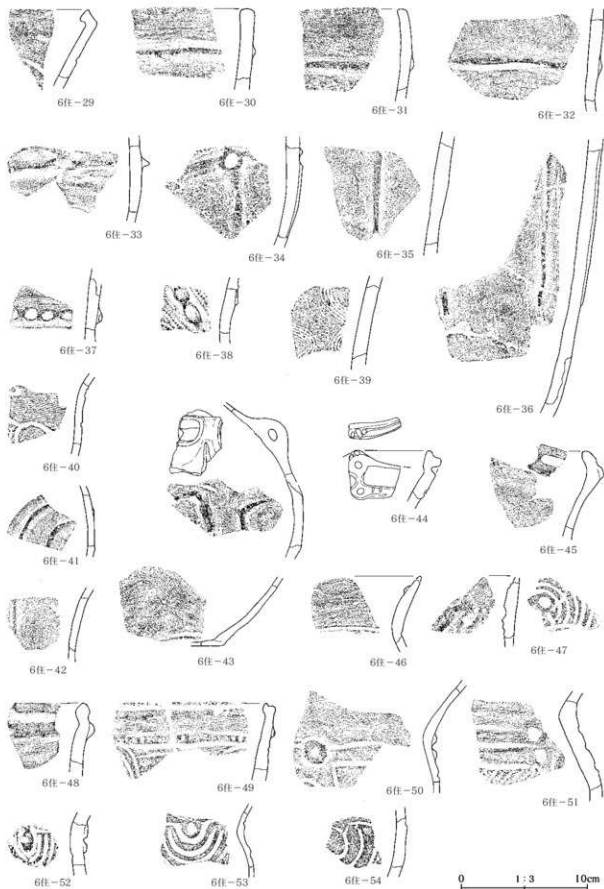


第138図 29区 6号住居出土遺物(1)

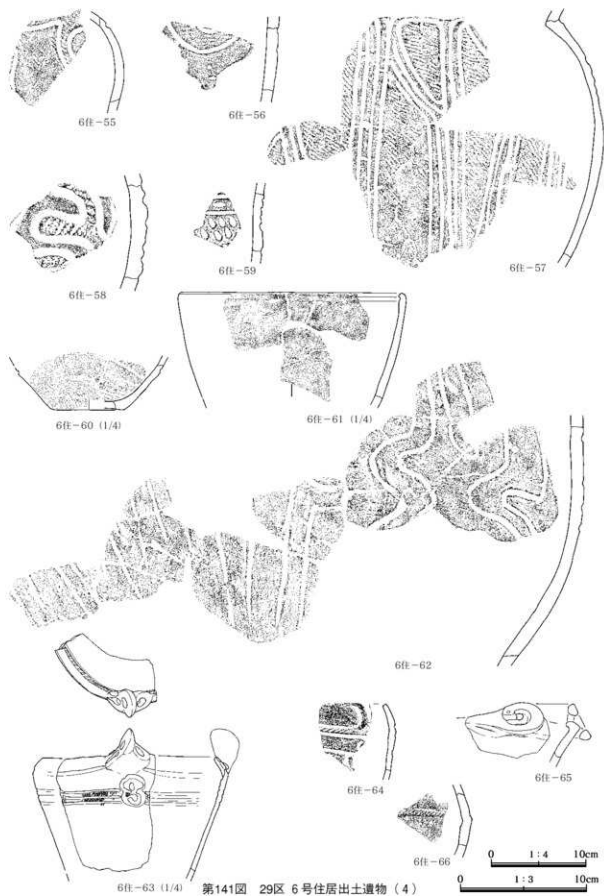
第3章 発見された遺構と遺物



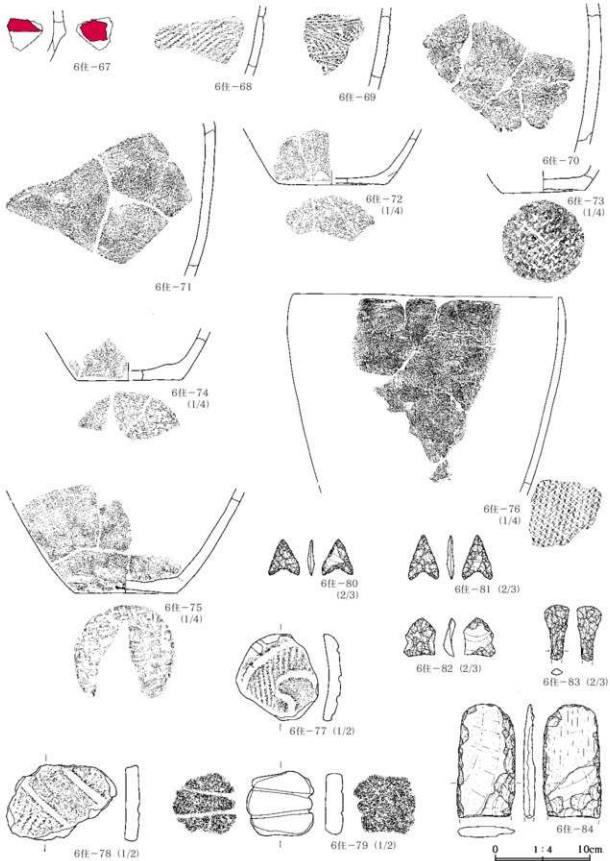
第139図 29区 6号住居出土遺物(2)



第140図 29区 6号住居出土遺物(3)

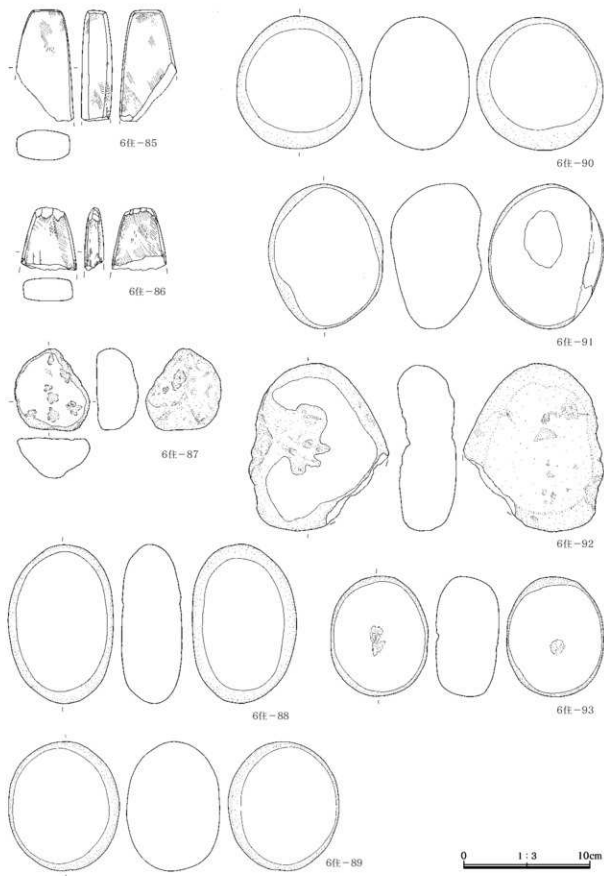


第141図 29区 6号住居出土遺物(4)

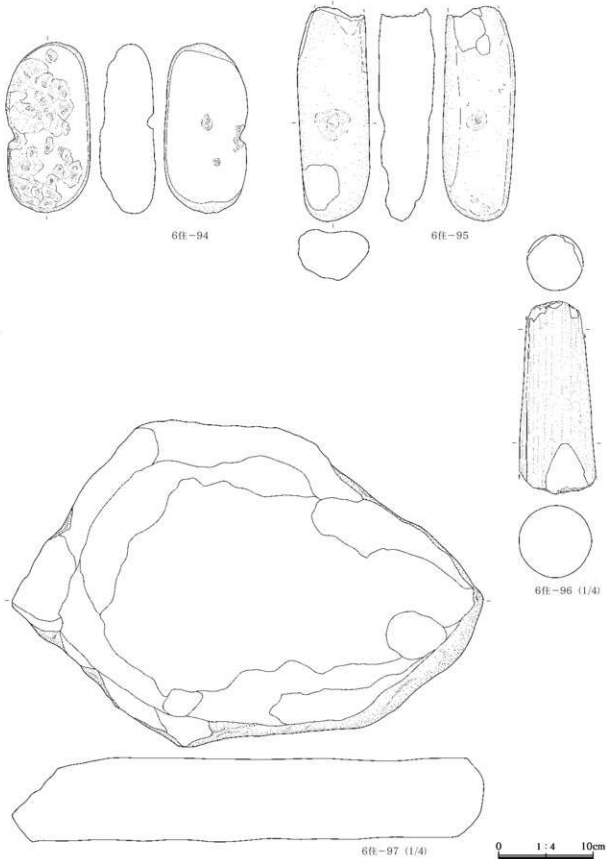


第142図 29区 6号住居出土遺物(5)

第3章 発見された遺構と遺物



第143図 29区 6号住居出土遺物(6)



第144図 29区 6号住居出土遺物(7)

第3章 発見された遺構と遺物

位置 B・C-3・4

経過 調査は平成11年度に行われた。遺存状態は悪かったが、想定される主体部中央付近より炉を検出したため住居と認定された。そのため、出入り口部については不詳。

重複 29区6・12号住居、29区5・6号土坑と重複する。29区6号住居、29区5号土坑を切り、29区12号住居、29区6号土坑に切られる。ただし、本住居の遺存状態は悪く、重複関係も不明瞭な部分がある。

形状 出入り口部は検出されていない。主体部も同様に検出できなかった部分はあるが、3.1mほどの円形を呈するものか。壁高は判然としなが、断面図からは32cmほどに計れる。地形は西側に傾斜しており、また炉の検出状況から考えても、西側に出入り口部が付く可能性が考えられる。

床面 遺存状態が悪く、敷石であったかどうか判断できない。出土状況から、床面はほぼ平坦であったと推測できる。

方位 N-84°-Eか。住居の遺存状態が悪く、方位については、炉の形状と地形の傾斜から判断した。

炉 石囲炉か。炉に残る礫の一部は、石囲炉の一部である可能性が考えられる。調査所見にも、一部の礫は原位置を保っているとの指摘があった。炉は、想定される住居主体部中央付近で検出された。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で86×77×38。

柱穴 柱穴は1基検出された。住居に伴う柱穴かは不詳。検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1:31×27×26。

遺物 出土土器は59点を数える。五領ヶ台式期から堀之内1式期まで確認できた。遺存状態の悪さからか、出土遺物は少ない。堀之内1式期がやや多いか。石器は6点出土した。磨石3点、台石も3点確認できた。

時期 堀之内1式期。本住居より埋設土器は出

土していない。住居より出土した土器は、堀之内1式がやや多いが、住居の遺存状態の悪さ、住居形態の不明瞭さ、出土遺物の少なさから考え、同時期に比定する根拠はやや希薄だ。住居時期から考えると、29区6号住居を切っているが、遺存状態が良好であるのは6号住居であり、再考が必要かもしれない。

29区8号住居

調査年度 平成10年度

位置 A・B-5・6

経過 調査は平成10年度に行われた。遺存状態は悪かったが、想定される住居主体部中央付近で炉を検出したため住居と認定された。また、住居北側は調査区外のため検出できなかった。

重複 なし

形状 主体部の一部は検出されなかったが、3.7mほどの円形を呈するものと推測できる。壁高は判然としなが、断面図からは52cmほどに計れる。

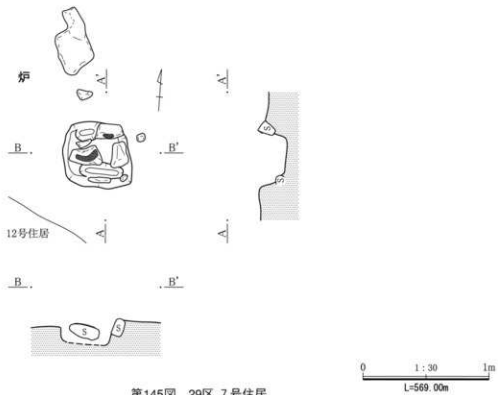
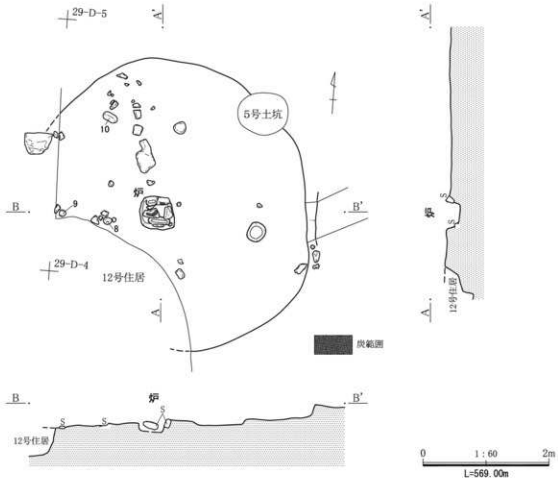
出入り口部は検出されていない。調査所見には、出入り口部を南側に想定していたようだが、地形は北または西側に傾斜しており、出入り口部も北西側に取り付けられていた可能性が高いだろう。

床面 遺存状態が悪く判然としない。ただし、波打つようだが鉄平石などの扁平な礫が検出されたことから、主体部には敷石が施されていた可能性が考えられる。調査所見では、縁辺に見られる鉄平石の一部は、原位置を保っていると指摘している。住居主体部の規模や形状は、この礫の出土状況から推測している。

方位 地形は北西方向に傾斜しているが、それ以外の手掛かりはなく、方位は不詳。

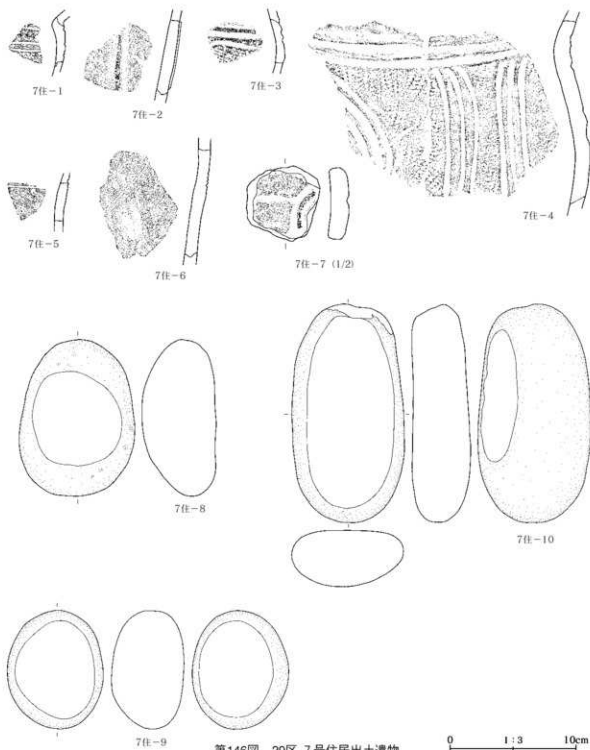
炉 土器埋設炉。炉は、想定される住居主体部中央付近で検出された。規模(長辺×短辺×深さ、単位はcm)は、確認面で90×80×25。

埋設されていた土器は、胴部下半のみで、正位に据えられていた。また土器内には、ほかの土器片も見られた。埋設土器は称名寺式である。



第145図 29区 7号住居

第3章 発見された遺構と遺物



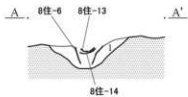
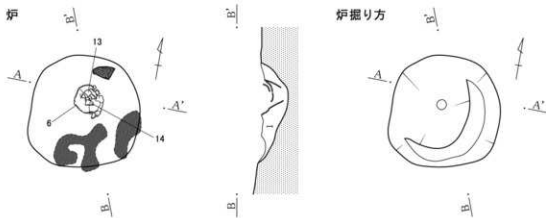
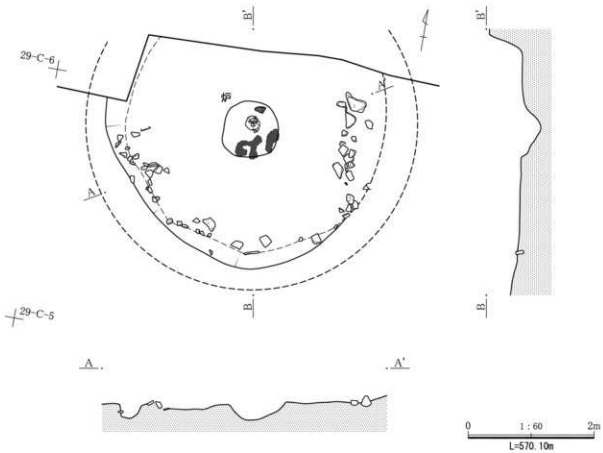
第146図 29区 7号住居出土遺物

柱 穴 検出されなかった。

遺 物 出土土器は80点を数える。称名寺1式期から堀之内1式期まで確認できた。堀之内1式が多いか。石器は6点出土した。石鏃1点、磨製石斧2点、石棒1点、多孔石1点が確認できた。検出さ

れた黒曜石の剥片も少なく、1点、0.4gであった。

時 期 称名寺2式期。炉内に埋設された土器等により当該期に比定した。

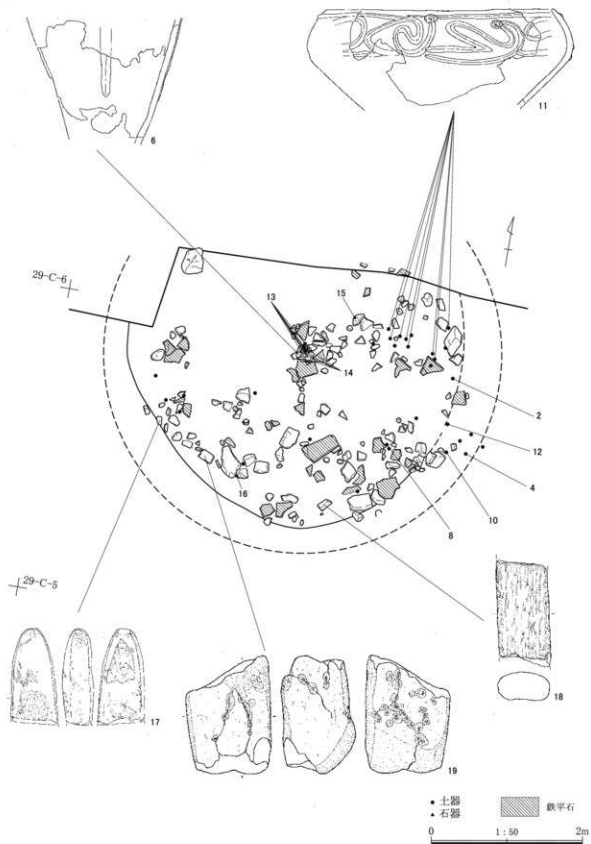


1、褐色土、北側上面には、やや厚くブロック状に焼土が入る。

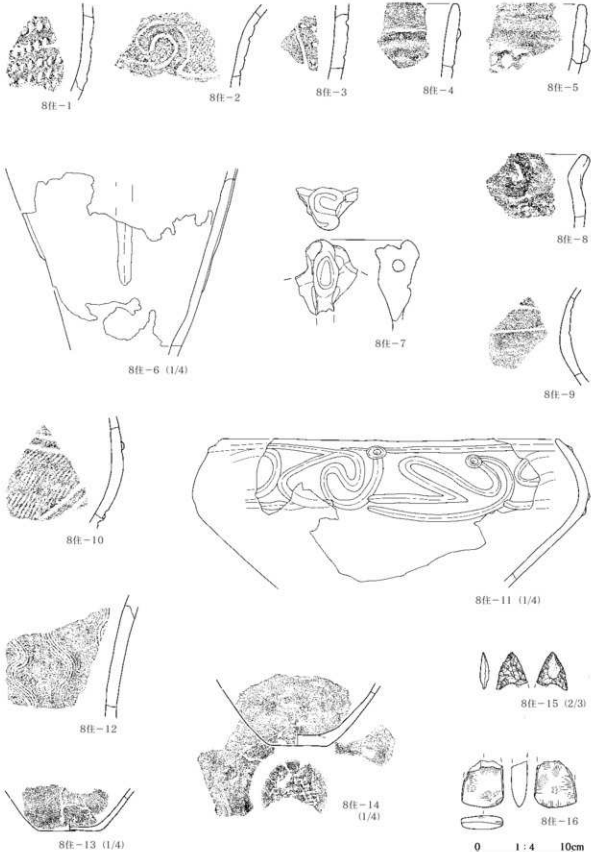
■ 灰範囲
■ 焼土

第147図 29区 8号住居 (1)

裸使用状況

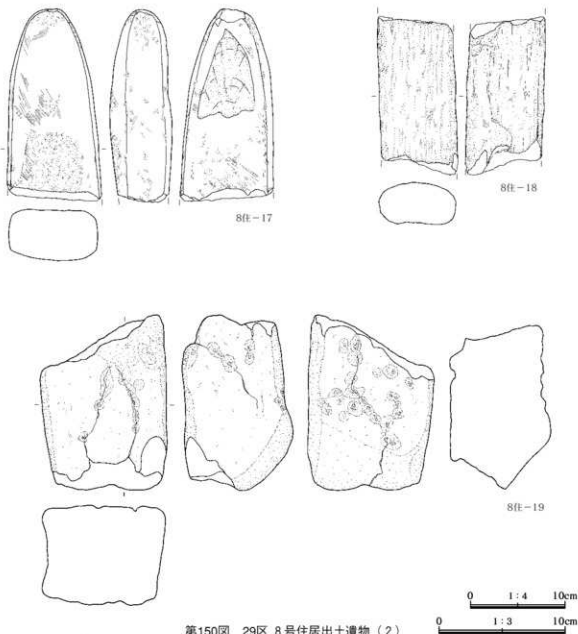


第148図 29区 8号住居 (2)



第149図 29区 8号住居出土遺物 (1)

第3章 発見された遺構と遺物



第150図 29区 8号住居出土遺物(2)

29区18号住居

調査年度 平成11年度

位置 E・F-6・7

経過 調査は平成11年度に行われた。想定される住居主体部中央付近で土器埋設跡を検出したため住居と認定された。住居は、北東側が調査区外であり、主体部の北東側過半は検出できていない。調査時より列石、配石が住居の一部または伴う遺構との認識ではあったが、列石、配石の範囲は何処までか、何処までを住居に伴う列石、配石と考えるか判

然としないうところであった。そのため、住居に伴う可能性の高い配石についても単独の遺構として調査された。最終的には、整理段階に、整理担当者によって、29区6号配石のみ18号住居に伴う遺構と判断し掲載している。ただし、配石の大半は住居出入口口部に成るものであろう。6号配石の出土遺物を概観すると、時期幅が広く、列石などの遺物が混在している可能性も考えられる。また、配石の形態も不明瞭で判然としないう。そのため、ここでは6号配石についても単独の遺構として報告しておきたい。

重複 29区4号列石と重複し、これに切られる。
形状 柄鏡形。敷石住居か。主体部の北東側過半は調査区外であり、その全容は不明瞭だが、4.6mほどの円形を呈すると考えられる。出入り口部は南西側、地形の傾斜する埋没谷方向に取り付く。出入り口部は、29区6号配石部分にあたる。

主体部と出入り口部との間には扁平な礫が縦位に据えられており、主体部との境目を成しているように思われる。同様の形態は、18区11号住居、13号住居、15号住居、29区6号住居などに見られる。
床面 遺存状態が悪く判然としない。出入り口部分で鉄平石などの扁平な礫が散見できることから、敷石が施されていた可能性はあるが、主体部については不詳。散見できる小型の礫が、敷石の隙間を埋めていたものかもしれない。

方位 N-56°-E

炉 土器埋設炉。炉は想定される住居主体部中央付近で検出された。規模（長辺×短辺、単位はcm）は、確認面で62×50。

埋設されていた土器は、口縁部から胴部上半部のみで、逆位に据えられていた。埋設された土器は加曾利EⅣ式から称名寺1式である。被熱痕跡も顕著であった。

炉の断面図は、整理段階に平面図より作成したものである。平面図にレベリングがなく、断面図にすべてを描くことはできなかった。炉の深さも同様の理由から不明。

柱穴 柱穴は4基検出された。出入り口部で検出された柱1・2は、主柱穴になるか。ほかの2基については、主体部の全容が不明瞭なため主柱穴になるかは不詳。

検出された柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：34×27×45、柱2：34×28×43、柱3：24×23×60、柱4：34×28×27、柱5：24×23×、柱6：21×20×。

遺物 出土土器は325点を数える。勝坂式期から加曾利B式期まで確認できた。主体となるのは称

名寺1式期。石器は10点出土した。石鎌2点、磨石3点、石棒、多孔石が各1点確認できた。黒曜石の剥片、碎片は11点、16.1g検出された。

時期 称名寺1式期。炉に埋設された土器は、加曾利EⅣ式から称名寺1式に比定できる。総量把握の結果では称名寺1式がやや多く、住居形態も頗る古いと考え、当該期に比定した。

29区6号配石

調査年度 平成11年度

位置 F-6

経過 調査は平成11年度に行われた。調査時よりその大半が29区18号住居出入り口部になる可能性が高いとの判断であったが、単独の配石として番号が付され調査された。

重複 29区4号列石と重複し、これに切られる。

形状 平面形状は不定形。大型の礫が集められた集石状または列石状を成している。列石状を成す部分が29区18号住居出入り口部になるものと判断した。規模（長辺×短辺、単位はcm）は、確認面で258×214。

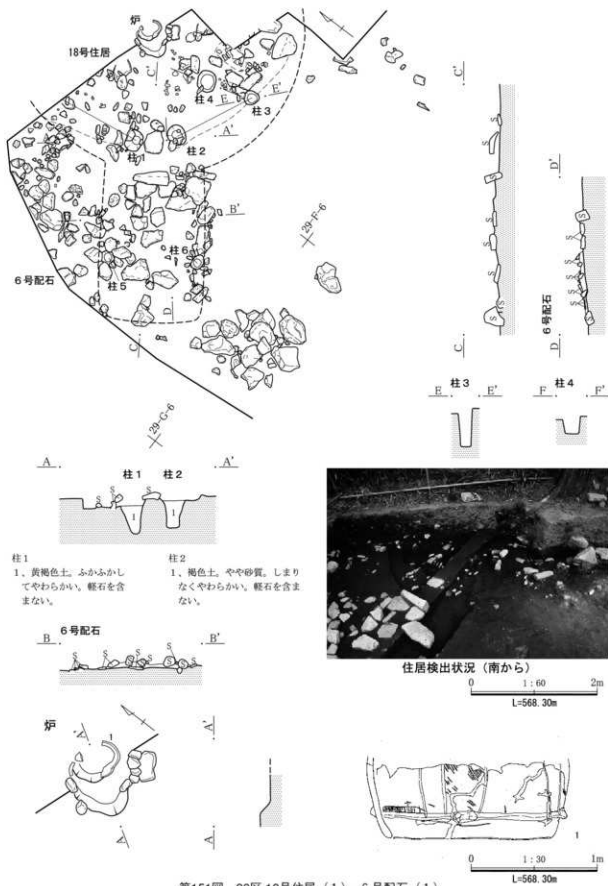
下部遺構 不詳

石材等 地山の礫が主体か。鉄平石や川原石などが、わずかに散見できる。鉄平石は、29区18号住居出入り口部に推定される範囲に多く確認できる。

方位 不詳

遺物 出土土器は36点を数える。数量は少ないが、加曾利EⅠ式期から高井東式期までと時期幅は広い。加曾利B式期、高井東式期がやや多いか。18号住居出入り口部になる可能性が高いことを考えると、ほかの遺構の遺物が混在した可能性があるだろう。石器は4点、石錐1点、磨石1点、有頭の石棒1点が確認できた。

時期 称名寺1式期。出土遺物は加曾利B式期、高井東式期がやや多く見られる。その大半は29区18号住居出入り口部になる可能性が高く、29区18号住居と同時期が妥当と考え、当該期に比定した。



柱1

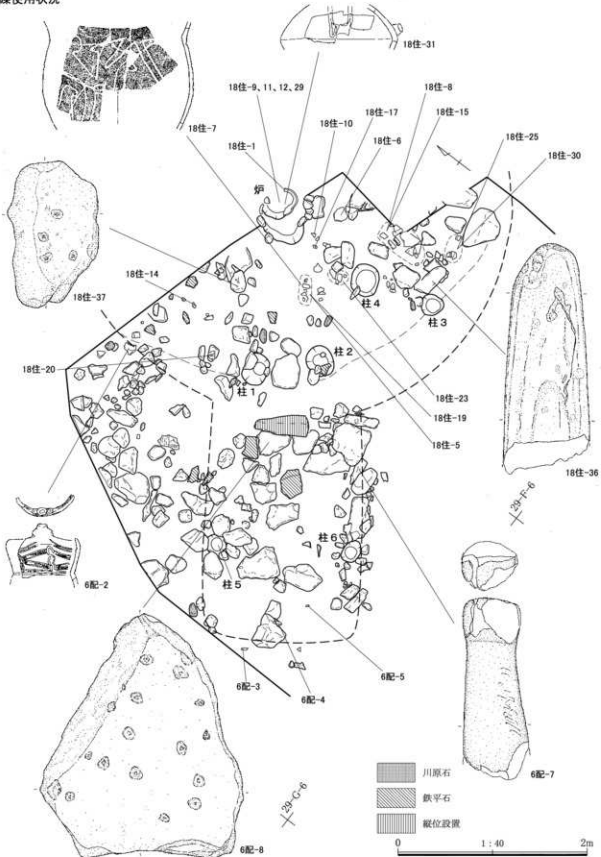
1. 黄褐色土。ふかふかしてやわらかい。軽石を含まない。

柱2

1. 褐色土。やや砂質。しまりなくやわらかい。軽石を含まない。

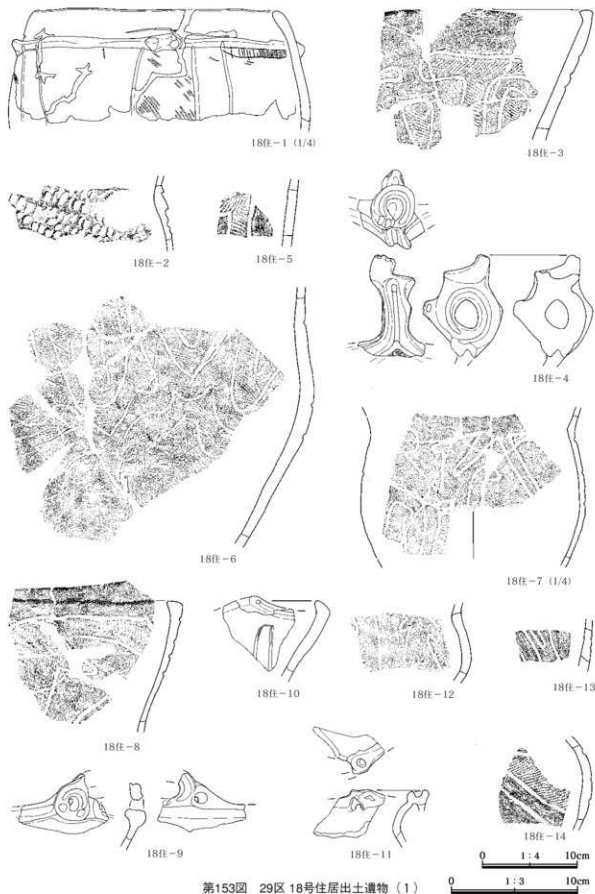
第151図 29区18号住居(1)、6号配石(1)

礎使用状況

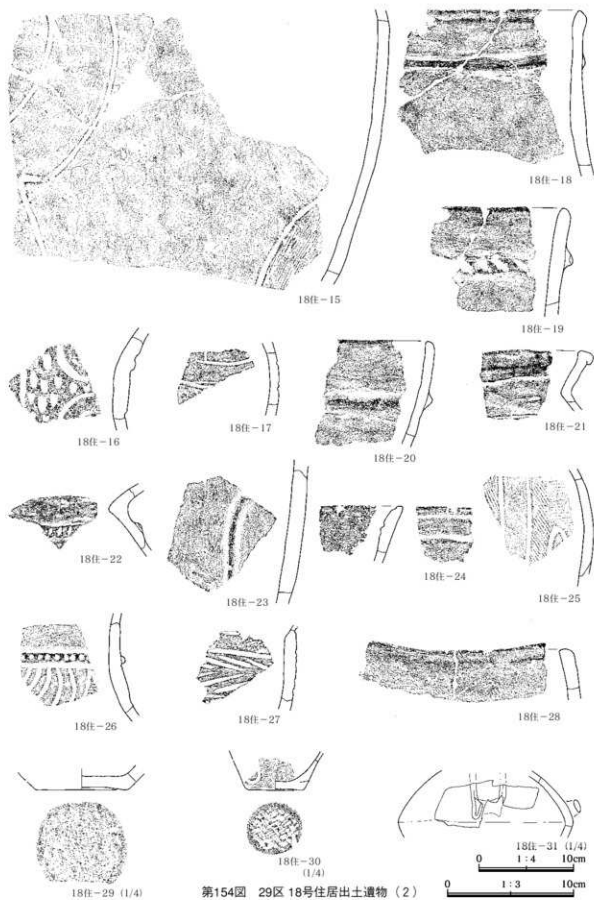


第152図 29区18号住居(2)、6号配石(2)

第3章 発見された遺構と遺物



第153図 29区18号住居出土遺物(1)



第154図 29区18号住居出土遺物(2)

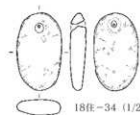
第3章 発見された遺構と遺物



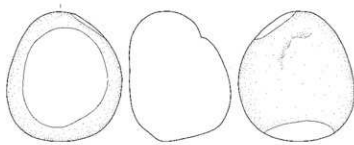
18fe-32 (2/3)



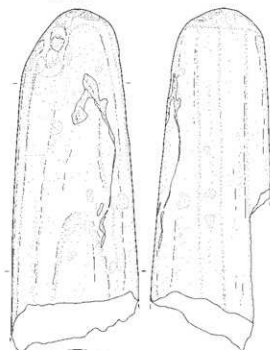
18fe-33 (2/3)



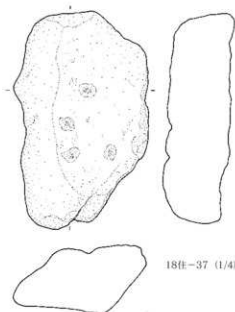
18fe-34 (1/2)



18fe-35



18fe-36 (1/4)

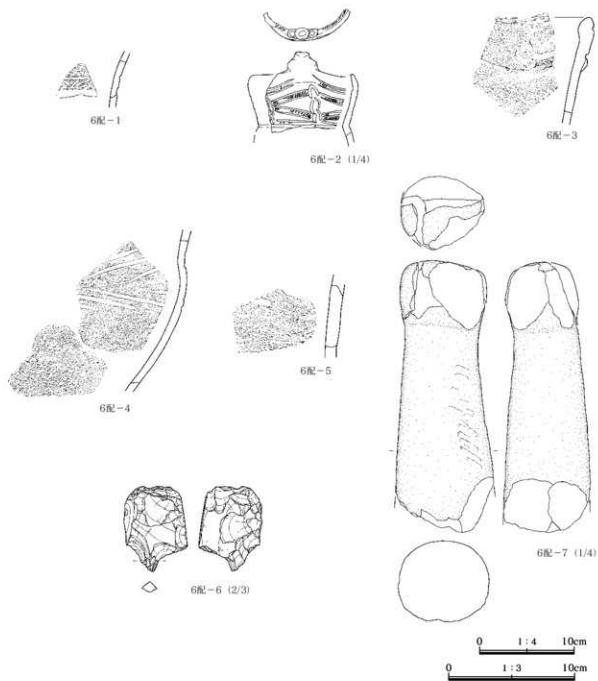


18fe-37 (1/4)

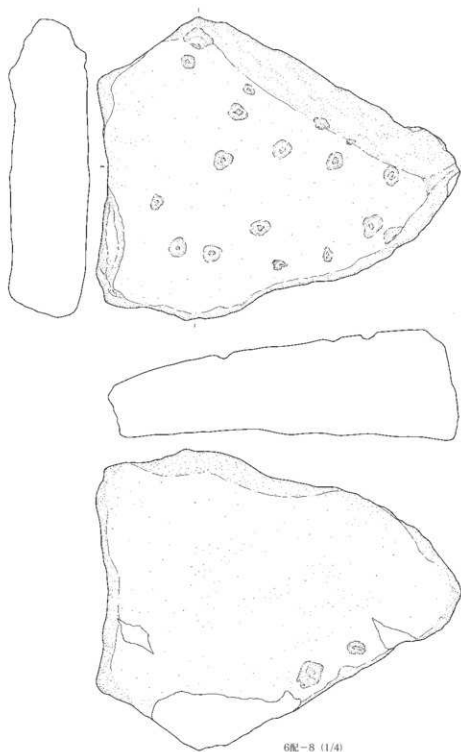


第155図 29区18号住居出土遺物(3)





第156図 29区 6号配石出土遺物(1)



6配-8 (1/4)

0 1:4 10cm

第157図 29区 6号配石出土遺物(2)

表3 縄文中村遺跡東側 縄文時代後期住居、列石、配石一覧表

区	遺跡名称	グリッド	時期	形状	長		伊	柱	切石(遺構/法)	備考
					幅	深さ				
18	11号住居	W-X-19,20, X-21	弥生中1式遺構	—	—	6000	570	18	—	—
18	13号住居	M-N-19,20, X-21	弥生中1式遺構	—	—	534	302	31	方形石圍炉	—
18	14号住居	M,N,O-20,N-21	弥生中2式遺構	(棟梁形)	(500)	4600	—	—	—	18区1号扉立,18区1号扉立(18区72号土坑条件等)との切石関係不明,配石か。
18	15号住居	Q-R-15,16,R-17	弥生中2式遺構	—	—	731	554	52	方形石圍炉	—
18	19号住居	P-Q,R-6,7, Q-R-8	縄文前1式(前期)	—	—	902	616	—	土葬埋設跡	18区5-6号列石,31-32号配石条件等,配石か。
19	27号住居	18KY-12,13,196A	縄文前1式遺構	1.7	—	980	620	40	土葬埋設跡	18区23号配石条件等,19区6号土坑との切石関係不明,配石か。
19	40号住居	E-12,13,G-13	縄文前1式遺構	—	—	598	411	75	土葬埋設跡	18区2号土葬埋設遺構との切石関係不明,配石。
28	16号住居	U,V-2,3	縄文前期	—	—	—	—	—	—	—
28	18号住居	W-X-3,4	縄文前期	(棟梁形)	(489)	4280	—	—	—	—
28	20号住居	W-X-5,6	縄文前期	—	—	497	463	20	(方形石圍炉)	—
29	3号住居	A,B,C-1,2,B-3,D-1	縄文前1式遺構	—	—	884	540(760)	150	土葬埋設跡	8,29区4号住居,1号土坑。
29	4号住居	A,B,C-2,3	弥生中2式遺構	(棟梁形)	(700)	4555	89	89	土葬埋設跡/方形石圍炉	7,29区1号土坑。
29	8号住居	A,B,C-3,4	弥生中2式遺構	—	—	425	400	26	方形石圍炉	—
29	7号住居	B,C-3,4	縄文前1式遺構	—	—	4370	(520)	(52)	(石葺)	—
29	9号住居	A,B-5,6	弥生中1式遺構	—	—	4400	(372)	(52)	土葬埋設跡	—
29	18号住居	E-7,8,7	弥生中1式遺構	—	—	435	460	4	土葬埋設跡	—

縄文時代後期住居に併せ列石、配石

区	遺跡名称	グリッド	時期	形状	幅	長さ	深さ	切石(遺構/法)		備考	
								幅	深さ		
18	5号住居	R-S-6,7,T-6	縄文前1-2式遺構	—	—	2500	100~200	—	—	18区18号土坑,18区19号住居に併せ。	
18	6号住居	S-U,V,W-X-7,8,8-	縄文前1-2式遺構	—	—	2240	100~240	—	—	18区19号住居に併せ。	
18	11号配石	Q,8	縄文前1-2式遺構	—	—	275	145	(108)	55	18区19号住居に併せ。	
18	32号配石	T-6,7	縄文前1-2式遺構	—	—	300	143	148	110	48	18区19号住居に併せ。
18	23号配石	18KY-14,15,196A	縄文前1式遺構	—	—	730	430	—	—	19区27号住居に併せ,18区4号住居,29号配石との切石関係不明。	
28	10号列石	W-X-3,V,W-4	縄文前1式遺構	—	—	1050	40~110	—	—	28区18号住居に併せ,28区12号住居との切石関係不明。	
28	11号列石	W-X-4,S,Y-4	縄文前1式遺構	—	—	1120	60~170	—	—	28区18号住居に併せ。	
28	16号配石	X-4,5	縄文前1式遺構	0.2	—	102	94	99	64	41	28区18号住居に併せ。
29	11号列石	C-3,3,D,3-E-1	縄文前期	—	—	600	70~130	—	—	29区1号住居に併せ。	
29	23号配石	C-3,3,D,3-E-1	縄文前期	—	—	560	70~130	—	—	29区1号住居に併せ。	
29	6号配石	E-6	弥生中1式遺構	(棟梁形)	258	234	—	—	—	29区18号住居の出入り口跡。	

※本報告書にて報告された遺構一覧表であり、併付は確認していない。

